令和３年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉　川　大　学

大学 FD 委員会

大学院 FD 委員会

は　じ　め　に

—FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をミクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。ミクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会および大学院 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はミクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、ミクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。令和 3 年度は新型コロナウイルス禍で従来のアクティブ・ラーニングによる授業方法での実施は難しく、オンライン授業・ハイブリッド授業の中、FD 実施のため大学 FD 委員会と大学院 FD 委員会が組織的かつ体系的に FD を実施してきました。今回はそういった事例も報告いたします。今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長
教 学 部 長　伊 従　記 章

「求める教員像」

玉川学園の建学の精神を体し、その使命を自覚し互いに人格を尊重し、常に能力の開発・向上を目指し一致協力して本学の発展に寄与できる教員であること

1．玉川大学学則第 1 条に定めるとおり、玉川学園建学の理想にかんがみ、「全人教育」をもって教育精神とし、広い教養と深い専門の学術の理論及び応用を教授すること

2．学校法人玉川学園コンプライアンス方針に従い、教育・研究活動を推進すること

目　　次

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
（１）　委員会の目的 1
（２）　委員構成 1
（３）　今年度の活動計画 2
（４）　活動状況 3
（５）　活動の成果 4
（６）　今後に向けて 5
２．学部の活動 7
３．教師教育リサーチセンターの活動 53
４．ELF センターの活動 56
５．授業アンケート 69

Ⅱ　大学院 FD 活動報告

各研究科の活動 108

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会
（１）　研修プログラム内容 124
（２）　配付資料・参考資料 125
（３）　実施の成果 126

参考資料

１．大学 FD 委員会の議事内容 130
２．大学院 FD 委員会の議事内容 132
３．「授業アンケート」様式 133
４．玉川大学 FD 委員会規程 135
５．玉川大学大学院 FD 委員会規程 137

※本文中の記載内容について
・役職名称は、令和 3 年度当時の記載とした。

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

（１）委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

① 玉川大学の教育理念を実現するため。
② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
③ 大学大衆化時代に対応するため。
④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

（２）委員構成

＜大学 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学部	長谷川洋二
委員	農学部	肥塚信也
委員	工学部	三木秀夫
委員	経営学部	長谷川英伸
委員	教育学部	高平小百合
委員	芸術学部	橋本順一
委員	リベラルアーツ学部	梶川祥世
委員	観光学部	鎌田伸尚
委員	ＥＬＦセンター	チャイクル，ラサミ
事務担当	教学部事務次長（教務事項担当）教学部授業運営課長	島田健二
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子

＜大学院 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学研究科人間学専攻	林大悟
委員	文学研究科英語教育専攻	工藤洋路
委員	農学研究科資源生物学専攻	佐々木謙
委員	工学研究科システム科学専攻	加藤研太郎
委員	工学研究科機械工学専攻	小酒井正和
委員	工学研究科電子情報工学専攻	佐々木寛

委　　員	マネジメント研究科マネジメント専攻	神　谷　　渉
委　　員	教育学研究科教育学専攻	原　田　　眞　理
委　　員	教育学研究科教職専攻	佐　藤　　修
委　　員	脳科学研究科脳科学専攻/心の科学専攻	酒　井　　裕
事務担当	教学部事務次長（教務事項担当）教学部授業運営課長	島　田　健　二
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子

（３）今年度の活動計画

レベル	研修名	目的	内容	開催時期
全学	大学教育力研修（FD・SD）	授業の内容及び方法の改善を図り教員個々の教育研究活動等のより一層の充実を目指す(FD)とともに、本学の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させる(SD)ことを目指す	■基調講演（FD・SD 研修） ■分科会（FD 研修） ・授業手法に関するワークショップ ・現況の教育的課題に関するワークショップ ・各学部事例報告　等	2 月 18 日
	授業手法（アクティブ・ラーニング）に関するワークショップ	アクティブ・ラーニングの実施促進と強化ならびに遠隔授業等に対応した授業手法の修得	・アクティブ・ラーニングを前提とした授業計画 ・授業時間外の学修を充実させる授業計画 ・授業改善につながるリフレクションの方法 ・教学IRと授業改善の接続等	年 2 回
	ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ	アクティブ・ラーニングを活用した授業で習得した能力を評価する体制を構築するため、ルーブリック指標による成績評価手法を習得する	・ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ ＊新任教員対象	年 1 回（隔年）
	授業参観	授業評価の高い授業内容（手法）の共有と授業改善	各学部から選出された授業の参観 （公開対象：教職員）	各学期
職位別	新任教員研修	玉川学園の建学の精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解し、専任教員としての業務に必要な情報を修得する	・玉川大学の教育理念 ・大学教員の勤務 ・ICT 教育の活用 ・教学システム ・教学事項 ・学生支援　等	3 月中旬

	非常勤教員対象研修	本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認する	・本学が取り組む教育改革について ・授業手法について	3月下旬
学部	学部 FD 研修	教員個々の授業と教授法の開発	講演会、研修会、ワークショップ　等 （例：ハラスメント防止研修）	随時
その他	FDer 養成研修	実質的 FD 活動の推進のため各学部 1 名配置することを目的に養成講座を開催	FD 活動の振り返り　等	―

（4）活動状況

＜令和 3 年度＞

5 月 10 日	第 1 回　大学 FD 委員会　開催
5 月 19 日	第 1 回　大学院 FD 委員会　開催
7 月 1 日	第 2 回　大学 FD 委員会　開催
9 月 14 日	第 2 回　大学院 FD 委員会　開催
9 月 15 日	第 3 回　大学 FD 委員会　開催
12 月 10 日 ～1 月 31 日	令和 3 年度 大学 FD／SD 研修会「ハラスメント防止研修」開催（動画視聴） （講師）桑島 英美 本学園顧問弁護士
12 月 14 日	令和 3 年度 大学 FD／SD 研修会「新型コロナウイルス感染症 ～今後の予測と感染症の歴史～」開催（オンライン） （講師）保健センター 健康院　庭野裕恵 院長
1 月 12 日	第 4 回　大学 FD 委員会　開催
2 月 18 日	令和 3 年度　大学教育力研修　開催（オンライン） 基調講演「構造的理解を外在的行為化するキットビルド概念マップによる学習・教授の支援と評価」 （講師）広島大学・玉川大学・近畿大学 学習工学研究グループ 玉川大学名誉教授・学術研究所特別研究員 茅島路子 氏 広島大学大学院先進理工系科学研究科准教授 林 雄介 氏 近畿大学工学部情報学科講師　山元 翔　氏 分科会 ①　「大学・研究機関での安全保障輸出管理」 （講師）東海大学総合科学技術研究所 客員教授　中田修二 氏 ②　「座位と立位を変えて学ぶ新しい学びスタイルを常識に―その効用と実践のしかた」 （講師）玉川大学大学院工学研究科客員教授　阿久津正大 氏 ③　「ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ」

	（講師）高知大学 講師　俣野秀典氏 ④ 「ELFセンター教員によるコンテンツ科目の英語化ワークショップ」 （講師）ELFセンター　准教授・センター長代理 マクブライド，ポール ELFセンター　准教授　祐乗坊由利ジョディー ELFセンター　助教　キム，ミソ
3月14日	令和4年度　新任教員研修会　開催
3月24日	第3回　大学院FD委員会　開催
3月25日	第5回　大学FD委員会　開催

その他、学生による授業アンケートを教学システム（UNITAMA）のアンケート機能を利用し、Webにて計画通り実施した。一部の集中科目を除いた全科目を対象として、春学期と秋学期の期中および期末に合計4回行った。アンケートの結果については、各教員がUNITAMAにて確認できるほか、「個人レポート」として集計結果を対象教員に配付している。また、大学FD委員会にてユニバーシティ・スタンダード（以下US）科目・学科専門科目の学部比較を資料にまとめて報告し、各学部での授業改善の取組に活用できるようにした。なお、各学部及びUS科目のアンケート結果は本学のホームページにて公開している。

秋学期には、授業方法を共有し、自らの授業の改善につなげることを目的として、全学部およびELFセンターにて授業公開を実施した。参加者数等の詳細は（5）活動の成果に記述する。

（5）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発なFD活動を行うことができた。

12月に本学保健センター健康院庭野裕恵院長を講師としてオンラインにて実施した新型コロナウイルス感染症に関する大学FD／SD研修会は、録画の動画視聴も含め、281名が受講した。「コロナ禍で教育・研究を実施するうえで、感染防止対策についての理解を深め、適切に対応できるようになること」を目的とした研修を計画通り開催することができた。受講報告書における充実度は、肯定回答が96%であり、「感染症の歴史的な経緯、COVID-19とその変異種について、知識を体系的に整理することができた」、「ウイルス、ワクチン、治療薬について多角的な知識を得ることができとても有意義だった」、「予測、対策含め、今後に活用できる内容だった」、「COVID-19をめぐる状況は時々刻々と変化していくため、今後の見通しを得る上で情報をアップデートできる機会を設けてほしい」といった意見や感想が寄せられた。新型コロナウイルス感染症の拡大状況や社会情勢に応じて、研修会の開催等により今後も必要な情報を提供できるよう検討する。

12月から1月にかけて本学園顧問弁護士の桑島 英美氏を講師としてハラスメント防止研修（動画視聴）を、全学の教職員を対象として実施した。受講者からは、「ハラスメントについて、被害者にも加害者にもならないということは非常に重要であることを学んだ。大学はアカデミックハラスメントが起こりやすい環境であるため、日頃の自身の言動については最大限の注意を払って学生指導していきたい」、「ハラスメントについては、コロナ禍の状況下だからこそ加害者にも被害者にもならないために気を付けなければならない」、「ハラスメント防止について

は、つい忘れることのないよう定期的に研修する必要があると思う」、「オンラインでのハラスメント等、新しい課題も生まれてきているので、自分も気を付けると同時に、風通しの良い関係性をつくっていきたい」との感想があった。なお、令和2年度までは各学部・研究科においてハラスメント防止研修を実施していたが、令和3年度は人事部及び大学・大学院FD委員会が取りまとめ、大学全体の取組として実施した。ハラスメントの防止について大学全体に統一した情報を提供し、ハラスメント対策の強化・徹底を図ることができた。

2月18日開催の大学教育力研修では、玉川大学・広島大学・近畿大学 学習工学研究グループの茅島路子氏、林雄介氏、山元翔氏をお招きし、基調講演として「構造的理解を外在的行為化するキットビルド概念マップによる学習・教授の支援と評価」についてご講演いただいた。基調講演には323名が参加し、参加者からは「基調講演で紹介されたキットビルド概念マップは学術的かつ実用的なもので、是非授業で同マップを活用し学生の授業の理解・共感を高めたい」、「実際に講演を聴くだけでなく、キットビルド概念マップを体験することができて良かった」、「馴染みがない学習工学という分野について知ることができた点はとても有意義な研修だった」、「新しい教育方法を知ることができ、自身の教育にも活用できそうであると感じた」といった感想が寄せられた。なお、基調講演について「とても充実していた」が26%、「充実していた」が65%であり、9割以上が肯定回答であった。午後は、4つの分科会を開催し、法令や学修環境、成績評価の方法や教授法等の情報を提供することができた。今後の授業実践等において活用されることが期待される。なお、分科会の一つとして開催した「ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ」は、令和2年度以降の新任教員を含む未受講者を対象として、37名が受講し、教育評価の基本的な原理、さまざまな方法と工夫を紹介したうえで、学生の学修を促進させる教育評価のあり方について参加者が活発な意見交換を行うことができた。

秋学期には、全学部およびELFセンターにおいて授業公開を実施した。対面またはオンライン方式にて17科目が公開され、合計17名が参観した。学生の授業アンケートの結果等も参考にしながら各学部において公開する授業を選定し、約7割の科目は他学部の教員も参観可能とした。実施後、大学FD委員会において、FD委員より「今後の授業実践に非常に参考となる授業公開であった」と報告がされた。しかしながら、参観者数が少ない状況にあり、大学教員が互いの授業を参観することへの抵抗感があるという声も聞かれる。今後は、実施方法、授業の選定等により参観者数を増やすことが課題となる。

3月に実施した令和4年度採用者向けの新任教員研修会の内容及び成果については、Ⅲ章の「教員研修」にて詳細を後述する。

非常勤教員研修会は、非常勤講師のみを対象とした教授法等の研修は実施できなかったが、大学教育力研修をはじめ各種研修に任意で参加できるようにし、非常勤講師を含めたFD活動を推進した。

（6）今後に向けて

令和4年度は、すべての授業が対面方式となる。令和3年度の新型コロナウイルス感染症に関する研修会での情報を活用して感染防止対策を徹底し、安心・安全な学修環境を整備したうえで授業を開講する。また、新型コロナウイルス感染症等による学生の心の問題とその対処法についても喫緊の課題であり、今後、研修会等の開催を検討する。

令和2年度までは、コロナ禍における遠隔授業の対応を迫られ、オンライン授業に焦点をあ

てた研修を主に開催してきたが、令和 3 年度より対面授業を拡大し、令和 4 年度には全科目が対面方式となることから、対面授業の教授法およびその改善に資するアクティブ・ラーニング等のワークショップも検討していきたい。

なお、今年度の大学教育力研修については学内の教職員を対象としたが、次年度以降は学外にも公開する予定である。

最後に FDer については、各学部に配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、FDer にどのような役割を担ってもらい、今後 FD をどのように進めていくのかを明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、大学 FD 委員の役割と、これまでの各学部の FD 担当、新たな FDer の役割について、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

２．学部の活動

令和３年度における各学部 FD 活動状況一覧

<table>
<tr><th rowspan="2">学部</th><th rowspan="2">各学部
FD 委員会
の構成人数</th><th rowspan="2">各学部
FD 委員会
の開催回数</th><th rowspan="2">学部研修会</th><th colspan="2">学生による授業アンケート※の実施</th></tr>
<tr><th>実施時期</th><th>公表</th></tr>
<tr><td>文 学 部</td><td>６名</td><td>６回</td><td>学内実施</td><td rowspan="8">春学期
（期中・期末）
秋学期
（期中・期末）
（通信教育課程は
スクーリングの都度）</td><td rowspan="8">学内外
（本学 HP）</td></tr>
<tr><td>農 学 部</td><td>９名</td><td>２回</td><td>学内実施</td></tr>
<tr><td>工 学 部</td><td>６名</td><td>２回</td><td>学内実施</td></tr>
<tr><td>経営学部</td><td>５名</td><td>２回</td><td>学内実施</td></tr>
<tr><td>教育学部
（通信教育課程含）</td><td>７名</td><td>１回</td><td>学内実施</td></tr>
<tr><td>芸術学部</td><td>７名</td><td>２回</td><td>学内実施</td></tr>
<tr><td>ﾘﾍﾞﾗﾙｱｰﾂ学部</td><td>５名</td><td>２回</td><td>学内外実施</td></tr>
<tr><td>観光学部</td><td>５名</td><td>２回</td><td>学内実施</td></tr>
</table>

※授業アンケートは Web にて実施。

§　文学部

1　FD 活動への取組理念・目標

大学に対する社会からの期待とニーズの多様化と大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による教育力の向上によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力することを文学部の FD 活動への取組理念とする。就労意識の変化に対応した学生へのキャリア教育ないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では新設学科への移行期を終え、新しい文学部を発展させるため、FD の重要性はより増している。

このような現状の下、一人ひとりの教員が学部のディプロマ・ポリシー（以下 DP）に則り FD 活動に臨み、教員全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現することを目標としている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と、国語教育学科、英語教育学科の FD 担当（国語教育学科は文学部 FD 委員が兼務、英語教育学科は英語教育学科主任が兼務）の合計 6 名で文学部 FD 委員会を組織している。

3　令和 3 年度の活動内容

文学部では以下の研修会を実施した。

（1）「遠隔授業支援システムワークショップ」

① 概要（目的を含む）

学生支援センター学修支援課担当職員を招いて、システム管理者の立場から授業担当者の質問に答えてもらいながら、遠隔授業で使用できるツールに習熟することを目的として、7 月 29 日（木）13:00～14:30、Zoom ミーティングにて実施。所要時間 90 分。

② 到達目標

玉川大学で利用可能なシステムとその可能性を考えるヒントを得る。

③ 活動内容

参加者からあらかじめ提出された質問に対して、学生支援センター学修支援課の浅利茂課長をはじめ磯田裕美課長補佐、菅原良子課長補佐の 3 名によって Bb, UNITAMA, Zoom, Teams など学内で利用可能なシステムについて、それぞれの機能、操作方法についての説明を受けた。研修終了後には、学修支援課で研修用に作成していただいた PPT 資料を Teams 専任教員連絡に掲示した。

④ 評価

文学部 FD 研修会として初めての教職協働企画であったが、参加者から概ね好意的な意見が寄せられたところから判断すると、本研修会がタイムリーに実施されたものと思われる。参加率：100%

（2）「国語教育学科と温故知新―完成年度からさらなる前進のために―」

① 概要（目的を含む）

学科改善―完成年度後の学科を振り返り、さらなる発展のために改善すべき具体的な事項・事案を教員間で共有し、実践する―

② 到達目標

AP,CP,DP の文言と実際の実施内容が合致するよう、各教員が自覚し行動に移すことができることを目標とする。

③ 活動内容

1. 学科会において教員各位の抱いている問題意識や改善点を共有することを行った。
   1-1. 特に学生が受検した検定試験に対して、担当教員から検定の結果をどう分析するのかを積極的に求めた。
2. 学生の参加するインターンシップの充実を図った。
   2-1. 学内の企業 DTS 内でのインターンシップの実施。
   2-2. 町田市民文学館の全面協力によるインターンシップの体制を整えた。
3. ホンモノを体感する機会を作る。
   3-1. 学友会寄附講座を活用し山伏・星野文紘氏の講演の機会をもった。
4. 時代が求める国語教育学科とは何かを学科内で考察する機会をもった。
   4-1. 教員の理解を得て、「言語表現コース」の位置付けを改めた。
   4-2. 「国語教員養成コース」から途中で卒業後の進路を変更する学生のための受け皿をキャリア教育の各学年担当者とともに考え、共有しはじめた。
   4-3. キャリアセンターのスタッフからも積極的に情報を共有あるいはアドバイスを得たことにより、卒業生と在校生の連携を強化した。

④ 評価

令和 2 年度 3 月をもって、国語教育学科は完成年度の 4 年目を終え、学科一期生の卒業生を輩出した。就職率は 100%、また教職希望者のほぼ全員が臨時採用を含め、教壇に立つことが叶った。令和 3 年度に求められるのはこの 4 年間の総括であり、問題点を明確にすることである。特に学生が受検した検定試験に対して、担当教員から検定の結果をどう分析するのかを積極的に求めたことにより、学生の学力と学科の課題が共有できはじめたことは大きい。また、インターンシップの充実化やホンモノを体感する機会を設定することは遠隔授業から対面へと変化した年度と重なり、いずれも担当教員の積極的な協力と計画力によって、充実した教育プログラムが授業外で構築された。このことは過去 4 年間の学科運営の方向性が基本的に土台となった上に成就したものである。一方で、教職志望者が多く「国語教員養成コース」に入学してくるものの、途中で卒業後の進路を変更する者も少なくなく、キャリア教育の各学年担当者とキャリアセンターのスタッフからも積極的に情報を共有しはじめたことは卒業後の進路選びに資する教育プログラムの設計が求められる課題であろう。現スタッフの下での学科の強みはどこにあるのかをさらに言語化し、共有しながら、小学校教諭 2 種免許状・日本語教員資格を有した国語科教員の育成、ボランティア精神を有した他者への思いやりを抱く思考基盤を育み、国語能力を十分に身に付けた学生を輩出するため、顔が見える指導を心がける教員として新たなカリキュラムの改編に取り組みたい。

（3）「英語教育学科カリキュラム改善」

① 概要（目的を含む）

英語教育学科の教育活動を改善するため、令和元年度より運用が開始された新カリキュラムの課題の洗い出しを行うとともに、改善案の検討を開始する。

令和4年2月15日（火）14:00～15:10、オンラインによる遠隔実施。

② 到達目標

新カリキュラムの枠組みで教育活動を展開する中で日頃感じている課題を各教員が出し合って共有することで新カリキュラムの課題を洗い出すとともに、具体的な改善策の検討を開始することにより令和 4 年度に予定している本格的なカリキュラム改定の作業に向けてスタートを切ることを目標とする。

③ 活動内容

冒頭で本 FD 活動の概要・目的・目標と、カリキュラム改定の必要性について学科主任から簡潔に説明した後、3 グループに分かれてグループ討議が行われた。グループ討議では、それぞれのグループで記録者および発表者を決めた上で、幅広い領域について意見交換が行われた。トピックの例としては「現カリキュラムの課題の抽出」「2 コースのセールスポイント（〇〇な教員を養成／〇〇な人材を育成）」「留学後の英語科目の必修化（400 番台科目として 1 つ程度必修科目を作ることなど）」「ゼミの割り当ての方法（Senior Project を選択にすることなども含む）」を冒頭で挙げたものの、特にそれらに限定することなく、ブレーンストーミングが意識された。その後、全体でグループ討議の結果を共有し、その上でさらに全体で意見交換が行われた。

④ 評価

カリキュラム改定はこれまでも行われてきたが、その際、分業的に作業が進められることが多く、学科所属の教員全員が一堂に会して課題の洗い出しや改善策の検討を行う機会は少なかった。そのため、今回そうした機会が持てたことは、令和 4 年度に予定しているカリキュラム改定の作業に向けてスタートを切る上で、大変有意義であった。各グループで出された課題は多岐に渡ったが、それを学科教員全員が共有し、より広く課題を見渡すことができたのは、多角的な視点からよりよい改善策を講じることに繋がるものと考えられる。

4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

1) 文学部所属教員が組織的に学部の課題を考える FD 研修会の開催が危ぶまれる中、遠隔形式で実施できたことは、活動の継続という点でよかった。しかし、コロナ禍の状況下で、計画されていた秋学期における研修会の日程調整が難航し、実施が来年度にずれ込むことになった点は反省点として残った。達成度：70%

2) 授業アンケートが全学的なシステムとして昨年度より実施できるようになり、迎えた 2 年目では、文学部が兼ねてから希望していた期中アンケートも実現し、授業担当者が学期中においても授業改善のための気づきを得やすい状況が整いつつあるように思われるが、授業改善は依然として授業担当者個人の取り組みに委ねられており、組織的に効果的活用を行うところまでには至っていない。システムの構築に向けた一層の取り組みが必要かもしれない。

達成度：60%

5　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

従来の活動の継続とその活性化をさらに推進する。とりわけ次の 2 件を来年度の主要課題としたい。

1. 文学部 FD 研修会の機会を設けて、学部の課題を検証することを継続的に行っていきたい。
2. 実施する授業アンケートを文学部全体で今後効果的に活用し、学部内の授業改善を組織的に行えるシステムをさらに充実させていく。

§　農学部

1　FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、学生の学修レベルを農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善、研修会への積極的な参加を、大学 FD 委員会と協調して促進する。これまで、農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を進めてきた。本年度は新型コロナウイルス感染症対策に伴う授業対応が 2 年目となり、遠隔授業、ハイブリット授業、ハイフレックス授業、オンデマンド授業、対面授業と多様な形態に対応することになった。これらの状況に対応するために、例年進めている授業アンケートの実施と授業改善への意識を高めるとともに、多様な授業の進め方、講義資料の著作権の考え方、講義スキルの共有化を目標として加えた。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を、オンラインを含めて実施、コロナ禍での学生の学修環境の向上に努めた。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高めるとともに、社会情勢に臨機応変かつ適切に対応可能な意識をもつ事を効果的に進める。そして、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、農産研究センター副センター長および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）研修会

① 概要

農学部では以下の研修会を実施し、すべてオンラインで実施した。

1)「健康院カウンセリングルームでのメンタルヘルスケア」講師：本学　保健センター健康院　カウンセラー　伊東 優子先生、令和 3 年 9 月 16 日（木）

2)「オンライン授業における著作物利用～改正 35 条を中心に～」講師：虎ノ門総合法律事務所　弁護士　雪丸 真吾先生、令和 3 年 9 月 30 日（木）

全ての研修は農学部、農学研究科全教職員を対象とし、大学生、大学院生への研究と教育活動における適切な指導方法、悩みを抱えた学生への配慮や適切な対処、学生の生活環境における注意点について学ぶことを目的に実施した。

また、昨年度開設した農学部 FD 専用の Teams 内に、事前質問アンケートや配付資料をアップロードし、受講者の理解が深まるように工夫を加えた。また、講演会の動画については、講師の方々の許可を頂いたもののみ、事後配信を期間限定で行い、教員間の知識の共有化を試みた。このことで、研修会の欠席者（非常勤を含む）が、研修会の内容を閲覧できるようになった。

② 到達目標

1) コロナ禍での心のケアが必要な学生に対して、適切な判断ができるようになる。

2) 様々な授業形態に対応可能な講義を進める上での、講義資料の効果的な作成において、著作権に関する法的な根拠を理解する。

③ 活動内容

1) 健康院でのカウンセリング業務の内容とコロナ禍以前の実績をご報告いただいた後、コロナ禍での学生のメンタルケアの状況を、実例に応じて解説いただいた。コロナ禍の令和2年度は、特に春学期の相談件数が極めて多かったこと、しかも、大学1，2年生に多く見られたことなどを具体的に把握でき、令和2年度の農学部の対応も、それに応じて進めていることが確認でき、これまでのFD活動が実を結んでいると考えられた。ただ、対応案件が複雑化していることも報告され、ますます、保健センター健康院や学生支援センターとの有機的な結びつきが必要であることが示唆された。

2) 改正著作権法の施行に伴い、授業資料の作成について不安を感じる教員の声が昨年度から上がっており、専門家からの具体的な説明を頂くことが、教育活動を進める上で重要と思われたため、令和 3 年度計画では未申請であったが、著作権法に関するセミナーを開催した。本セミナーは、丸善雄松堂株式会社が立案しているものを採用した。著作権に関する法的な考え方の根拠から具体的な内容まで、丁寧に講義いただき、教員の中にあった不安感が解消されたと思われ、FD活動の重要性を改めて確認した。

④ 評価

いずれの講習会についても、開催後のアンケート調査などから多くの教員が、各研修会の到達目標設定について好意的な意見が多く、本研修会の目的がファカルティ内で理解されていると評価できる。

（2）学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、すべての講義科目と実験・実習科目について授業アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学HP上に結果を公開する。

③ 活動内容

授業アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。さらに、大学HPに学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

令和3年度の授業アンケートは、UNITAMAを用いてWebベースでアンケートを行った。総合評価値は、昨年と比較すると、すべての授業形態で上昇している。このことは、遠隔授業を含む様々な授業形態に学生も教員も工夫を進めることで、教育活動の安定化が見られたのではないかと考察している。ただ、秋学期のアンケート回収率が、例年同様、著しく低下しており、おそらく、4 年生のアンケート回答率の低下が主な原因

であると思われる。一方、アンケートの結果から、教員が、どのような対応策をとられたかを、学生側がより容易に把握する環境を作る工夫が必要であるとも思われる。

表．令和３年度の授業アンケート集計結果（3 学科のアンケート実施科目すべて）

（講義科目）

令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(講義)全体　履修者数：3,858 名　回答者数：2,359 名　回答率：61.1 %

		設問		農学部(講義)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.8
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.8
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	3.9
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.0
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2
総合評価				3.9

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(講義)全体　履修者数：3,198 名　回答者数：1,343 名　回答率：42.0 %

		設問		農学部(講義)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.8
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.8
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2
総合評価				3.9

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

（実験･実習科目）

令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(実験実技実習)全体　履修者数：634 名　回答者数：446 名　回答率：70.3 %

		設問		農学部(実験実技実習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	3.0
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価				4.1

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(実験実技実習)全体　履修者数：836 名　回答者数：353 名　回答率：42.2 %

		設問		農学部(実験実技実習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	3.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.4
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価				4.1

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

（演習科目）

令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(演習)全体　履修者数：628 名　回答者数：363 名　回答率：57.8 %

		設問		農学部(演習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	3.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.4
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価				4.1

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　玉川大学

農学部(演習)全体　履修者数：1,147 名　回答者数：427 名　回答率：37.2 %

		設問		農学部(演習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	3.6
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.4
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.4
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.2
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5
総合評価				4.2

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

なお、各学科の授業アンケート結果は、玉川大学 FD 活動の HP で見ることができる。
https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr

（３）教職員を対象とした公開授業

令和 3 年度は、秋学期に生産農学科の選択科目「動物行動学」を公開した。本授業は、オンデマンド授業形式であり、その講義の進め方は、非常に工夫されており、教員間の教育方法の共有化をはかるよい機会となったと思われる。しかし、参加者が 4 名（農学部のみ）にとどまり、多くの教員にこのような機会を利用しやすくする工夫が必要であることが改めて示唆されたと思われる。

４　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 3 年度の FD 活動については、主任会・FD 委員と再検討を行い、一部内容の変更を行った。その際、「新型コロナウイルスとワクチン」（講師：保健センター健康院長 庭野 裕恵先生）については、大学 FD として開催されたこともあり予定をキャンセルした。一方、前述の著作権に関するセミナーについては、丸善雄松堂に協力を依頼することにより迅速に計画、実施できた。今後も、このような外部に講演会を依頼することも必要に応じて進めたいと考えている。また、令和 3 年度の FD 活動でも、専任教員間の議論が促進され、提案された課題が十分達成された。

５　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

- 様々な学生に対応した適切な指導法の確立
- 高等学校の改訂学習指導要領の把握（特に理科）
- 授業アンケートの授業への還元方法の検討
- 様々な授業形態に対応可能な授業法、ツールの紹介
- FD に関する各種研修会（学内、学外）への参加の啓蒙的活動

§　工学部

1　FD 活動への取組理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノつくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

教授会、主任会、教務担当者会、学科会の他に、FD 活動に特化した運営組織として、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会がある。これらの組織は平成 29 年まで認証継続していた ISO9001 の教育クォリティマネジメントシステムで運用していたものであり、ISO9001 の更新を停止した後も継続的に運用している。

工学部 FD 研修会は全教員で構成される組織である。各学期の終了後に新入生の成績動向や専門科目の受講者動向などの検証を行う。

授業評価検討会は学科ごとに運営され、全教員で構成される組織である。各学期の終了後に授業アンケートの結果などをもとに授業改善の検証を行う。

授業評価総合検討会は、教務主任、教務担当、FD 担当で構成される組織である。各学科で実施された授業評価検討会の結果をもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

3　令和 3 年度の活動内容

(1) 工学部 FD 研修会

① 概要

各学期の終了後に全教員を対象に実施される研修会である。教務主任、学科主任、教務担当が学期ごとに GPA や単位修得率をもとに成績動向について報告を行う。春学期は、数学と物理の教員が入学時に実施するテスト（プレースメントテスト）の結果について報告を行う。秋学期は、各学科の教員 1 名が学科専門科目の受講者動向について報告を行う。

② 到達目標

全教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、そして教員の自己省察に資する内容となることを目標とする。

③活動内容

■ 第 1 回工学部 FD 研修会

実施日：令和 3 年 9 月 16 日（木）9：00～10：05

場所：Zoom による遠隔会議方式

プログラム：

春学期学習状況分析結果報告

(1) 情報通信工学科　教務担当　森文彦

(2) ソフトウェアサイエンス学科　教務担当　塩澤秀和

(3) マネジメントサイエンス学科　学科主任　佐藤健治

(4) エンジニアリングデザイン学科　教務担当　川森重弘

(5) 数学系　マネジメントサイエンス学科　朝山芳弘
(6) 物理系　エンジニアリングデザイン学科　水野貴敏
(7) 学部全体の状況　教務主任　山﨑浩一

■ 第2回工学部FD研修会

実施日：令和4年3月10日（木）13：00～14：13
場所：Zoomによる遠隔会議方式
プログラム：

秋学期学習状況分析結果報告

(1) 情報通信工学科　教務担当　森文彦
(2) ソフトウェアサイエンス学科　教務担当　塩澤秀和
(3) マネジメントサイエンス学科　教務担当　成川康男
(4) エンジニアリングデザイン学科　教務担当　川森重弘
(5) 学部全体の状況　教務主任　山﨑浩一

最近の専門科目受講者動向

(6) 情報通信工学科　「電気回路入門」　児玉基
(7) ソフトウェアサイエンス学科　「ソフトウェアサイエンス実験」大崎正雄
(8) マネジメントサイエンス学科　「解析学入門」　日下芳朗
(9) エンジニアリングデザイン学科　「設計製図」　木村仁

④評価

第1回工学部FD研修会は32名、第2回工学部FD研修会は34名の教員が参加した。報告者が使用するスライドおよび報告内容をまとめた解説は配付資料としてまとめられ、事前にメールにて全教員に配付された。教務主任による全体総括では、以下の事項が春学期・秋学期それぞれ報告された。

春学期：

- 授業のオンライン化とGPA：平成30年度春学期から令和3年度春学期における、学科ごと、学年ごと、工学部全体の平均GPAの推移を、開講科目の連続性を考慮して、春学期と秋学期に分けてグラフに示した。これらの結果より、授業のオンライン化にともない、顕著な平均GPAの増加が見られる。この平均GPA改善の原因の候補として、以下の3つがあげられる。
  - 課題が増え、授業外学習時間の増加による、理解度の向上
  - 試験の実施方法等、成績の評価法の変更
  - 出席率の改善
- 評価S, A, B, C, Fの割合の推移：平成30年度春学期から令和3年度春学期における、学科毎の成績評価S, A, B, C, Fの割合の推移をグラフに示した。グラフより、S, A評価の割合の増加とF評価の割合の減少が確認できる。このような変化の原因の候補としては、先述した平均GPAの改善の原因の候補と同様と考えられる。単位修得率の推移から、授業の遠隔化により単位修得率が改善される傾向がみられる。
- 授業のオンライン化とF評価の理由：平成30年度春学期から令和3年度春学期における、F評価の理由の推移をグラフに示した。グラフより、以下の傾向が見られる。
  - レポート未提出が増加
  - 試験60点未満が減少

・ 出席率が原因のものについては多少減少

授業の遠隔化により、評価方法が試験からレポートへ変更した授業が多いことが原因と考えられる。

- 授業のオンライン化と出席状況:平成30年度春学期から令和3年度春学期における、出席状況の推移をグラフ・表にまとめた。ここでは、授業回数 15 回の授業を対象としている。グラフより、以下の傾向があることが確認できる。
  - ・ 全出席の学生数は明らかに増加
  - ・ F 評価となる 12 回未満の学生の割合は、遠隔授業に変更された直後では大きな変化は見られないが、その次の学期から減少

秋学期：

- 警告受理状況と警告退学率：平成 29 年度に変更された「警告」の条件を示し、平成 27 年度から令和 3 年度入学生の各学期終了時の警告受理状況を表にまとめた。その結果、新制度となってからの特徴として以下の点が明らかになった。
  - ・ 第 2 セメスターでの警告受理者数が減少した
  - ・ 第 3 セメスターでの警告受理者が大幅に減少した。新制度の累積 GPA になってからは第 2 セメスター終了時までにある程度の GPA を取っている学生は、専門科目が増える第 3 セメスターの当該学期 GPA が低くても累積では 2 を上回ることが主な理由である
  - ・ 第 6 セメスター終了時までに「警告」を受けた学生数と警告制度による退学処分率が減った
- 第 2 セメスター終了時の累積 GPA 分布：平成 30 年度から令和 3 年度入学生の第 2 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムを示した。この時点では、入学年度にかかわらず GPA が非常に低い学生が在籍している。しかし、ここ 2 年はそれ以前と比べ、累積 GPA が 2.00 未満の学生が少なくなっている。
- 第 4 セメスター終了時の累積 GPA 分布：平成 29 年度から令和 2 年度入学生の第 4 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムを示した。この時期になるとどの年度の入学生も GPA が 1.00 を下回る学生はほとんどいない。 1 年次で GPA が低い学生は退学、あるいは評価 C, F 科目の再履修による GPA の改善の効果が大きい。
- 令和 3 年度秋学期終了時の累積 GPA 分布－警告を受けた回数別－：令和 3 年度在校生を対象として警告を受けた回数別に各学年の秋学期終了時の累積 GPA 分布をグラフに示した。1, 2 年生では、累積 GPA が 2.00 未満の学生数が多いとともに、かなり低い値の学生が多数いるが、学年が上がるに連れ、低い累積 GPA の学生が減少している。
- 入試種別毎の警告者の割合：入試種別毎の警告者の割合をまとめた。警告は、AO 型入試受験者では少なく、公募推薦、学部別入試受験者で多い。
- 平成 27 年度～平成 30 年度入学の退学者数・4 年間での卒業者数・退学者数：入学者のうち 4 年間で卒業するのは最近 2 年では 7 割未満。2 割前後の学生が中途退学か留年している。
- 平成 30 年度入学生全学部情報：平成 30 年度の本学 8 学部の 4 年間での卒業、退学、警告退学処分状況をまとめた。これら 3 つの全てにおいて工学部は最も悪い状況である。今後の改善が強く求められる。

- 再入学者の累積 GPA の推移:平成 29 年度の警告制度変更以降に再入学した 7 名の学生の再入学後の累積 GPA の推移をまとめた。在籍する 5 名の学生のうち比較的よい成績を修めているのは 1 名にとどまる。

(2) Zoom による遠隔授業に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

新型コロナウイルス感染症への対策として多くの科目が遠隔授業で行われている。また、昨年度実施した教員による遠隔授業実施アンケートによると、工学部ではオンライン双方向型の授業の 46%において Zoom が使用されていた(『令和 2 年度ファカルティ・ディベロップメント活動報告書』参照)。このような状況を踏まえ、遠隔授業の質の向上のため、Zoom による遠隔授業に関する研修を行う。

② 到達目標

遠隔授業の質の向上。

③ 活動内容

Zoom Japan FAQ のサイト「教育機関向けトレーニングコンテンツ」で公開されている動画「教育従事者様向けトレーニング（応用編)」を視聴する動画視聴型の研修を実施した。受講期間は令和 3 年 7 月 9 日（金）～7 月 29 日（木）とした。研修への参加状況の確認は授業運営課の協力のもと UNITAMA のアンケート機能を利用した。

④ 評価

工学部・工学研究科の教員 28 名が参加した。 研修終了後のアンケートでは以下のコメント（原文そのまま）が寄せられた。

- 秋セメからは対面授業となる可能性が高いと思われますが、Zoom を使う場面は今後もあると思いますし、動画により基本的な設定や操作を学べたことはとても有意義でした。
- 投票とチャットの記述内容と BOR を連携させる方法に興味をもった。早速試行したい。レポートの使い方を学修した。学生の受講状況（離席・退室と入室のアナログメモ）と照合したが Zoom 滞在時間がデータで確認できた。10～15 人前後の Zoom 授業では在室有無の視覚的な確認が容易だが、人数が多い Zoom 授業の場合、特にスライド共有し講義中は特定の学生の離席まで気が回らず、今後の出席管理対策を考える必要がある。
- （1）ビデオの利用、e ラーニングコースの利用というタイプの研修は、時間を拘束されずに自由な空き時間で研修を受けれて、とてもよい。(2) Zoom の投票、BOR、チャットの保存など、様々な機能を知ることができたのは収穫である反面、私はそんなに器用に同時にたくさんのことはできませんので使いこなすのはなかなかハードルが高そうです。
- 教育効果の測定について理論的に知りたいと思っています。
- オンラインでの研修は場所と時間を選ばずに受講できるので大変良いと思いました。コロナ禍で優良な録画コンテンツも増えていますし、今後も継続を希望します。内容もこの時期には適切であったと思います。
- 投票や小テストなど、今後の授業で役立つ内容について理解できた。今回のように情報提供を目的とする研修の場合は、今回のようなオンデマンド形式のはとても良いと

感じた。受講者の都合に合わせて受講できるとともに、各自の事前の知識、関心によってビデオ再生の速度を変えることができ、時間を有効に使うことができるためである。

(3) ESTEAM 教育に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

ESTEAM 教育を実践する ESTEAM エリアの建物である「Consilience Hall 2020」が完成した。また、ESTEAM 教育における異文化融合をベースにした「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」がスタートしている。ここであらためて ESTEAM 教育への取り組みを振り返るとともに ESTEAM 教育に関する理解をアップデートする。

② 到達目標

ESTEAM 教育に関する理解をアップデートする。

③ 活動内容

実施日：令和 4 年 1 月 27 日（木）18：00～18：44

場所：Zoom による遠隔会議方式

講演：「ESTEAM 教育について」工学部長 相原威

④ 評価

教授会の後に実施され、教員 34 名が参加した。講演では、STEM 教育から STEAM 教育を経て ESTEAM 教育へと至る経緯を時代背景とともに解説された。また、マネジメントサイエンス学科の小酒井正和教授による「複合領域研究 210 工農芸融合価値創出プロジェクト」の報告があった。

(4) 授業評価検討会・授業評価総合検討会

① 概要（目的を含む）

授業評価検討会は、各学期の終了後に学科ごとに「授業実施チェックシート」（様式は『平成 30 年度ファカルティ・ディベロップメント活動報告書』参照）や授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

授業評価総合検討会は、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録などをもとに授業改善を検討する。

② 到達目標

授業実施チェックシートや授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

③ 活動内容

■ 授業評価検討会

実施日：

春学期

情報通信工学科	令和 3 年 9 月 9 日（木）18：00～18：30
ソフトウェアサイエンス学科	令和 3 年 9 月 9 日（木）14：30～15：00
マネジメントサイエンス学科	令和 3 年 9 月 9 日（木）14：00～14：30
エンジニアリングデザイン学科	令和 3 年 9 月 9 日（木）16：25～16：40

秋学期

情報通信工学科　　令和４年３月３日（木）17：00～17：30
ソフトウェアサイエンス学科　　令和４年３月３日（木）16：10～17：00
マネジメントサイエンス学科　　令和４年３月３日（木）14：00～14：30
エンジニアリングデザイン学科　令和４年３月３日（木）17：00～17：10

■ 授業評価総合検討会

実施日：

春学期　令和３年９月 17 日（金）13：00～14：00
秋学期　令和４年３月 17 日（木）11：30～12：45

④ 評価

授業評価検討会では、授業実施チェックシートや授業アンケートの集計結果による検討の他に、今年度は履修の取り消し率が高い科目についても議論された。

授業評価総合検討会では、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録を用いて議論された。春学期と秋学期の議事録をそれぞれ図１と図２に示す。

令和３年度春セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和３年９月 17 日、13:00～14:00
場所：Zoom ミーティング
（以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科）

出席者：森（ICT 教務担当）、塩澤（SS 教務担当）、成川（MS 教務担当）、川森（ED 教務担当）、三木（工学部 FD 担当）、山﨑（教務主任）
議事録作成：山﨑

資料： 2021 年度春学期 授業評価検討会議事録（ICT，SS，MS，ED）
2021 年度春学期 授業評価集計結果（ICT，SS，MS，ED）
2021 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業は無かった。
各科からの報告内容を以下に記す。

・ICT：チェックシートは未提出のものがあるが、今後、提出する。「物理学 I」では、これまでの板書と資料に加えて新たにワークシートを導入したにもかかわらず、「成績 B 以上」が 33%であった。これは、一度、単位を落とした学生が再履修していることが理由であり、不満足授業には当たらない。アンケートの回答率の低い科目がある。これについては、今後、授業時間内での実施を促すことで改善を試みる。
・SS：プログラミング I では、３クラスとも B 評価以上の学生が 60%ぎりぎりであった。この科目の成績が悪いことが、警告を受ける大きな原因になっている。プログラミング II では、B 評価以上の学生が 25%であった。これは、この時期この科目を履修する学生は一度以上この科目を落としている、プログラミングが苦手な学生であるためである。したがって、不満足授業に当たらない。いくつかの科目で履修取消が 10%を超えている。シラバスに前提科目を書く、初回の授業で授業の内容を詳しく説明するなどはこれまでも行っているが、さらに丁寧にこれら実施することで履修を取り消す学生を減らすよう努める。
・MS：非常勤教員担当科目を含め、すべての科目について検証している。今年度から、検討項目を他学科と同様に「授業評価・成績 B 以上 60%」に変更した。これまで、非常勤担当科目でアンケートが実施されていないものがあったが、UNITAMA での実施になり、すべての科目で実施された。２科目で授業評価アンケート結果の「理解」が３点未満であった。成績 B 以上が 0%（１名）の科目がったが、例外的なものであり、不満足授業は無かった。
・ED：授業アンケートの「理解度」は、全て３以上である。プログラミング I の成績 B 以上が昨年度は 52%であったが、今年度は 86%と大きく改善された。リモートに合わせた授業を実施した結果である。また、歴史（世界）も、例年は 50%前後である成績 B 以上が、88%と大きく改善された。
・FD 担当より：授業アンケートの回答率の低い教員には、授業内での実施を促してほしい。２学科では、非常勤担当科目を含む全科目を検討の対象としている。非常勤担当科目を対象としていない２学科も、今後は、チェックシートの提出状況などの集めにくい項目を除き、集計結果に含めて検討することが望ましい。
・全体：集計結果のためのデータの準備が、教務担当の大きな負担になっている。授業運営課の協力を得ることを含め、負担削減に向けて取り組んでいく。

以上

図１　令和３年度春セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

令和３年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和４年３月 17 日、11:30～12:45
場所：Zoom ミーティング
（以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科）

出席者：森（ICT 教務担当）、塩澤（SS 教務担当）、成川（MS 教務担当）、川森（ED 教務担当）、三木（工学部 FD 担当）、山﨑（教務主任）
次年度メンバー：佐々木（教務主任）、高橋（MS 教務担当）、黒田（ED 教務担当）
議事録作成：山﨑

資料： 2021 年度秋学期 授業評価検討会議事録（ICT，SS，MS，ED）
2021 年度秋学期 授業評価集計結果（ICT，SS，MS，ED）
2021 年度秋学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業は無かった。
各科からの報告内容を以下に記す。

・ICT：「電磁気学」の「理解度」が 2.70 と低かった。これは、これまで３年次に教えていたものを２年次に開講した影響が大きく、今後授業の実施方法を工夫することで克服する。電気回路入門では、成績 B 以上の学生の割合が 51%であった。学生の基礎力が低く、テストができない学生が多かった。ウィンターセッションで再受講させて対応する。履修取消率の高い科目が２件あった。ロボットプログラミングは受講生数が少なかったため２件の取り消しの影響が大きかった。インターンシップでは、３名の受講生のうち２名がインターンシップ先が見つからなかったために履修を取り消した。不満足授業は無かった。
・SS：非常勤教員担当科目については、教務担当が調べられる範囲で集計した。３クラス開講しているプログラミング II では、２クラスの B 評価以上の学生の割合が 60%を下回った。この二クラスは、プログラミング I で成績の悪かった学生で構成されるクラスであることが原因である。プログラミング I の B 評価以上の率は 50%であった。これは再履修クラスのためである。いくつかの科目で履修取消が 10%を超えている。回路基礎は、予習課題、復習課題など課題が多いことが原因である。しかし、授業アンケートにこれらの課題により予習復習がしやすいとの回答があり、今後も続ける。離散数学では基礎学力の低い学生が履修を取り消している。コンピュータアーキテクチャでは、受講者の興味の問題である。アルゴリズムとデータ構造は、初回の授業でプログラミングが得意でない学生に履修をしないよう指導しても、資格取得の条件科目であるため多くの学生が履修する。試験実施団体より認定を受けているため内容を変更できない。理解度については全科目良好である。不満足授業は無かった。
・MS：非常勤教員担当科目を含め、すべての科目についてチェックシートの提出も求めて検証している。プログラミング I の二クラスを二名の教員が担当しているが、「理解度」の差が大きい。担当が非常勤教員であり、成績 B 以上がともに 60%を超えているため今期は特に対応はせず、来年度も同様であれば対策を検討する。不満足授業はない。
・ED：非常勤教員担当科目も含めて検討している。モデリングとシミュレーションの「理解度」が 2.67 である。内容が難しいためこのような結果になった。原価計算の成績 B 以上が 52%であった。MS 学科の学生はよくできている。成績 B 以上が物理・科学、生産管理でそれぞれ 50%、0%であるが、両科目共に受講者が２名と少ないため指導法の評価は困難である。デザイン思考は、プレゼンテーションが中心の科目であるが、教科基準が不明確との不満が学生から出ている。不満足授業はない。

図２　令和３年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録（その 1）

・全体：授業評価集計結果用フォームが学科によって異なっているが問題は無いかとの発言があった。これに対して、学科によって取り組みが異なるのでフォームも異なってよいのではとの意見が出された。次回に向けて、学部長、教務主任、FD 担当で検討することとした。また、非常勤教員の成績等の集計については、授業運営より学科毎の全成績を提供してもらい、教務担当が集計することとした。

以上

図 2　令和 3 年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録（その 2）

(5) 研究授業・授業公開

① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業（研究授業）を実施する。科目は学科専門科目でなくてもよい。各学科の教員数は 8～9 名であるため、全教員が 4～5 年に 1 回担当することになる。春学期は工学部の教員のみの公開だったが、秋学期は大学 FD 委員会実施の「授業公開」と同時の実施で全学の教員を公開の対象とした。学生による授業アンケートとは別の視点である参観者からの評価を授業改善につなげることが目的である。

② 到達目標

参観者の評価をもとにした授業改善を検討する。

③ 活動内容

今年度の実施概要を表 1 に示す。

参観者は授業を参観して「工学部研究授業チェックシート」（様式は『平成 29 年度ファカルティ・ディベロップメント活動報告書』参照）を参観後に授業担当者に提出する。授業担当者は参観者の評価をもとに「研究授業科目担当者票」（様式は『平成 29 年度ファカルティ・ディベロップメント活動報告書』参照）を作成して、学部長、教務主任、学科主任、教務担当、FD 担当に提出する。

④ 評価

提出された「研究授業科目担当者票」の「今後の対処計画」には下記のようなコメント（原文そのまま）があり、今後の授業改善が期待される。

- Zoom のチャンネルを複数用意するなど、見易さの工夫をする。
- プログラムの実演と演習の時間を増やす。学生同士でペアを作り、互いに用語の意味を説明したり、プログラムの動作を確認したりする時間を設ける。サンプルプログラムや演習がうまく動作しない学生に対する声掛けを増やす。
- 尊敬語は必要ない。オンライン授業では教室の授業より巡回がスムーズにできないので TA・SA がいたほうがいいかもしれない。実物を手に取って議論できないという点がディスカッションで足を引っ張っている。議論があまり活発でなかったグループは、

紹介されたアイデアだしの手法をあまり活用できていなかった。

- 高解像度カメラを導入するか、カメラをボードに近づける、あるいは大きなホワイトボードを利用できる教室で大きな文字を書く予定である。
- 判別できない文字がある場合は授業中に TA などを通じてフィードバックをもらい、スライドを拡大するなどして対応する。プロジェクタ画面を指し棒で指しながらの説明も混ぜる。
- 開発環境の便利な機能を使わずに、正しい記述ができるように、手書きによる演習問題を積極的に導入している。指摘の通り、さらに理解を促すために、実際の動作例を見せることも重要と考えられるため、より重要な内容に関しては、理解の助けとなるような動作例を提示することを積極的に取り入れていきたい。
- 新型コロナ感染症拡大予防を踏まえた範囲で巡回を試みる（教室の左右方向ならば可能か）。アイコンタクト、声掛けを増やし、距離を取った状態でも学生が質問・相談をしやすい授業環境を模索する。例題量を調整し、ゆとりをもった授業構成にして早口での説明を回避する。
- スライドの最小文字フォントサイズをアップする。配布プリントの最小文字サイズをアップするとともに読みやすさ、不鮮明な印字とならないよう配慮して作成する。教室の後方で受講している学生に対して意識的にアイコンタクトをとる。前回の授業の振り返りを継続実施する。

表１　令和３年度研究授業実施概要

	学科	授業担当者	科目	開催日時限	教室
春学期	情報通信工学科	岡田浩之	人工知能	6 月 24 日（木） 1～4 時限	Zoom
	ソフトウェアサイエンス学科	田中昂文	プログラミングⅠ	6 月 22 日（火） 1・2 時限	Zoom
	マネジメントサイエンス学科	小酒井正和	ビジネスコンテンツ	5 月 13 日（木） 3・4 時限	Zoom
	エンジニアリングデザイン学科	木村仁	バイオミメティクス	5 月 10 日（月） 3・4 時限	Zoom
秋学期	情報通信工学科	相馬正宜	通信システム	12 月 10 日（金） 7・8 時限	Consillience Hall 2020 203 教室
	ソフトウェアサイエンス学科	大竹敢	プログラミングⅡ	11 月 23 日（火） 5・6 時限	STREAM Hall 2019 212 教室
	マネジメントサイエンス学科	髙橋宗良	最適化システム	11 月 24 日（水） 7・8 時限	Consillience Hall 2020 311 教室
	エンジニアリングデザイン学科	三林洋介	人間工学	11 月 24 日（水） 1・2 時限	University Concert Hall 2016 106 教室

(6) 学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

授業内容・方法・スキルの向上などの授業改善を具体化することを目的として、平成12 年度秋学期より学生による授業アンケートを春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

学科専門科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。

③ 活動内容

今年度から他学部と同様に UNITAMA でアンケートを実施した。アンケート結果を集計したレポート（PDF ファイル）は科目担当者に配付される。科目担当者はアンケート結果からのフィードバックとしてレポートに設けられた「今期の総括と今後に向けて」の欄（図 3 の右上部分）にコメントを記入する。回収したレポートは『玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 42』、『玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 43』と題した冊子としてまとめられ、STREAM Hall 2019 の 2 階にて閲覧公開した（図 4 を参照）。また、これらは Blakboard@Tamagawa の My グループ「工学部 FD」を通じて全教員に配付された。

④ 評価

アンケートの回答率（回答者数/履修者数）は、春学期が 72.1%（3,297 名/4,575 名）、秋学期が 64.0%（3,140 名/4,910 名）であった。

レポートの「今期の総括と今後に向けて」へのコメントの記入率は、春学期が 91.1%（112 科目/123 科目）、秋学期が 98.6%（146 科目/148 科目）であった。

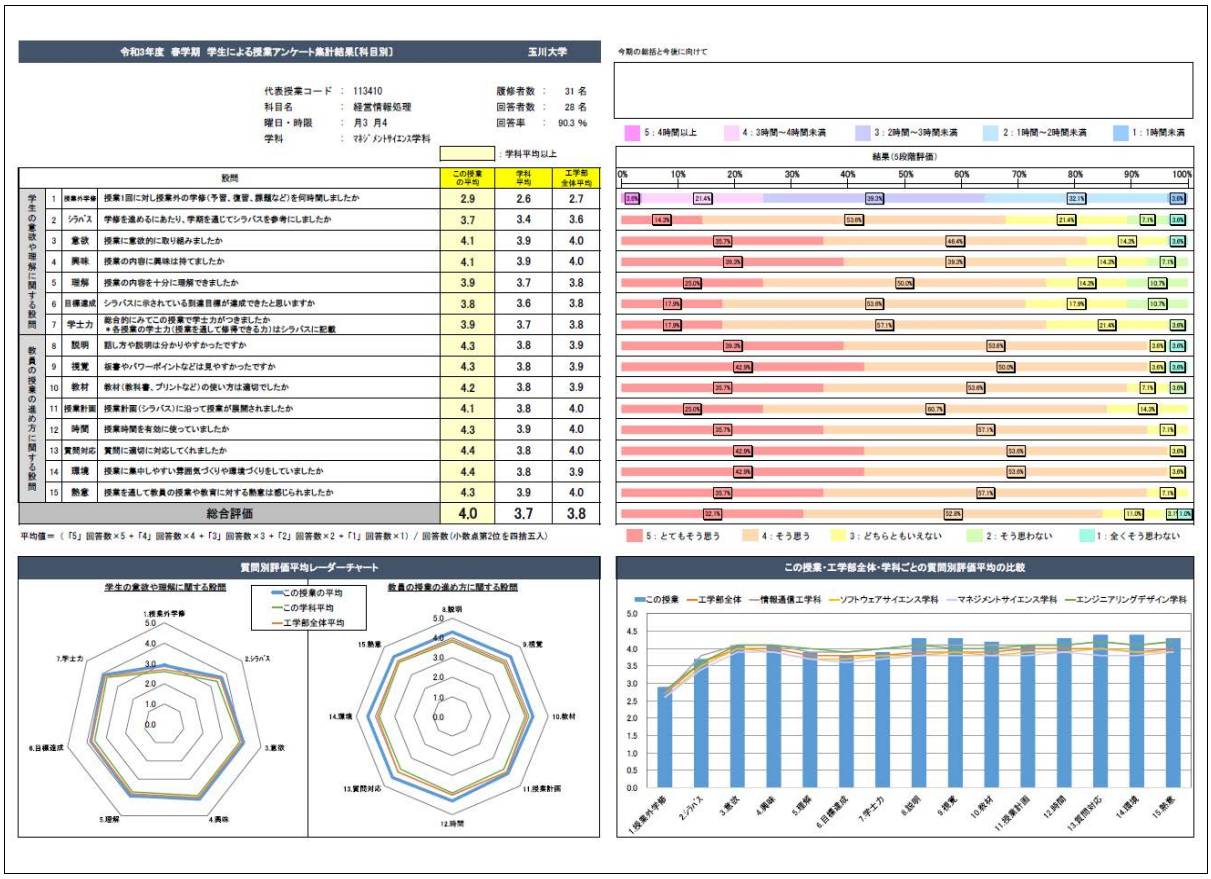


図 3　科目担当者に配布される学科専門科目のレポート

図 4　STREAM Hall 2019 の 2 階にて閲覧公開されているアンケート冊子

４　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、研究授業、学生による授業アンケートを予定通り実施した。特に、学生による授業アンケートは、今年度から実施方法を大きく変更したが、従来通り、アンケート結果に対する科目担当者からのフィードバックとして「今期の総括と今後に向けて」のコメントを集計した。そして、コメントを含むアンケートの集計結果を冊子にして STREAM Hall 2019 の 2 階にて閲覧公開にした。

FD 活動の在り方に関する課題については改善されてない。

５　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、研究授業、学生による授業アンケートは次年度以降も継続的に実施する。ただし、それぞれの実施方法については再検証を行う必要がある。

学生による授業アンケートは、より学生の意見を反映させるためにアンケートの回答率を上げることが望まれる。特に、非常勤の教員が担当する科目について検討する必要がある。

研究授業は、より多くの視点から改善案を得るためには参観者数を増やす必要がある。

§　経営学部

1　FD 活動への取組理念・目標

（1）質の高い卒業生（経営学部のミッション･ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。

（2）玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。

（3）21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部－少子化時代･大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。

（4）玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）研修会（令和 3 年 6 月 3 日（木））

① 概要（目的を含む）

Tamagawa Vision100(2029)や 3 コース制を踏まえて、経営学部が目指す方向性を教員間で共有する。② 到達目標

学部内の教員間で教育理念等を理解し、より良い講義運営を実現すること。

③ 活動内容

学部長は経営学部の創設からの歩み、学部運営の組織体制、創立 100 周年に向けた大学の教育方針等について資料を基に説明した。具体的には、経営学部が展開している 3 コースの成果と大学の教育方針が結びついているかを検証し、今後の経営学部に求められるカリキュラムの在り方を共有した。

④ 評価

経営学部は 2013 年度に 5 コース制に、2015 年度には 3 コース制に移行している。3 コース制を創設した背景には、修得主義（資格・検定重視）がある。3 コース制が運用されてから学生の英語能力等は目に見える形で向上している。今回の研修会では、改めて 3 コース制の成果について、歴史を辿って詳細に学部長が説明したことにより、カリキュラムの有効性を教員間で共有することができた。

一方で創立 100 周年に向けた経営学部の方向性に関して、どのように具現化していくかについては、経営学部としては話が十分にまとまっておらず、今後の課題となっている。

（2）ワークショップ（令和 3 年 12 月 2 日（木））

① 概要（目的を含む）

学修状況を確認し、卒業後のキャリア形成を見据えたコースプログラムによる支援体制を強化する。

② 到達目標

外部試験の受験を含めて学修を促進するための授業方法を示す。

③ 活動内容

昨年度に行った研修会を踏まえて、コースプログラムの成果拡大に向けたワークショップを実施した。各コースに教員が分かれて、コース内の 4 年生における TOEIC の成果を共有した。TOEIC のスコアが高い学生の学習状況を分析し、効果的な指導方法を話し合った。

講義内容の改善については、例えば、①英語教材の選定、②ゼミナール等での講義において、英語で発言する機会を増やす、③外部試験を定期的に受けさせるといったさまざな意見を抽出することができた。

④ 評価

コース目標をクリアするための指導方法に関しては、教員間の差異が存在しており、その差異をなくすために、教員間で話し合いを続けていく必要がある。コースプログラムのさらなる発展を目指すために、教員間の指導方法を共有し、実践することが求められる。

また、TOEIC のスコアが高い学生の就職状況を把握し、英語能力とキャリアの関係性を明らかにしていきたい。

（3）学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

今回の授業アンケートは、UNITAMA を活用した Web 形式である。経営学部で開講している全科目で実施した。アンケート集計は DTS に依頼し、その結果を科目担当者別に配付している。

④ 評価

すべての開講科目で授業アンケートが実施できている。アンケート結果のまとめを Web 上で公開している。回答率は約 50%であったため、より回答数を増やすために、科目を担当している教員には、学生へのアナウンスを強化していただく必要がある。

（4）学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに教員を派遣する予定であったが、教員の都合が合わず、中止とした。次年度以降に教員を派遣する予定である。

4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動は、学外セミナー以外すべて実施できている。研修会では、学部長から経営学部の過去、現在、未来について詳しく説明していただいた。特に創立 100 周年に向けた経営学部のカリキュラムの在り方については、教員間で共有できた。コースのゼミナール科目においては、TOEIC のスコアを評価基準に組み込んでおり、学生は

TOEIC スコアの向上のために努力している。一方、専門分野の成果については、経営学検定、販売士、BATIC（国際会計検定）®等の資格取得の件数が伸びている。学生には、自身のキャリア形成と学習成果を連動させながら、DLP（Dual Language Program）の修得に向けた年間計画を立ててほしい。

ゼミナールの評価に関しては、昨年度に引き続いて、経営学部長、コース代表者による会合を定期的に開催している。各コース 2 年次、3 年次、4 年次のゼミナール科目（国際会計コースの専門基礎ゼミナール A と国際会計ゼミナール A を除く）において、TOEIC の評価基準を教員は遵守している。

5　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

これまでの活動を継続するとともに、DLP による教育効果の検証を踏まえて、コースの運営を強化していく。経営学部が提示している TOEIC のスコアについては、学生に一層周知する。学生には、DLP による経営学関連の専門性を身につける意義を改めて説明し、面談等を通して丁寧な指導を展開していきたい。

§　教育学部

1　FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、令和 2 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 担当、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 担当が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）研修会等

① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、オンライン及びオンデマンド研修会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

令和 3 年度は、ICT 化による授業の効率化やアクティブ・ラーニングの促進、また前年度に引き続きコロナ禍でのオンライン授業のために、オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付を行い、「ICT 活用とプログラミング教育の事例」についてはオンデマンド方式で研修を行った。当初の計画にはなかったが、教育学研究科及び教職大学院からの要望で「教育学研究科および教職大学院紹介」について教員の協力を促すため Zoom によるオンライン研修を行った。「コロナ禍における救急救命・安全教育」は、新型コロナウイルス感染症第 6 波のために実施を中止した。

研修名　:「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」
実施日　: 令和 3 年 4 月 1 日（木）
方法　　: 各教員 BOX への配付及び学内便による配付

研修名　:「教育学研究科および教職大学院紹介」

講　師　：教育学研究科科長　：若月芳浩 教授
　　：教職大学院研究科長：山口圭介 教授
実施日　：令和 3 年 7 月 28 日（水）
場　所　：Zoom による双方向オンラインでの会議実施
時　間　：15:00～15:30 配信

研修名　：「ICT 活用とプログラミング教育の事例」
講　師　：教育学部 教育学科 教授：富永 順一 教授
実施日　：令和 3 年 9 月 28 日（木）
場　所　：オンデマンド方式実施
時　間　：16:11 配信

④ 評価

「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」については、各教員から非常に喜ばれた。他学部からも問い合わせがあった。「ICT 活用とプログラミング教育の事例」に関してはオンデマンドで初めての試みであり、口頭ではないために質問しづらい可能性があるため、メールで質問を受け付け学ぶことができた。大学院の紹介についての研修は、Zoom で行い、各教員が大学院についての情報を持っていなかったため、有意義であり、教職大学院と教育学研究科の両方とも、進学者数が増えたため、効果があったと考えられる。

（2）学生による授業アンケート

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。例年は、受講者が 10 名未満のゼミなどについては実施しなかったが、今年度から 10 名未満のゼミや授業であっても実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

学部の遠隔授業は①双方向オンライン授業、②オンデマンド型（授業動画配信）授業、③資料配信＆課題中心型授業の 3 種類に分けられ、教員はそれぞれに工夫を凝らし、柔軟に対応して授業を行っていた。授業アンケートの項目には、①3 種類のうちのどのような方式の授業であったか、②孤立を感じたかどうかなどを尋ねる項目を学部独自に追加した。今回、令和 2 年春学期と令和 3 年年春学期の比較分析を行い論文にした。教員とは学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。アンケート結果から、コロナ禍で他の学生に会えない状況でも、Zoom のブレイクアウトルームを利用したディスカッションなどにより孤立感を解消することができることがわかった。また、教育学部における授業アンケートの結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっているが、オンデマンド方式の授業などではより多くの時間を内容理解のために費やしている傾向が見えた。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることも考慮した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。また、この項目が高い教員の実施方法などを共有し他の教員の参考にしていきたい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全科目において実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、補助教材『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が授業改善につなげることにある。

② 到達目標

・専任教員、非常勤講師を問わず、すべてのスクーリング授業において学生による授業評価アンケートを実施する。

・実施した授業評価のデータ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

・開講されたスクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（科目）について、オンラインでの授業評価アンケートを実施した。開講したのべ 148 科目において実施した結果、のべ 144 科目において学生からの回答が得られた。

・質問内容は、一昨年度まで教室において紙媒体で行っていた時と同一のものを使用し、自由記述欄も設けた。

④　評価

授業評価の結果としては、各設問とも概ね高い評価を得た。各授業の評価結果は、担当教員本人に配付し、結果と課題を共有した。また、夏期スクーリングについては全体の結果概要を『玉川通信』において学生に公表した。

今年度の夏期スクーリングにおいて最も高い値を示したのは「自分は積極的に授業に取り組んだ」という項目であり、久しぶりの対面授業に高いモチベーションで臨んだ学生たちの姿がうかがえた。また「授業全体の目標は明確であった」「授業内容は知的な興味・関心をひく／技能を向上させるものであった」という項目の値も高く、教員による直接的な関わりの有効性が確認された。一方で夏期スクーリングは新型コロナウイルス感染症の第5波と重なり、様々な制限のもとで開講せざるをえなかったこともあり、「授業内で考えをまとめたり、学びを深めたりする時間は適切であった」という項目については例年に比べて低い値を示した。

その他のスクーリングにおいても全体的に高い評価を得た。今年度の特徴として、先述したように対面でありながらグループワーク等への制限が設けられたスクーリングの他、対面を予定していたものの直前になって急遽オンラインでの実施に切り替えたスクーリングも存在するなど開講時期によって異なる状況であった。これらのケースでは受講申し込みをした時点と授業実施の時点での状況が大きく異なることもあり、学生たちの期待していた授業形態でなかったということも考えられる。自由記述の内容を見てみると、それらについて残念だという声もあったものの、置かれた状況における学びについて肯定的に捉えられることが多かった。教員側としてもコロナ禍において、このような変化に柔軟に対応することが求められるとともに、できる範囲でより良い学修の場を提供できるように準備をしておく必要があると考えられた。

通信教育課程では、新型コロナウイルスの問題とは関係なく、対面、オンライン、ブレンディッド（オンライン＋対面）と複数の形態でのスクーリングを提供している。そのような複数の形態を設けている通信教育課程だからこそ、今後、それぞれの形態によるメリット・デメリットについても整理していきたいと考える。

（3）教職員相互の授業公開と参観

【通学課程】【通信教育課程】

令和3年度は、新型コロナの影響があり、対面の授業が行われてはいるが、密を避けることが要求されるため、授業参観は困難となり、実施を見送った。

（4）FD研修

【通学課程】

1）「全人教育香川研修」

①概要

令和3年度は、未だにコロナ禍の影響により、遠路を旅行することが憚られ、やむなく中止した。教育活動に役立てるため学内研修を実施した。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修に関わる情報を提供する。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加したり、関連する情報を得たりすることで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

昨年度に引き続きオンラインでのスクーリングも行われたことから、それぞれの教員が行っている工夫について情報を収集したものをまとめた資料を共有した。

④ 評価

教員の側はオンラインでの授業に慣れてきた面もあったが、受講生の中には初めてオンラインで受講する者もおり、スムーズに授業を進めていくためにもそれらの学生へのサポートが必要だと考えられた。また、グループワーク等に制限のある状態での対面授業において、意見の共有や協同作業などを取り入れていく方法については教員間での情報共有が必要だと考えられた。

4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っているが、新型コロナウイルス感染防止のために実現できなかったことは残念である。令和 4 年度の計画で実施したいと考えている。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、原則として全科目で実施した。ただ、オンラインでの実施であったこともあり、科目によっては回答が集まらないものもあった。また、昨年度は担当教員への結果のフィードバックに時間がかかるという課題を抱えていたが、今年度は、より迅速なフィードバックを行うことができた。

テキスト学修科目のアンケートについては、平成 28 年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を令和 4 年度も開催していきたい。

FD 研修の一つである香川研修において学部教員が創立者の縁の地である香川県を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する香川研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。令和 4 年度も対面でのスクーリングとオンラインでのスクーリングの双方が予定されていることから、それぞれのスクーリングにおける課題を明らかにするために、スクーリングの形態による比較や同一科目・同一教員の経年経過の分析などを試みたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§　芸術学部

1　FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化、新技術の進展といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって急速に進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。新聞社の全国世論調査によると、「世界に通用する人材や、企業や社会が求める人材を大学は育てているか」の質問に 6 割を超える国民が否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわり、芸術学部の人材養成が社会の発展や改善に貢献できると確信している。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、現代は芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには多様化する社会の要請に応えうる柔軟性や機動性をもった組織として教員構成を編成しなければならない。教員たちが目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び芸術学部 FD 担当が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、学部全教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員会委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3　令和 3 年度の活動報告

（1）授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

令和 3 年度は、芸術学部で開講されている授業（卒業研究など複数のゼミを同じ授業名でまとめられた科目を除く）について春学期、秋学期それぞれ期中、期末に年 4 回の授業アンケートが UNITAMA による調査方法にて実施された。調査対象とした期末段階での履修登録者数（延べ数）およびアンケート回答率は、春学期 5,228 人 63.2%、秋学期 4,396 人 46.6%であった。

アンケートの全体概要結果および各科目担当教員の個別アンケート結果詳細の閲覧方法を学部拡大教授会等によって専任教員に周知した。また、総合的な内容については大学のポータルサイトにて公開される。

各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性および学部教育を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

UNITAMA による授業アンケートは個別に結果を確認でき、教員自身が自分の担当する科目を客観的に評価することができるようになった。問題点としてはアンケートに対する回答率の低さがある（春学期 63.2%、秋学期 46.6%）。コロナ禍での遠隔授業により、アンケート回答指示が学生に伝わりにくい状況であったことが影響していると考えられる。秋学期に回答率が下がったのは、1 年生の意識低下が大きいと考えられる。

（2）講演会・研修会・ワークショップなど

1）

① 概要

所有権の理解と注意事項の共有のための研修（オンデマンドビデオ教材）

② 到達目標

所有権に関する法的概念を理解し、所有権に関する基礎知識と大学における学生や教職員の私物に関する運用を身につける。

③ 活動内容

学園顧問弁護士作成の解説動画（32 分）を教員に限定して公開した。全専任教員に対して視聴とアンケート回答を課した。

④ 評価

制作した作品やそのための材料、道具などのモノの権利と管理は芸術学部特有の課題であるが、これまでは教員個人に任されていた。このため、それぞれの理解度によって対応が異なることもあった。この問題を解消するために、知っておくべき要点を全教員が共有することで組織的に統一した管理運営が可能となることが期待できる。

2）

① 概要

ガラス工房安全運用のための教員研修会

② 到達目標

ガラス工房内にある機材の点検やメンテナンスといったハード面の管理運用の情報を共有し、教員のスキルアップを図る。さらに、授業上の指導の注意や、熔解炉のプログラムの管理といったソフト面の知識を深め、教員のレベルアップを図る。

③ 活動内容

9 月に熔解炉内のツボを交換するに伴い、以前、女子美術大学で長くガラス工房の運営管理をされていた工藤直客員教授に現状報告を行い、熔解炉を中心とした機材の点検及びメンテナンス指導を仰いだ。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、Zoom 上での研修会を実施した。熔解炉内部の発熱体の劣化具合やツボのガラス浸食度合いを撮影しながらチェック頂き、今後の安全運用のためのメンテナンス方法や安全管理の注意点を指導いただいた。9 月 9 日に実施。（専任教員 2 名、技術指導員 1 名参加）3 月 15 日に実施予定であった研修は、工藤直先生のご都合により中止となった。

④ 評価

ガラスの熔解が始まってから初めてのツボ替えとなるタイミングに際し、機材内部の劣化具合を確認した。大きな劣化が見られないことから、3 月・4 月に行ったメンテナンスに不備・不調が無いことがわかった。しかし、発熱体にガラスの熔解時に出るガスによる変色が見られ、今後もガスが機械を痛めないよう、様々な想定される状況時の対処法を学んだ。また、メンテナンスの細かな手順や、メンテナンス時の技術的な確認事項を共有し、教員にとって価値の高い内容となった。

（3）調査・研究など

① 概要

遠隔授業の実施に伴う教員間での情報交換会

② 到達目標

遠隔授業の実施方法やテキスト制作のスキル、および教育の課題点などについて教員間が持つ情報を提供しあい、授業改善のためにレベルアップを図る。

③ 活動内容

アート・デザイン学科、メディア・デザイン学科の専任・非常勤教員に案内し、任意参加で Zoom により 2 時間程度の研究会を実施した（令和 3 年 4 月 6 日）。教務的な連絡事項の確認、それぞれが抱える問題点の報告や、実際の授業運営の工夫などについて情報交換・質疑などを行なった。

セクション 1、2 に分けて実施した。セクション 1 では、既連絡事項の確認、新規連絡事項の伝達をはじめ、見落としやすい情報や注意点を取り上げた。特に、事前に取り上げてほしい事項の募集もし、それらに対する回答も行った。セクション 2 では、コースおよび専門分野ごとに分かれ、各教務担当が中心となり、質疑応答の時間を設け、発言しやすい環境にした。

非常勤教員の人数は多く、全員が参加するのは難しいため、出席は任意とし、オンライン会議への出入りも自由とした。

④ 評価

情報交換会を行うことにより、特に非常勤教員は安心して授業準備に取り組めた様子が見られた。また、質問しやすい環境作りにもなり、お互いの授業の工夫を紹介する場面も見られ、さらにそこから教務的な質問へ発展することもあり、「知りたいことを知ることができた」時間となったようである。そのため到達目標は達成されたと言える。

今回は、非常勤教員によるオンライン授業の不安の声からこの FD 活動を実施した。しかし、オンライン授業の実施に限らず、それぞれの科目や教員が抱える問題は孤立しやすく野放しされやすいため、何らかの形で授業に関する情報交換会は、今後も必要で

ある。

（4）学外セミナー等への教員派遣

1）

① 概要

第 58 回全国高等学校美術・工芸教育大会 2021 茨城大会

毎年開催される高等学校教員による美術科・工芸科の授業研究発表会への参加（Web 開催）。研究発表の動画が令和 3 年 8 月 20 日から 11 月 30 日の期間中に Web 公開される。大会の研究テーマは「ViVA! Art! ～価値でつながる美術、工芸教育～」。高等学校学習指導要領が平成 30 年に改訂され、その内容を反映させた授業研究発表であった。

② 評価

高等学校学習指導要領改訂の観点の反映は、試行錯誤の段階にあるようであった。COVID-19 の影響でデジタル化が進み、ICT 機器の活用や小学生からのプログラミング教育の延長に繋がる授業研究内容が多くみられた。また、単なる「デジタル機器」ではなく、表現する道具としてどのように表現活動や鑑賞活動に活かしていくか試行し始めている段階といえる。

大学において、上述の到達目標の達成には時間がかかる。本学科での教員養成では、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を意識した指導が行えるようにするとともに、ICT 機器の活用はもとより、指導するための表現力の向上、自らが目指す教師像の明確化を目指す。また、学生自らが美術を幅広く捉え、享受する力を増幅していけるような科目横断的な体制を整える。

4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案した予定はほぼ達成することができたが、コロナ禍により予定されていた研究会などが中止となり、また国内外への出張も制限されたことから、いくつかの活動ができなかった。結果、予算として組まれた経費が未執行となった。次年度に向けて新たな FD の取り組みの方法を再度検討する必要がある。

実施された各 FD 活動に関しては逐次、芸術学部拡大教授会により報告された。

5　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

令和 3 年 4 月から芸術学部は学部改組が行われ、音楽学科、アート・デザイン学科、演劇・舞踊学科が新たな 3 学科としてスタートした。STREAM Hall 2019、Consilience Hall 2020 での授業も開始され、新しい教育環境も整った。新採用教員も増え新旧教員間の連携や情報の共有化、新しい施設の有効活用が重要となってくる。

令和 4 年度は対面授業が基本となる予定だが、今後のコロナウイルス感染の状況は予断を許さず、授業運営はこれからも柔軟な対応が求められる。これまでの遠隔授業の成果と課題をもとに、単に令和 2 年度以前の教育に戻るのではなく、経験を生かして新たな教育方法を構築することが重要である。

今後も、専任、非常勤教員全体の意識向上や新規教育施設での新しい教育活動に向けて各学科の取り組みや各プロジェクトの横断的な学部を越えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研

究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

§　リベラルアーツ学部

1　FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

学部専任教員対象の FD 研修会をコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的プランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

4 月～翌 3 月に実施した。参加者は 1 年生担任教員で、必要な回には各主任が参加した。具体的には以下の各項目について検討を行った。

・遠隔授業と対面授業を組み合わせた一年次セミナーのクラス運営と学修・生活に関する早い段階での教育および指導・支援方法
・新入生研修代替プロジェクトの内容と指導方法
・次年度以降の新入生研修の内容と実施方法
・秋学期「一年次セミナー102」の内容と指導方法

④ 評価

春学期のハイフレックス・遠隔中心の授業から秋学期の対面中心の授業へと授業形態が変化する状況においても、入学まもない 1 年生が大学での学修に慣れ、自発的な個々の学びを着実に計画・実践していくために、「一年次セミナー」で提供すべき内容について担任教員を中心として丁寧な議論を重ね、1 年生の指導とサポートをきめ細かく行うことができた。コスモス祭学部展などの発表の場を「一年次セミナー」で活用し、学部内の教員と学生のコミュニケーションを促進し、本学部の多様な学問分野についての知識を得、それを学内外へ発信することによって、大学での対面機会が限られていた 1 年

生の学部所属意識を高めることにもつながった。以上のように、例年とは異なる授業形態となった今年度においても、効果的な初年次教育カリキュラムを整えることができた。

（2）「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部2年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい2年次教育のあり方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋学期中に2年生クラス担任会を開催し、「二年次セミナー」の教育内容・方法を改善するためディスカッションを行った。今年度は以下の点を中心に検討を行った。

・アカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法
・学部での3年生以降のより専門的な学びに向けた指導方法
・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方、特に海外留学やキャリアプランニングについて

⑤ 評価

2 年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。コスモス祭学部展を活用して、「二年次セミナー」春学期での学修内容の整理と補足、プレゼンテーションをグループワークで実施し、学修をさらに発展することができた。

（3）学部将来構想の観点からの学部運営改善に関する研修会

① 概要（目的を含む）

学部運営改善の方針と具体案を検討する。

② 到達目標

学部将来構想に基づく学部運営改善の方針と具体案を策定する。

③ 活動内容

新カリキュラムの理念、内容、構成について検討を進めた。

④ 評価

学部新カリキュラムの構想を具体化し、1 年後の開始に向けて運営の準備を整えることができた。

（4）令和3年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部教育の今後の展望に関する意見交換等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

令和4年2月25日（金）9:30～17:00 玉川大学 大学教育棟 2014 の教室（オンライ

ン併用）にて専任教員による研修会を実施し、以下のプログラムを実施した。

（ア）新カリキュラムの全体像について

（イ）分科会：各フィールドでの科目検討

（ウ）フィールドでの話し合い結果の共有

（エ）分科会：1年次・2年次教育の検討

（オ）各セミナーでの話し合い結果の共有

③　評価

今年度は昨年度に続き対面とオンライン併用の1日開催となり、年度初めの計画よりも期間を短縮することとなったが、限られた時間の中で新カリキュラムに向けた多くの意見交換がなされ、今後の教育方針や体制についてさらなる検討を進めることができた。

（5）リベラルアーツ学部防災訓練

① 概要（目的を含む）

大学教育棟2014等の防火施設、避難誘導方法等について、実践的に学ぶ。

② 到達目標

教育・研究現場において、災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

令和3年7月29日（木）玉川大学大学教育棟2014の避難経路、防災設備の確認をオンライン併用で実施した。

④ 評価

リベラルアーツ学部専任教員の研究室があり、多くの授業が行われている大学教育棟2014での避難方法、災害時の対応について、詳細にわたり確認することができた。

4　昨年度（令和2年度）に提案された予定・課題の達成度について

①　初年次教育・2年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）、FD研修会、防災訓練など講習会は、学部教員のFDに対する意識を高めると共に具体的な教育活動改善の重要な機会として効果を挙げてきていることから、次年度以降も継続して実施する。

上記の予定・課題については、全体として効果的に達成することができた。

②　学科専門科目の学生による授業アンケートを、実施方法や回収率の問題点を修正しつつ継続する。より効果的・効率的な実施方法については、引き続き学部FD委員会を中心に学部内で議論を行い模索する。

上記課題の実施方法については、今年度より全学のUNITAMAアンケートに参入したため検討不要となったが、回収率は引き続き検討すべき課題である。アンケートの項目については今後も学部内で議論を進めたい。

5　今後（令和4年度以降）の予定・課題について

今年度FD研修会で確認された新カリキュラムの理念に基づき、令和5年度の開始に向けて、具体的運用等についてもさらに議論を積み重ねる、そのための場をFD活動で提供する。初年次教育・2年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏

まえて展開する。

講習会は、防災訓練、ハラスメント講習の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

§　観光学部

1　FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）講演会「お金をかけない神奈川県内の地域活性化手法の実践について」

実施日　：　令和 3 年 6 月 24 日（木）　15：45～17：00（質疑応答含）
講　師　：　神奈川県産業労働局中小企業部商業流通課商業まちづくりグループ
　　鈴木博明氏
場　所　：　大学研究室棟　B107 会議室

① 概要（目的を含む）

観光学部では令和 4 年度入学生から適用する新カリキュラムにおいてコース制をとり、「リージョナル・リーダーコース」を設置する。それに伴い観光学部教員が地域活性化に関する現状を共有することを目的とする。

② 到達目標

地域活性化の実態と、神奈川県が推し進める手法について、実例を通じてその取り組みを理解する。

③ 活動内容

コロナ禍での地域の現状を踏まえ、神奈川県が仕掛ける商業振興策（特に各地の商店街）等についての講演および教員との討議を行った。

④ 評価

神奈川県がこれまで主導してきた地域活性化の事例として、県内複数の商店街の活性化事案について、その手法を含み理解することができた。また、活性化手法の導入にあたり、その際に生じる軋轢や困難への対応、特に地域住民や関係する人たちとのコミュニケーションの在り方等について具体的な手法を紹介いただき、地域活性化に関する授業を行う際の、多くの示唆を得ることができた。

地方公共団体、特に県レベルでの取り組みについて、実担当者の「生の声」を聞く機会が滅多にないこともあり、本業務に二十年以上携わっている鈴木氏の実務に則したご講演に対して参加教員から好評を得た。

（2）講演会「SDGs に関する、スポーツ・観光分野での取り組み」

実施日　：　令和 3 年 10 月 28 日（木）　15：45～17：00（質疑応答含）

講　師　：　大正大学地域創生学部准教授・林恒宏氏

場　所　：　玉川大学・大学教育棟 2014 502 教室

①　概要（目的を含む）

観光学部では令和 4 年度入学生から適用する新カリキュラムにおいてコース制をとり「リージョナル・リーダーコース」を設置する。また、観光と SDGs に関する教育の展開も開始する。それに伴い観光学部教員が地域活性化、SDGs に関する理解を高めることを目的とする。

②　到達目標

SDGs について、スポーツおよび観光分野での実情への理解と、SDGs 教育に関する大学をはじめとする高等教育機関の取り組みや学生ニーズの確認をする。

③　活動内容

大正大学地域創生学部准教授・林恒宏氏をお招きし、SDGs について、特にスポーツおよび観光分野での現状と大学をはじめとする教育機関の取り組みに関するご説明を受けた。

④　評価

SDGs 教育は、現在、大学入学以前の中等教育でも盛んに行われており、大学生の SDGs に関する学修ニーズが高いことが、教員間で共有された。また、スポーツ等特定分野を通じての SDGs 活動や教育といった先端的な大正大学での取り組みに触れることが出来、他大学における教育内容や指導など参考になる情報もあって概ね好評であった。

（3）学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業アンケートを実施した。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

一昨年度から大学による Web 方式のアンケート機能を利用して観光学部開講科目で学生による授業アンケートを実施している。データの集計結果は UNITAMA で科目担当教員が参照できる。

④ 評価

観光学部授業アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業アンケート回答数（延べ数）は昨年度 983 に対して、今年度は 962 と減少した。主な原因は、昨年同様、授業がオンラインだけとなったこととアンケートの Web 方式への変更により、アンケートへの回答を学生の自主性にゆだねることになったため、教職員が何度も機会あるごとに回答を促したが、授業アンケートの回答数が減少してしまったと思われる。

秋学期授業アンケート回答数は昨年度 1,915 に対して、今年度は 503 と著しく減少した（回答率 30.4%）。春学期と同様引き続き低調な回答率となった。オンライン授業の常態化の副作用かと思われるが、教職員からの呼びかけが不十分であったと考えられる。

2021 春＿授業アンケート（観光学部）

対象者数（延べ数）：1,824 人　回答者数（延べ数）：962 人　回答率 52．7%

あなたの意欲や理解について

1．授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか （必須）

	比率	人数
4時間以上	3.0%	29人
3時間～4時間未満	7.3%	70人
2時間～3時間未満	22.2%	214人
1時間～2時間未満	48.0%	462人
1時間未満	19.4%	187人

2．学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	25.9%	249人
そう思う	41.7%	401人
どちらともいえない	23.1%	222人
そう思わない	6.2%	60人
全くそう思わない	3.1%	30人

3．授業に意欲的に取り組みましたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	46.0%	443人
そう思う	45.5%	438人
どちらともいえない	7.2%	69人
そう思わない	1.0%	10人
全くそう思わない	0.2%	2人

4．授業の内容に興味は持てましたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	47.9%	461人
そう思う	42.1%	405人
どちらともいえない	8.1%	78人
そう思わない	1.5%	14人
全くそう思わない	0.4%	4人

5．授業の内容を十分に理解できましたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	41.1%	395人
そう思う	47.1%	453人
どちらともいえない	9.7%	93人
そう思わない	1.9%	18人
全くそう思わない	0.3%	3人

6．シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	34.1%	328人
そう思う	46.0%	443人
どちらともいえない	18.3%	176人
そう思わない	1.5%	14人
全くそう思わない	0.1%	1人

7．総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載 （必須）

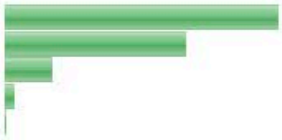
	比率	人数
とてもそう思う	34.9%	336人
そう思う	48.4%	466人
どちらともいえない	15.3%	147人
そう思わない	1.2%	12人

教員の授業の進め方について

8．話し方や説明は分かりやすかったですか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	48.9%	470人
そう思う	40.0%	385人
どちらともいえない	7.8%	75人
そう思わない	2.7%	26人
全くそう思わない	0.6%	6人

9．板書やパワーポイントなどは見やすかったですか （必須）



	比率	人数
とてもそう思う	53.5%	515人
そう思う	35.3%	340人
どちらともいえない	9.0%	87人
そう思わない	1.9%	18人
全くそう思わない	0.2%	2人

１０．教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	50.2%	483人
そう思う	38.3%	368人
どちらともいえない	9.7%	93人
そう思わない	1.6%	15人
全くそう思わない	0.3%	3人

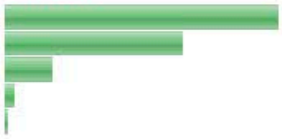
１１．授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか （必須）

	比率	人数
とてもそう思う	45.3%	436人
そう思う	40.1%	386人
どちらともいえない	13.6%	131人
そう思わない	0.7%	7人
全くそう思わない	0.2%	2人

１２．授業時間を有効に使っていましたか （必須）

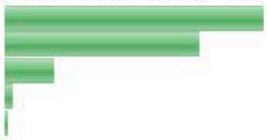
	比率	人数
とてもそう思う	50.5%	486人
そう思う	39.3%	378人
どちらともいえない	7.6%	73人
そう思わない	2.1%	20人
全くそう思わない	0.5%	5人

１３．質問に適切に対応してくれましたか （必須）



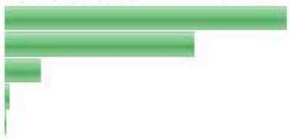
	比率	人数
とてもそう思う	53.5%	515人
そう思う	34.8%	335人
どちらともいえない	9.0%	87人
そう思わない	1.9%	18人
全くそう思わない	0.7%	7人

１４．授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか （必須）



	比率	人数
とてもそう思う	50.4%	485人
そう思う	37.7%	363人
どちらともいえない	9.6%	92人
そう思わない	1.6%	15人
全くそう思わない	0.7%	7人

１５．授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか （必須）



	比率	人数
とてもそう思う	55.0%	529人
そう思う	36.8%	354人
どちらともいえない	6.8%	65人
そう思わない	1.0%	10人
全くそう思わない	0.4%	4人

2021 秋＿授業アンケート（観光学部）

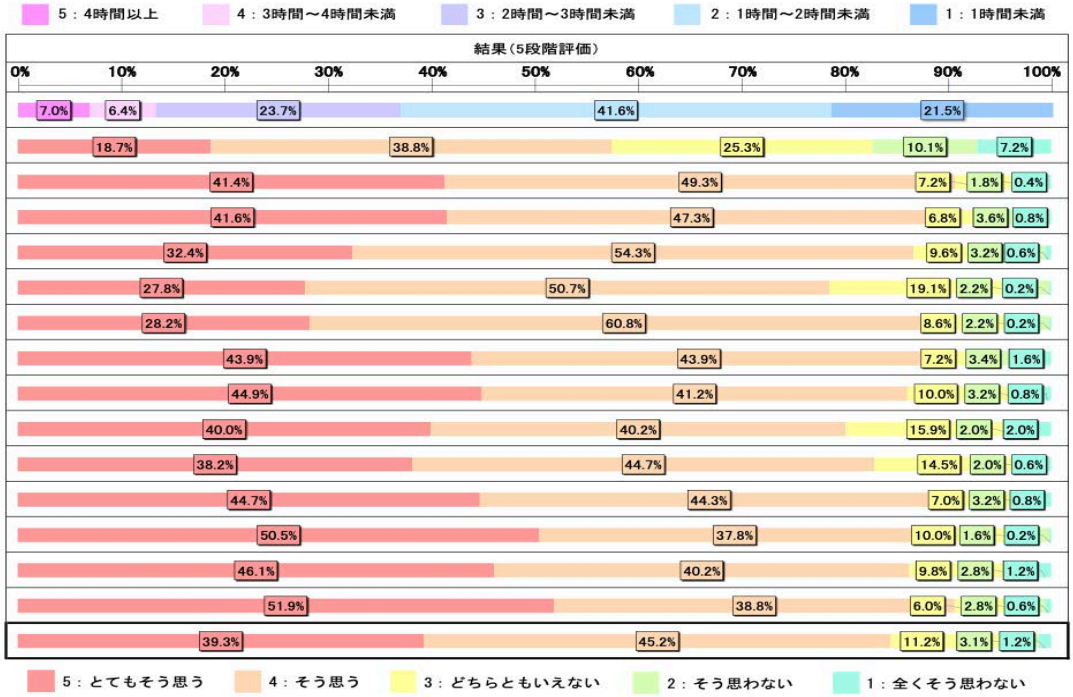
（注：本秋学期から集計フォーマット（DTS）の変更がされています）

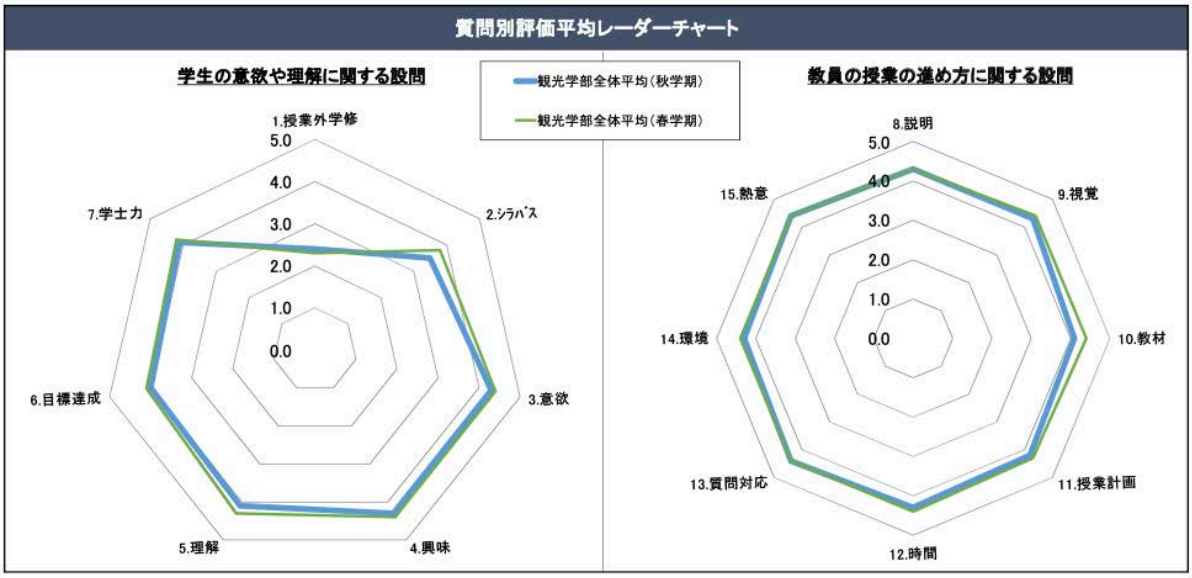
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

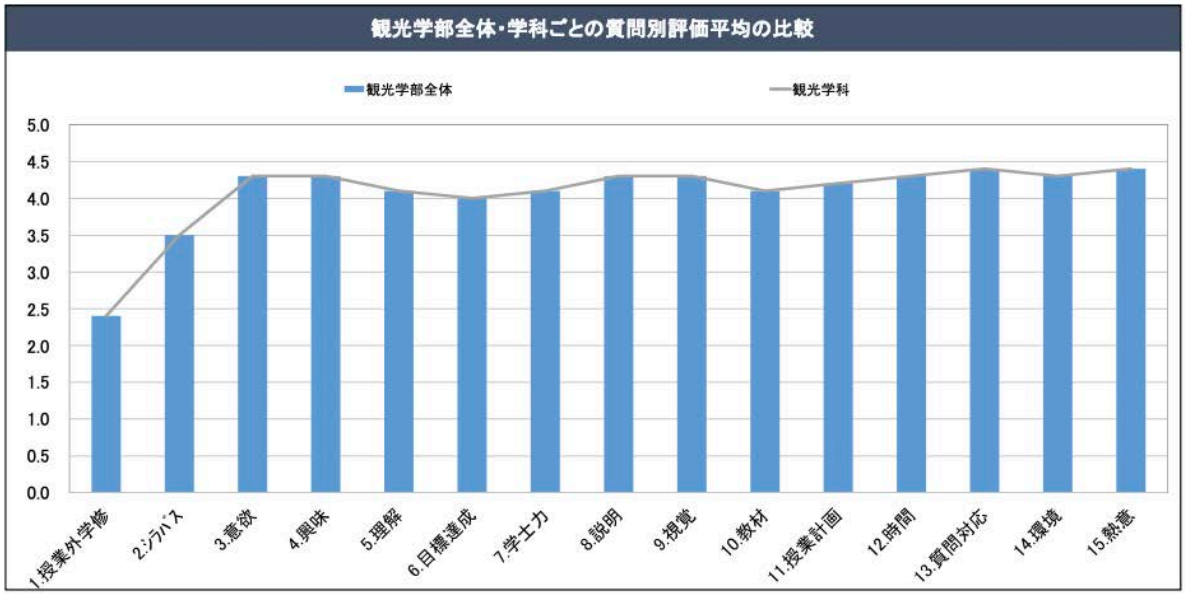
観光学部全体　　履修者数：　1,654 名　　回答者数：　503 名　　回答率：　30.4 %

		設問		観光学部全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4
総合評価				4.1

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）







4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

観光学部では令和 4 年度入学生から適用する新カリキュラムにおいてコース制をとり、「リージョナル・リーダーコース」と「グローバル・エリートコース」を設置する。

本年度令和 3 年度の FD 活動では、このコース設置を鑑み、特に「リージョナル・リーダーコース」に関連する活動（講演会）を 2 回実施した。

1 つ目の講演会では、地方公共団体（この場合は神奈川県）が主導する地域振興の仕組みや導入の方法、さらに導入にあたっての難しさ等事例に基づき、教員が学び取ることができた。

また、2 つ目の講演会では、SDGs の高まりを受けた大学教育の在り方や他大学の動向に加え、Sports×SDGs の新たな動きを知ることができ、SDGs 関連教育の参考となる知見を得ることができた。

以上のことから、当初予定していた FD 活動の目標を達成することができたと言って良いだろう。

5　今後（令和 4 年度以降）の予定・課題について

令和 3 年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、授業アンケートを実施する予定である。

令和 4 年度新入生から新カリキュラムを開始し、2 コース制が実施される。これに伴い、教員の担当科目の変更等が発生することから、学部の教育力のさらなる向上を目指す意味でも FD 活動のさらなる充実が求められると認識している。

また、昨年からの課題であるが、授業アンケートへの回答率の向上を図ることが求められる。令和 4 年度は対面授業となり、教員からの回答への呼びかけも直接的となるが、FD 活動の質の向上の観点からも、回答率を上げていることを、学部として、より積極的に取り組んでいく必要があると思われる。

３．教師教育リサーチセンターの活動

１　教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

２　教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、次長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

３　令和 3 年度の活動内容

（1）　教師教育フォーラム

①　概要（目的を含む）

令和 3 年 1 月 26 日、文部科学省中央教育審議会より「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）が示された。この答申では、急激な社会の変化の中での学校の役割や課題を踏まえ、2020 年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」としている。具体的には、ICT の活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している。

今回の「教師教育フォーラム」では、答申の内容を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するために、教育現場にはどのような変化があるのか、また、教員を養成する大学はどのように対応すべきであるのか、これらのことについて、講演者、出席者がともに考えるフォーラムとして開催した。

②　到達目標

オンライン開催となり、200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③　活動内容

日時：令和 3 年 11 月 6 日（土）9：30～15：30　於：大学教育棟 2014 より配信

テーマ：「『令和の日本型学校教育』における『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現に向けて」

【プログラム】

午前の部

○講演「『令和の日本型学校教育』の構築に向けた『個別最適な学び』、『協働的な学び』とは」

信州大学理事、前文部科学省大臣官房文部科学戦略官　髙口　努　氏

○シンポジウム

・「東京型教育モデル」の実現に向けた教員の育成

東京都教職員研修センター　研修部長　小寺　康裕　氏

・子どもの夢と未来をつなぐ学びの ICT 活用

相模原市立谷口台小学校　校長　西山　俊彦　氏

相模原市立谷口台小学校　教諭　佐藤　司明　氏

・「令和の日本型学校教育」の実現を目指した教員養成大学の方向性

玉川大学教師教育リサーチセンター　リサーチフェロー　教授　森山　賢一

【コーディネーター】玉川大学教師教育リサーチセンター

客員教授　　笠原　陽子

午後の部

○分科会:教職大学院

①国語教育　②特別支援教育 ③算数教育　④カリキュラム・マネジメント

④ 評価

“「令和の日本型学校教育」における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて”をメインテーマに掲げ、午前の部では“「令和の日本型学校教育」の構築に向けた「個別最適な学び」、「協働的な学び」とは”と題した講演、続いて教育現場で取り組む「令和の日本型学校教育」の実現に向けた取り組みと、GIGA スクール構想を具現化する ICT を活用した取り組みについて、ご講演をいただいた。さらに、森山賢一教授より教員養成大学に求められる教員育成の方向性について報告があった。午後の部では、本学の教職大学院担当者による分科会を行い、国語教育・特別支援教育・算数教育、カリキュラム・マネジメントについて、シンポジウム、講演、演習等を行い、ご参集の皆様と考える機会を持つことができた。

新型コロナウイルス感染防止対応により、昨年度に引き続きオンライン開催となったが、近隣地域だけでなく、遠方の現職教員等学校関係者、教員養成に携わる大学教職員、教員志望学生、教育研究者、教育委員会関係の方々等、教育に携わる方々にも参加して頂くことができたことは有益だった。

午前の部、午後の部を併せ、約 200 名の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

（2） 令和 3 年度教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

昨今の急激な社会の変化に対応する学校教育の質向上のため、「令和の日本型学校教育」の構築に向け、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが重要な課題となっている。ICT 活用の推進と少人数学級の実現が必要とされ、児童生徒「1 人 1 台端末」の整備、活用が始まっている。これらのことから、教員養成大学にも、ICT 活用指導力の向上が求められており、令和 4 年度からは ICT 活用に関する新規科目も開設される。そこで、具体的な事例を含めた「教科の指導法」等における ICT 活用に焦点をあて、研修会を開催した。各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

ここ数年のうちに課程認定申請、新たな科目「情報通信技術を活用した教育に関する理論および方法」（仮称）の開設など、社会の変化に伴って教職課程において、特に教員養成に関して様々な対応が求められている。特にICTに関しては、どの項目においても重要なキーワードとなっていることから、教員養成大学として、ICTに関連したテーマを設定することで、これからの教育活動への意識を高める。

③ 活動内容

日　時：　令和4年3月1日（火）10：00～11：30

場　所：　オンライン配信（Zoom）

テーマ：　「実践的な指導におけるICTの活用について」

大学院教育学研究科教職専攻（教職大学院）　教授　佐藤　修　氏

対　象：　大学教員、事務職員

内　容（目的）：昨今の急激な社会の変化に対応する学校教育の質向上のため、「令和の日本型学校教育」の構築に向け、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが重要な課題となっている。ICT活用の推進と少人数学級の実現が必要とされ、児童生徒「1人1台端末」の整備、活用が始まっている。これらのことから、教員養成大学にも、ICT活用指導力の向上が求められており、令和4年度からはICT活用に関する新規科目も開設される。そこで、具体的な事例を含めた「教科の指導法」等におけるICT活用に焦点をあて、文部科学省の取り組み指針等の最新情報を提供する機会とする。

④ 評価

本研修を通して、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた重要な課題となっている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現と、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の現状を確認した。さらに、教育現場と新たに教師に求められるICT活用指導力について共有し、教員養成大学としての、これからの教育活動への意識を高める機会となった。また、教育活動の中でのデジタルコンテンツの活用方法の具体的なイメージを持つことができ、今後の教員養成指導時に欠かせない知識を得ることができた。

4　昨年度（令和2年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和3年度の「教師教育フォーラム」及び「教職課程FD・SD研修会」各1回を開催するように計画した。計画通り実施することができ、それぞれの目標も達成することができた。

5　今後（令和4年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程FD・SD研修会」各1回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

なお、独立行政法人教職員支援機構「玉川大学センター」としての研修等についても、今後はFD活動として報告をしていきたい。

4．ELF センターの活動

1　FD・SD 活動への取組理念・目標

With コロナ時代における対面授業とオンライン授業を同時に行うハイブリッド型の授業を継続する必要があり教員研修が特に重要になった。さまざまなバックグラウンドを持つ教員が、リンガフランカ（ELF）教育として、英語を豊かにするユニークなプログラムで知られる玉川大学の ELF センター（CELF）も、これらの変化を通じて教員をどのように支援するかという課題に直面した。

CELF 教員研修（FD）は、教員のニーズをサポートし、遠隔教育のスキルを向上させるために、さまざまな FD ワークショップ、講義、特別セミナー、オンラインディスカッションを計 31 回実施し、教員がプログラムを受講できるように支援を行った。これは、可能な限り最高のオンライン学習環境と、リンガフランカとしての英語の理解と使用を促進することが目的である。このレポートでは、教員研修活動と研修成果について説明し、過去 1 年間の CELF FD 調査の結果を明らかにする。 令和 4 年度の CELF FD のいくつかの計画も提示する。

ELF プログラムの成果にとって重要なことは、各教員の教育の質である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるということが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤講師によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。ELF センターには世界初の共通語としての英語を学ぶ ELF（English as a Lingua Franca）プログラムに誇りを持つ、さまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる。 令和 3 年度は外国語の学習と教育に豊富な経験を持つ 50 人以上の ELF 教員が授業を担当した。教員の出身国は、オーストラリア、ブラジル、ブルガリア、カナダ、中国、エジプト、フランス、ドイツ、インド、アイルランド、イタリア、日本、韓国、マレーシア、ニュージーランド、フィリピン、ロシア、スペイン、タイ、英国、米国、ベトナム、スロバキア、フィンランドの 24 ヶ国で、チェコ語、アラビア語、ブルガリア語、中国語、英語、フィンランド語、ドイツ語、日本語、韓国語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、タガログ語、テルグ語、タイ語、ベトナム語、スロバキア語、マレー語など、さまざまな母語を持つ。ELF センター所属の教員全員が協力して、リンガフランカとしての英語の使用の認識が強調される言語学習環境を提供している。

FD 活動は、彼らにとって互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2　ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELF Journal, CELF Forum, Research, CELF Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3　令和 3 年度の活動内容

（1）講演会・ワークショップの開催

1） CELF-ELTama Forum for English Language Teaching

① 概要

ELF センターは令和 3 年度も ELTama と合同で CELF-ELTama Forum for English Language Teaching を開催した。

② 達成目標

・ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
・学園内の英語教員を集める。
・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
・これらの活動によって ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・玉川大学 ELF センターの国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を広める。

③ 活動内容

以下のワークショップや発表大会がオンラインにより開催された。

・令和 3 年 8 月 21 日（土）10：00～16：45
CELF-ELTama Forum for English Language Teaching フォーラム

④ CELF-ELTama フォーラムの評価

COVID-19 のパンデミックの影響で令和 3 年度の CELF-ELTama フォーラムは、今回もオンラインで行われた。参加者は減って 70 名程になったが、ELF センター所属の教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。今年度の発表件数は 13 件で、昨年度より ELF 非常勤講師の発表が増え、ゲストスピーカーの発表も素晴らしく、また学内の英語教員達が協力できたことが非常に良かったとの感想をいただいた。

インターネット上でさまざまなホームページ（玉川大学のホームページ、JACET SIG、ELT Calendar）にイベントの広報ができた。

・E メールリスト（CELF Mailing List, JACET SIG Mailing List）に CELF-ELTama フォーラムのイベントの広報ができた。

2） 講演会、CELF　特別講演会

① 概要

ELF センターは令和 2 年度に引き続き CELF Special FD 特別講演会を開催した。昨年度より多く、オンラインクラスの内容を中心に、英語教育、ELF 教育、言語政策など、さまざまな研究分野の研究者や教員を CELF Special FD 特別講演会に招待した。

CELF ファカルティディベロップメント（FD）は、教員の研究と業績、および年度を通じての専門能力開発を奨励し、強化するのに役立つ。今年は、すべての FD 特別ワークショッ

プで、教員が自身の研究を紹介し、対面および Zoom を通じ、さまざまな機会に専門知識を共有する機会が提供された。上記の CELF FD ワークショップに加えて、以下の My Share 特別ワークショップが開催された。

② 達成目標

・ELF 教員の国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を高める。
・ELF 教員や学園内の英語教員を集める。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師の参加を促す。
・ELF センターと英語教育関係学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・国際共通語としての英語（ELF）研究、言語政策、言語教育への応用に関する知識を深める。

③ 活動内容

1)講演会の開催

・ELF Special Workshop- My share
講演：Microsoft Teams FD Workshop
実施日：令和 3 年 4 月 16 日（金） 17：00～18：00
講師：ヴィラローエル，アルド　ELF センター非常勤講師

・ELF Special FD　講演会①
講演：Student Engagement
実施日：令和 3 年 12 月 6 日（月） 17：00～18：00
講師：中村 幸子　ELF センター助教

・ELF Special FD　講演会②
講演：English Education at Primary and Secondary Schools in Japan under New Course of Study - Status Quo and Future Challenges
実施日：令和 4 年 1 月 11 日（火） 17：00～18：00
講師： 森本　俊　文学部英語教育学科　准教授

（2）研究会・研修会・ワークショップなど

① 概要

・Blackboard の使い方に関しての理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 達成目標

・非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
・ELF 研究について最先端の知識を深める。
・ELF の理念について教員間で知識を深める。
・言語教育について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

1)ワークショップ・講演会等

・Blackboard, UNITAMA and Zoom ワークショップ（2 回）
実施日：令和 3 年 4 月 8 日（木）17：00～18：00 参加者 12 名
令和 3 年 4 月 9 日（金）17：00～18：00 参加者 3 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・Blackboard, Blog and Grade Center ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 4 月 30 日（金）17：00～18：00 参加者 7 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・Blackboard, Grade Center and Zoom Classroom ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 10 月 6 日（水）17：00～18：00 参加者 5 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・成績評価 and UNITAMA FD　講演会、ワークショップ（2 回）
実施日：令和 3 年 7 月 16 日（金）17：00～18：00 参加者 2 名
令和 3 年 12 月 20 日（月）17：00～18：00
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・CELF Online TOEIC IP Test　FD　講演会、ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 6 月 7 日（月）17：00～18：00 参加者 9 名
講師：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授

・CELF Online Tutor　FD　講演会、ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 4 月 26 日（月）17：00～18：00 参加者 1 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・Google Drive for Online Teaching　講演会、ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 5 月 24 日（月）17：00～18：00 参加者 9 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・CELF Hybrid FD Workshop and Discussion　講演会、ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 10 月 12 日（火）17：00～18：00 参加者 7 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

・CELF Extensive Reading an MReader　FD　講演会、ワークショップ（1 回）
実施日：令和 3 年 10 月 18 日（月）17：00～18：00 参加者 10 名
講師：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授

・ELF FD Discussion session　講演会、ディスカッション（1 回）
実施日：令和 4 年 1 月 17 日（月）17：00～18：00 参加者 2 名
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター准教授

④ 評価

ELF センターの教員は Blackboard を学内で活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF 教員の多読と M-Reader の仕組みの理解と円滑な利用をサポートする ELF および言語意識に関するワークショップは、教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に活かすかについて考慮していることがわかった。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見ることができた。

（3）ELF センター教員オリエンテーション

① 概要

・ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。これは単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動などさまざまな FD 活動を含んだ内容となっている。

② 達成目標

・ELF 研究について最先端の知識を深める。
・ELF の理念について教員間で知識を深める。
・ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。
・新 ELF プログラムに関する研修会紹介。

③ 活動内容

ELF 教員の次年度オリエンテーション

・令和 3 年度秋学期 ELF 教員の次年度オリエンテーション
実施日：令和 3 年 9 月 15 日　（水）10：00～15：30
新任非常勤講師のオリエンテーション（10：00～12：30）
非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション
講師：マクブライト，ポール　ELF センター長代理、鈴木　彩子 副センター長、ELF センター専任教員

・令和４年度春学期 ELF 教員のオリエンテーション

実施日：令和４年３月 23 日（月）10：00～16：30

新任非常勤講師のオリエンテーション（10：00～13：00）

ELF センター

非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（13：00～16：30）

Zoom

講師：マクブライト，ポール　ELF センター長代理、鈴木　彩子 副センター長、

ELF センター専任教員

④ 評価

秋学期開始前と次年度春学期開始前に開催された。午前のセッションでは各教員に ELF プログラム、オンラインクラス、教科書、およびカリキュラム、CELF チューター制度、クラス管理、テクノロジー指向が提供された。午後のセッションでは、プログラム説明、年間授業計画に関する説明、教員の育成、クラスの管理と評価、広範囲にわたる読書、新たな ELF のオリエンテーションに関する情報、そしてキャンパスツアーに焦点を当てた。参加者にとっては非常に有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員で実施内容についての改善点を協議することにしている。

当日参加できなかった非常勤講師へは、後日別途実施するため、参加率は 100%となる。年度途中の新任講師へのオリエンテーションも実施している。

（４）学生による授業アンケート

① 概要

令和 3 年度の春秋学期の期末に、ELF センター独自のオンライン授業アンケートを実施した。学生は授業中にスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 18 項目あり、学生は、教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF 教育に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有された。

② 達成目標

授業アンケート調査の目的は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることである。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もある。

③ 活動内容

春学期授業アンケートは、1,583 名を対象に実施し評価回答を得た。

秋学期授業アンケートは、1,369 名を対象に実施し評価回答を得た。

④ 評価

これらのアンケート結果は ELF プログラムに対する評価として使用され、令和 4 年度の教育プログラム構築のために使用される。大半の学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。令和４年度は授業アンケート調査を春学期と秋学期（年２回）に行い、それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらう。

（5）教員による授業内容アンケート

① 概要

令和 3 年度の秋学期末に、ELF センター独自のオンライン授業内容アンケートを実施した。アンケートは 14 項目あり、教員は、教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、ELF センターから受けるサポートの質について評価した。アンケート結果は教育プログラムの改善計画や研究の目的で使用される。

② 達成目標

・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。

・カリキュラムを改革すること。

③ 活動内容

春学期と秋学期のアンケートから回答を得た。

④ 評価

CELF FD 調査の結果

CELF FD は、CELF の教員が ELF の認識を伝え、強化すると同時に、専門能力の開発、学業成績、生涯学習を促進することを目的としている。この目的のために、CELF は令和 3 年度にさまざまな FD イニシアチブを実施した。FD を監視および改善するために、年に 2 回の CELF FD 調査実施に加えて、CELF 教員調査を学年末に実施し、CELF FD のトレーニングとサポートを評価している。

教員の調査では、CELF FD トレーニングへの満足度と、CELF 教員として受けたサポートに関連する 5 つのリッカート尺度の項目に匿名で回答するよう教員に求めた。今回のアンケート結果は教科書選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについての検討に役立てられた。

（6）ELF センターの出版物

ジャーナルを出版することは、ジャーナルの論文が数多く引用をされた場合、玉川大学が世界におけるランキングをアップグレードするのに役立つため、大学名を国内および国際レベルで宣伝するための重要なツールとなる。今年度から、The Center for ELF Forum　オンラインジャーナルを発行した。

Englishes In Practice (EIP)

① 概要

ELF センターでは、令和 3 年度、石川友和助教が運営権の交渉にあたり、Sciendo 社のオープンアクセスジャーナル「Englishes in Practice」という学術誌の運営を開始した。ミリナー，ブレット准教授を筆頭に、ELF センター教員の多くが編集委員や編集諮問委員を務め、令和 4 年 4 月に第 1 号（4 本）の論文を刊行する。平成 26 年に英国サウサンプトン大学が始めた学術誌である本誌は、ELF（共通語としての英語）という学問分野にとって重要な研究のプラットフォームであり、世界各地の研究者に引用されている。

② 達成目標

・先駆的研究論文をスピーディーに発信する

・教員間で高い学識を探究する。
・ELF に対する学識を共有する。
・ELF センター所属の教員に効果的な研究発表の場を設ける。

③ 活動内容

・Englishes In Practice (EIP) を出版する。
・Englishes In Practice (EIP) ELF センターのホームページにもリンクを掲載する。

④ 評価

Englishes in Practice は今後も世界各地の研究者に読まれることが期待される。

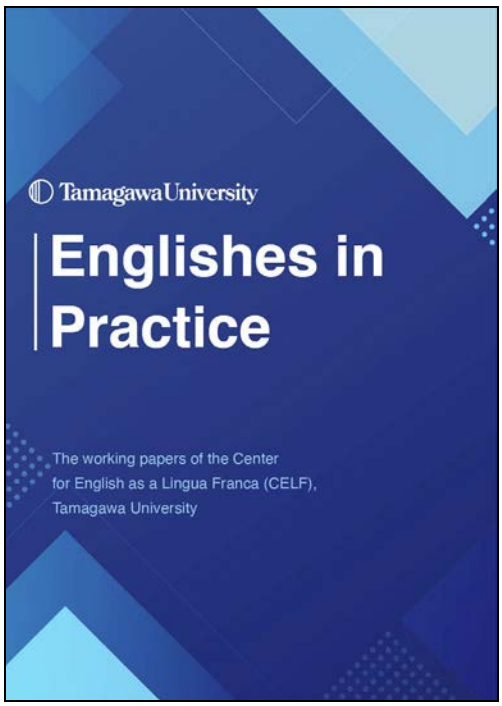


図 1. Englishes In Practice (EIP)　第 1 号

The Center for ELF Journal

① 概要

令和 3 年度、ミリナー，ブレット准教授とコーテ，トラヴィス准教授がジャーナル担当となり、The Center for ELF Journal をオンライン出版した。 ELF センターの教員全員が査読者となりそれぞれの投稿論文を審査し、The Center for ELF Forum の第 2 号を発行した。

https://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/journal.html

② 達成目標

・授業運営を改善する。
・自発的学修についてのアイディアを共有する場を設ける。
・教員間で高い学識を探究する。
・ELF に対する学識を共有する。
・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③ 活動内容

・The Center for ELF Forum 第 2 号をオンライン発行した。

The Center for ELF Forum 第 2 号はコロナウイルス感染症の影響により、オンライン出版し、学内や学外にオンラインリンクを公開した。また、ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載する。さらに、教員のアカデミックポータル（academia.edu,REAP, Google Scholar, Research Gate など）にも掲載する。

④ 評価

The Center for ELF Forum は各教員に配付され、投稿者自身も満足度が高いものになった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手に取ることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

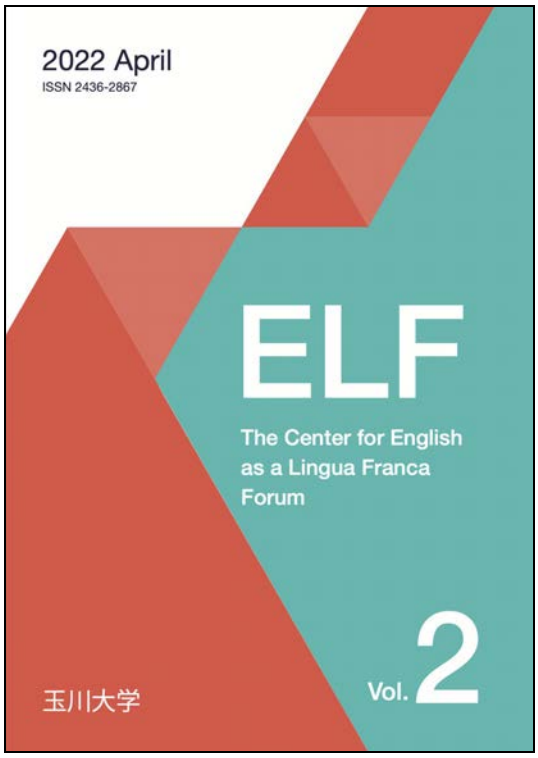


図 2. The Center for ELF Forum 第 2 号

4　今年度に提案された予定・課題の達成度について

今年度 With コロナ時代における対面授業とオンライン授業を同時に行うハイブリッド型の授業に変更する必要があり、教員研修が特に重要になった。 特に、ハイブリッド型授業の対応方法についての Workshop や勉強会の開催、日々のオンライン授業の課題について非常勤講師と共に話し合える場を設けるなど、新たな取り組みを行った。

日本国内の会議やその他の学術イベントでは、22 件の発表があった。マクブライド，ポール ELF センター長代理が Asia TEFL においてシンポジウム English as a lingua franca (ELF): Implications and applications を企画し、同准教授とキム助教が研究発表を行った。

今年度の ELF センター発刊ジャーナルでは ELF スキルや評価に焦点を当て、トレーニングや活発な研究活動について記載している。表 1 は令和 3 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。

表 1. 令和 3 年度 4－9 月の CELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国外オンライン発表	9
国内オンライン発表	18
論文を投稿・出版	18
科学研究費助成事業	12

表 2. 令和 3 年度の CELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
有	Kuroshima, S., Hyeri Kim, S., Hayano, K., Shin Kim, M., Lee, S. (2021). When OKAY is repeated. In E. Betz, A. Deppermann, L. Mondada, & M. Sorjornen (Eds.). OKAY across Languages. John Benjamins Publishing Company. https://doi.org/10.1075/slsi.34	Satomi Kuroshima, Stephanie Hyeri Kim, Kaoru Hayano, Mary Shin Kim and Seung-Hee Lee
有	Milliner, B., & Dimoski, B. (2021). The effects of a metacognitive intervention on lower-proficiency EFL learners' listening comprehension and listening self-efficacy. Language Teaching Research. https://doi.org/10.1177/13621688211004646	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
無	Chaikul, R., & Milliner, B. (2020). A report on research at the Center for English as a Lingua Franca 2020. The Center for English as a Lingua Franca Forum, 1, 49-62. http://doi. org/10.15045/ELF_0060112	Rasami Chaikul & Brett Milliner
有	Milliner, B. (2021). Reading fluency training for elementary-level EFL learners: The effects of combining timed-reading, repeated-oral-reading, and extensive-reading. Reading in a Foreign Language, 33(2), 191-211. http://hdl.handle.net/10125/67400	Brett Milliner
有	Baker, W., & Ishikawa, T. (2021). Transcultural communication through Global Englishes: An advanced textbook for students. Routledge. (教科書)	Will Baker & Tomokazu Ishikawa

有	Ishikawa, T. (2021). Translanguaging and English-within- multilingualism in the Japanese EMI context. In Tsou, W. & Baker W. (Eds.), English-medium instruction translanguaging practices in Asia: Theories, frameworks and implementation in higher education (pp. 39-57). Springer. https://doi.org/10.1007/978-981- 16-3001-9_3	Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T., & Baker, W. (2021). Multi-, inter-, and trans-? 'Confusing' terms for ELF researchers. The Center for English as a Lingua Franca Forum, 1, 21-30. https://doi. org/10.15045/00001564	Tomokazu Ishikawa & Will Baker
有	Ishikawa, T. (2021). Reconceptualising intercultural and transcultural communicative competence. Proceedings of the JACET 60th Commemorative International Convention, 127-128.	Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2022). English as a multilingua franca and trans- theories. Englishes in Practice, 5(1).	Tomokazu Ishikawa
有	Kuroshima, S., Dimoski, B., Okada, T., Yujobo, J. Y., & Chaikul, R. (2022). Navigating boundaries through knowledge: Intercultural Phenomenon in ELF interactions. Englishes in Practice, 5(1).	Satomi Kuroshima, Blagoja Dimoski, Tricia Okada, Jody Yuri Yujobo, & Rasami Chaikul
有	Borlongan, A. M., & Ishikawa, T. (2021). English in Japan and Japanese English: Introduction to the special issue. Asian Englishes, 23(1), 1-2. https://doi.org./10.1080/13488678.2021.188 2804	Ariane Macalinga Borlongan & Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2021). Global Englishes and 'Japanese English'. Asian Englishes, 23(1), 15-29. https://doi.org/10.1080/13488678.2 020.1858579	Tomokazu Ishikawa
有	Suzuki, A. (2021). Changing views of English through study abroad as teacher training. ELT Journal, 75(4), 397-406. https:// doi.org/10.1093/elt/ccab038	Ayako Suzuki
有	Kuroshima, S., & Ivarsson, J. (2021). Toward a praxeological account of performing surgery: Overcoming methodological and technical constraints. Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality, 4(3). https://doi.org/10.7146/si.v4i3.128146	Satomi Kuroshima & Jonas Ivarsson

無	Milliner, B., & Shimono, T. (2021). ERJ interview with Torrin Shimono. Extensive Reading Japan, 14(1), 3-5.	Brett Milliner & Torrin Shimono
有	Okada, T. (2021). The migration pathways and gender performance of Transpinay entertainers in Japan. [Doctoral dissertation, Waseda University] (博士論文)	Tricia Okada
無	Milliner, B. (2022). Create your own vocabulary levels test with VocabLevelTest.org. The Language Teacher, 46(1), 33-35.	Brett Milliner
有	Reinders, H., & Nakamura, S. (2021). Engagement. In S. Mercer & T. Gregersen (Eds.), The Routledge handbook of the psychology of language learning. Routledge. https://doi. org/10.4324/9780429321498	Hayo Reinders & Sachiko Nakamura
有	Nakamura, S., Darasawang, P., & Reinders, H. (2021). A practitioner study on the implementation of strategy instruction for boredom regulation. Language Teaching Research. https://doi. org/10.1177/13621688211010272	Sachiko Nakamura, Pornapit Darasawang, & Hayo Reinders
有	Nakamura, S., Darasawang, P., & Reinders, H. (2021). The antecedents of boredom in L2 classroom learning. System, 98, 1-15. https://doi.org/10.1016/j.system.2021.102469	Sachiko Nakamura, Pornapit Darasawang, & Hayo Reinders
有	Nakamura, S., Reinders, H., & Darasawang, P. (2022). A classroom-based study on the antecedents of epistemic curiosity in L2 learning. Journal of Psycholinguistic Research, 1–16. https:// doi.org/10.1007/s10936-022-09839-x	Sachiko Nakamura, Pornapit Darasawang, & Hayo Reinders

5　今後（令和4年度以降）の予定・課題について

令和元年度に、全ての学部・学科が ELF 科目を履修することになり、ELF の授業規模が拡大した。全8学部・17学科で ELF プログラムの履修が必修化され、ELF 教育を担うこととなった。また、令和5年度からは新 ELF プログラムの導入を予定している。

令和4年度、ELF センターは専任教員、非常勤講師、兼担教員の多彩な国籍の教員陣で構成されることとなる。

FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は、以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. ELF センター主催 FD ワークショップの学内公開
2. Englishes in Practice および CELF Forum の出版
3. ELF の概念に関する講義
4. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
5. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
6. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
7. 学生や教員による授業アンケート
8. 効果的な教員オリエンテーション
9. 他大学との言語教育交換研究会
10. オンライン授業のサポート
11. 新 ELF プログラムに関する研修会、ワークショップ

５．授業アンケート

１．アンケート実施概要

（１）概要

FD活動の一環として授業の改善に資するため、令和3年度春学期・秋学期の期中・期末において、学内ポータルサイト「UNITAMA」にて学生に対し授業アンケートを実施した。対象科目は、全科目（ユニバーシティ・スタンダード科目（US科目）、学部学科専門科目）である（ただし、一部の集中講義科目と、各学部にてアンケートを実施する科目を除く）。

回答者数・履修者数（いずれも延べ数）及び回答率は次のとおりであった。

	春学期		秋学期	
	期中	期末	期中	期末
回答者数	17,281 名	33,610 名	17,180 名	23,135 名
履修者数	49,104 名	51,452 名	49,077 名	49,773 名
回答率	35.2%	65.3%	35.0%	46.5%

（２）実施時期

春学期…期中：5 月 28 日(金) 9：00 ～ 6 月 10 日(木) 23：59　＊第 8 回授業前後
　　期末：7 月 15 日(木) 9：00 ～ 8 月 12 日(木) 23：59
秋学期…期中：11 月 9 日(火) 9：00 ～ 11 月 22 日(月) 23：59　＊第 8 回授業前後
　　期末：1 月 17 日(月) 9：00 ～ 2 月 4 日(金) 23：59
※上記期間中であれば学生は回答を修正し、再提出することができる。

（３）実施方法

「UNITAMA」の Web アンケートにて実施した。学生には事前に「UNITAMA」掲示板において周知を行った。

（４）アンケート様式

期中及び US 科目（期末）の授業アンケート様式は、参考資料３（p.137）のとおりである。学部学科専門科目（期末）の設問は、大学ホームページ内で公開されているレポートに掲載している。

２．集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、授業別及び次の分類別に行った。

US 科目：
　US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群、人文科学科目群、社会科学科目群、
　自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群
学部学科科目*：
　学部全体、学科別

*一部、分類が異なる学部がある。詳細は各学部のレポートを参照のこと。

集計結果は授業担当者及び各学部にフィードバックしている。アンケート回答は各授業担当者がUNITAMA上で随時確認でき、期中の結果においては開講中の科目の授業改善へリアルタイムに活用されている。また、期末の結果は、授業別及び分類別にレポートにまとめ、授業担当者及び各学部に提供しており、授業担当者が次学期以降の授業改善に活用するほか、各学部で結果の分析が行われたり、次年度以降のカリキュラム改善のための資料として用いられたりするなど、各学部のFD活動のなかでも活用されている。

なお、期末の分類別のレポートは大学ホームページ内でも公表している。

https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/

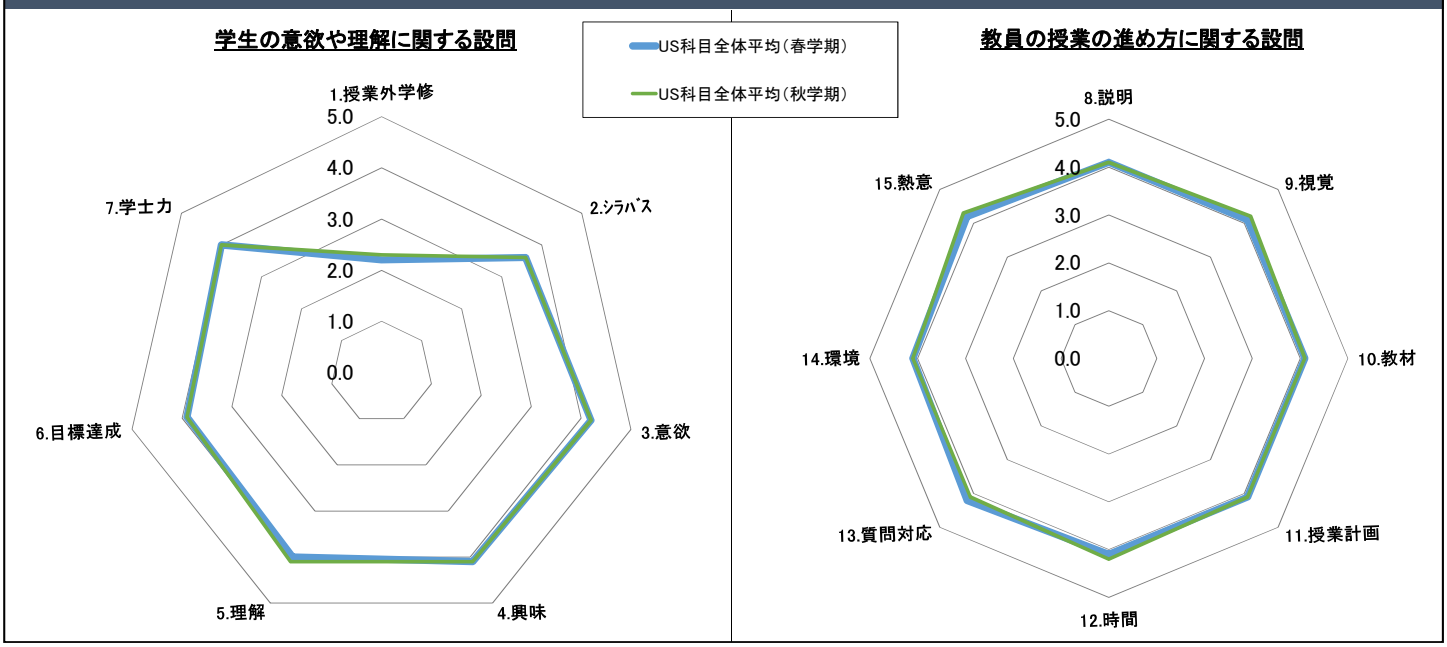
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

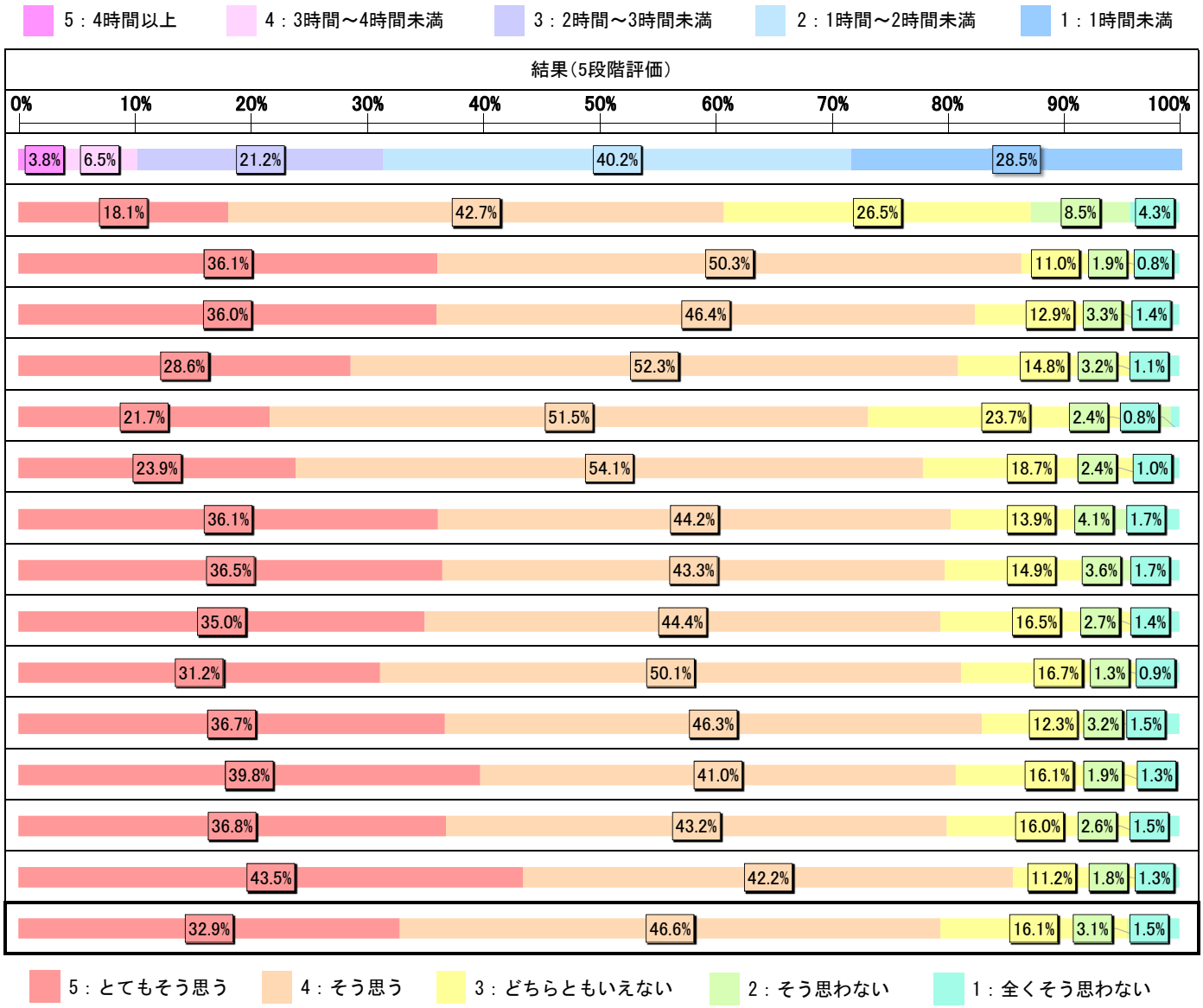
US科目全体　　履修者数： 19,760 名　　回答者数： 14,032 名　　回答率： 71.0 %

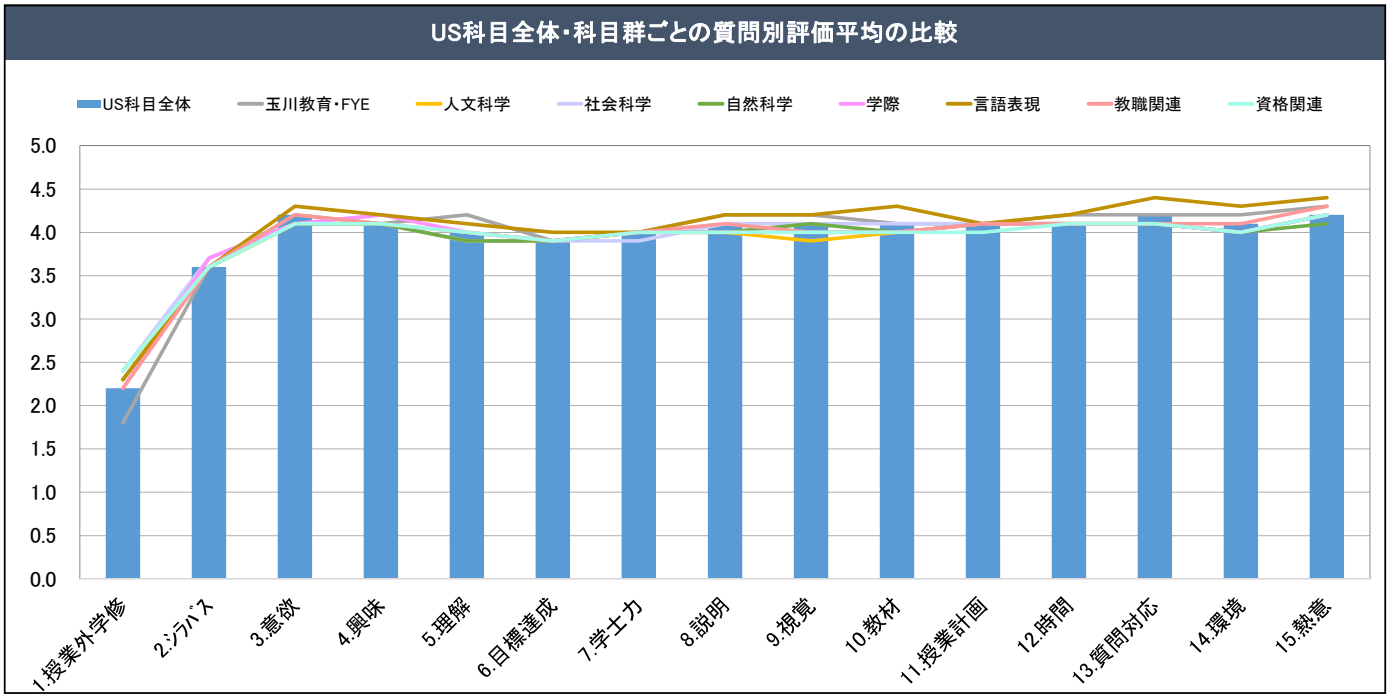
			設問	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2
総合評価				3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.8%
6.5%
21.2%
40.2%
28.5%
18.1%
42.7%
26.5%
8.5%
4.3%
36.1%
50.3%
11.0%
1.9%
0.8%
36.0%
46.4%
12.9%
3.3%
1.4%
28.6%
52.3%
14.8%
3.2%
1.1%
21.7%
51.5%
23.7%
2.4%
0.8%
23.9%
54.1%
18.7%
2.4%
1.0%
36.1%
44.2%
13.9%
4.1%
1.7%
36.5%
43.3%
14.9%
3.6%
1.7%
35.0%
44.4%
16.5%
2.7%
1.4%
31.2%
50.1%
16.7%
1.3%
0.9%
36.7%
46.3%
12.3%
3.2%
1.5%
39.8%
41.0%
16.1%
1.9%
1.3%
36.8%
43.2%
16.0%
2.6%
1.5%
43.5%
42.2%
11.2%
1.8%
1.3%
32.9%
46.6%
16.1%
3.1%
1.5%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

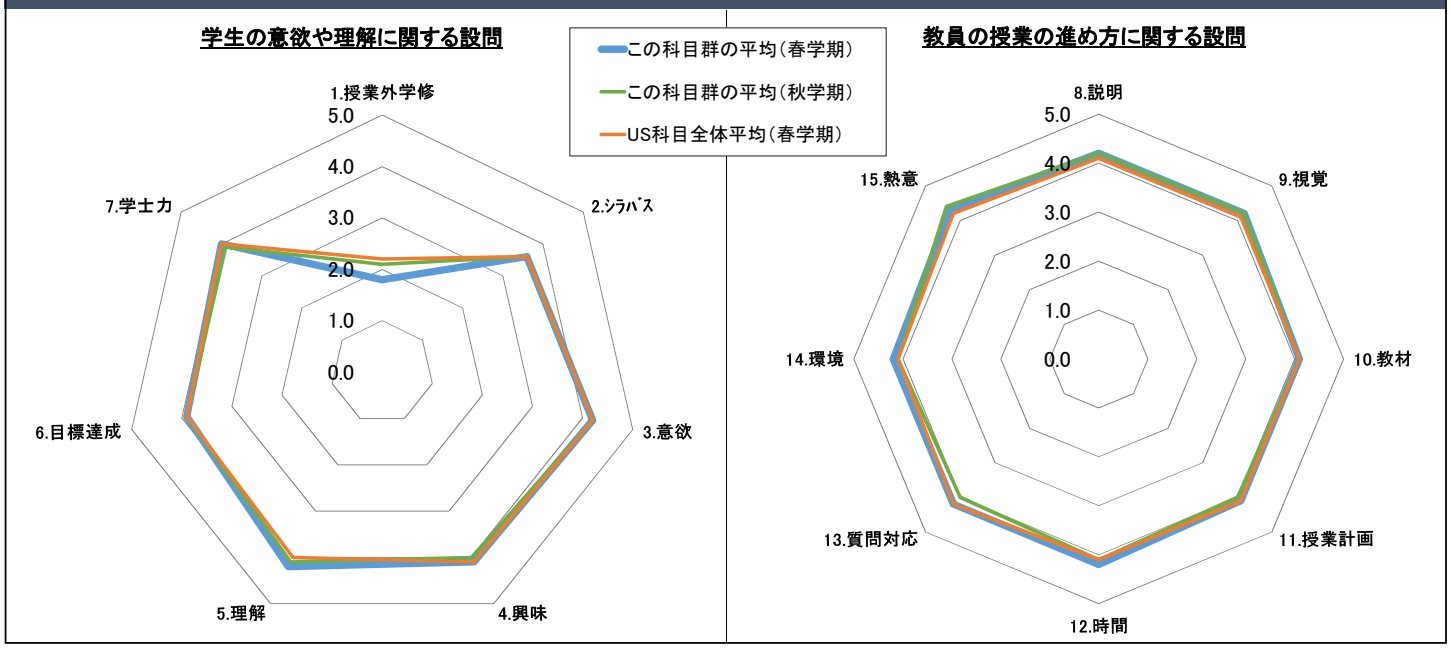
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

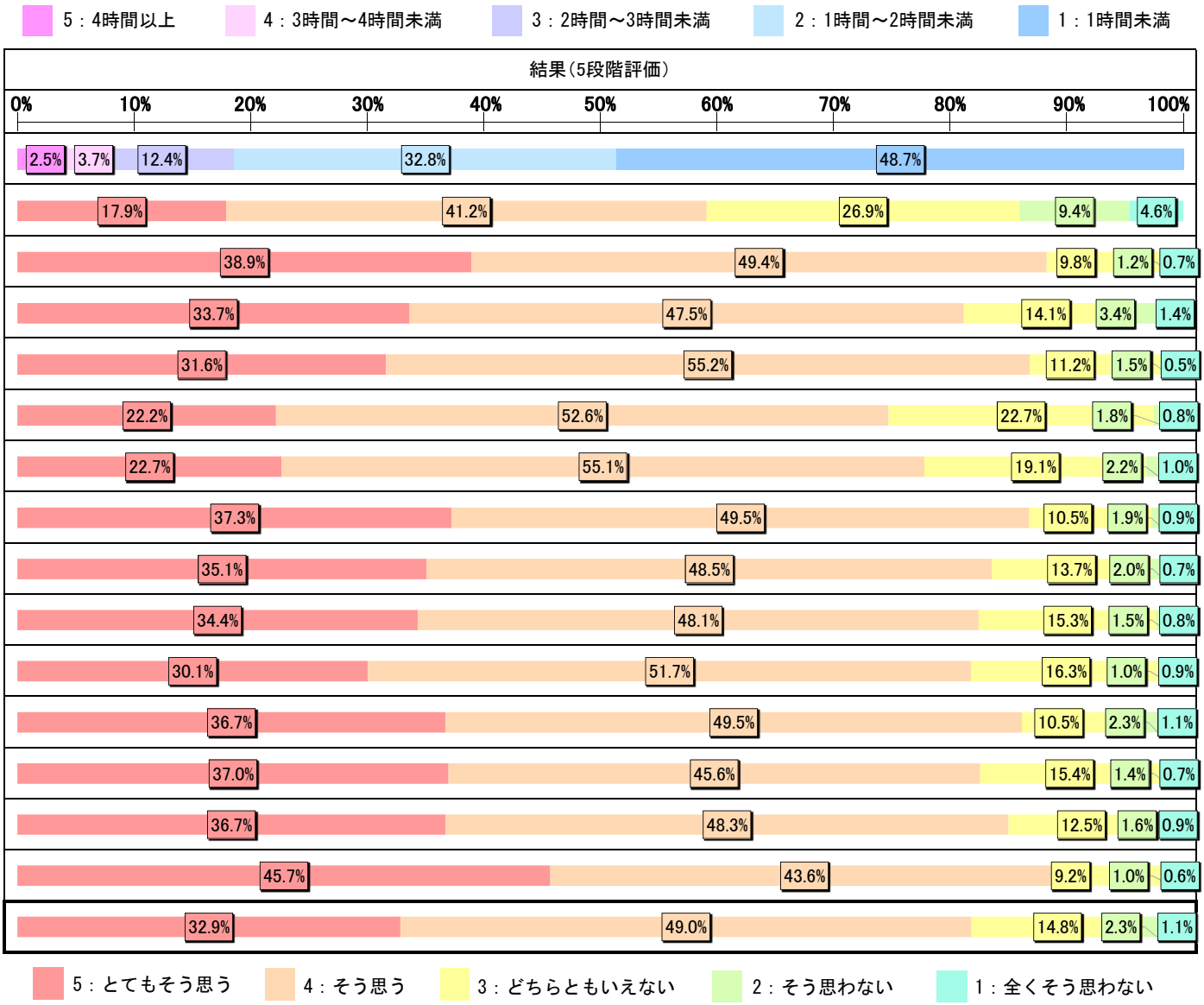
US科目　玉川教育・FYE科目群　　履修者数： 5,031 名　　回答者数： 3,804 名　　回答率： 75.6 %

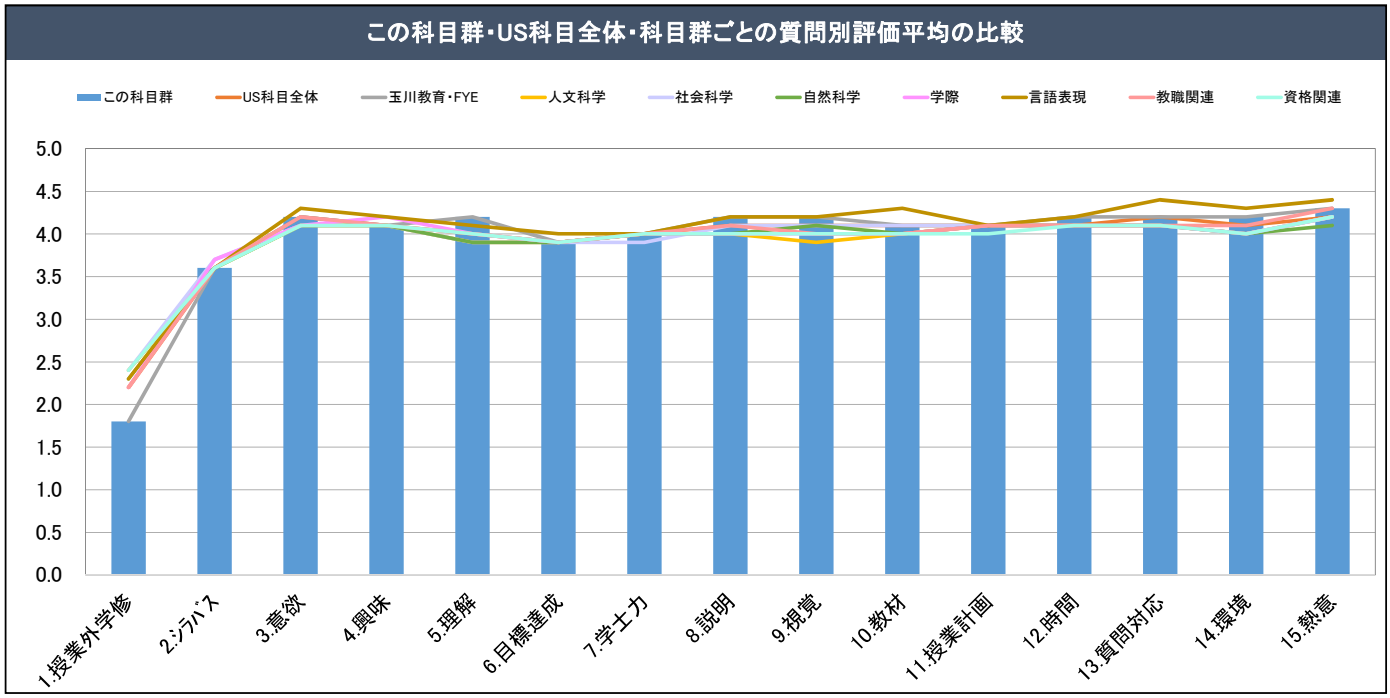
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	1.8	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.2
総合評価				4.0	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
2.5% 3.7% 12.4% 32.8% 48.7%
17.9% 41.2% 26.9% 9.4% 4.6%
38.9% 49.4% 9.8% 1.2% 0.7%
33.7% 47.5% 14.1% 3.4% 1.4%
31.6% 55.2% 11.2% 1.5% 0.5%
22.2% 52.6% 22.7% 1.8% 0.8%
22.7% 55.1% 19.1% 2.2% 1.0%
37.3% 49.5% 10.5% 1.9% 0.9%
35.1% 48.5% 13.7% 2.0% 0.7%
34.4% 48.1% 15.3% 1.5% 0.8%
30.1% 51.7% 16.3% 1.0% 0.9%
36.7% 49.5% 10.5% 2.3% 1.1%
37.0% 45.6% 15.4% 1.4% 0.7%
36.7% 48.3% 12.5% 1.6% 0.9%
45.7% 43.6% 9.2% 1.0% 0.6%
32.9% 49.0% 14.8% 2.3% 1.1%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

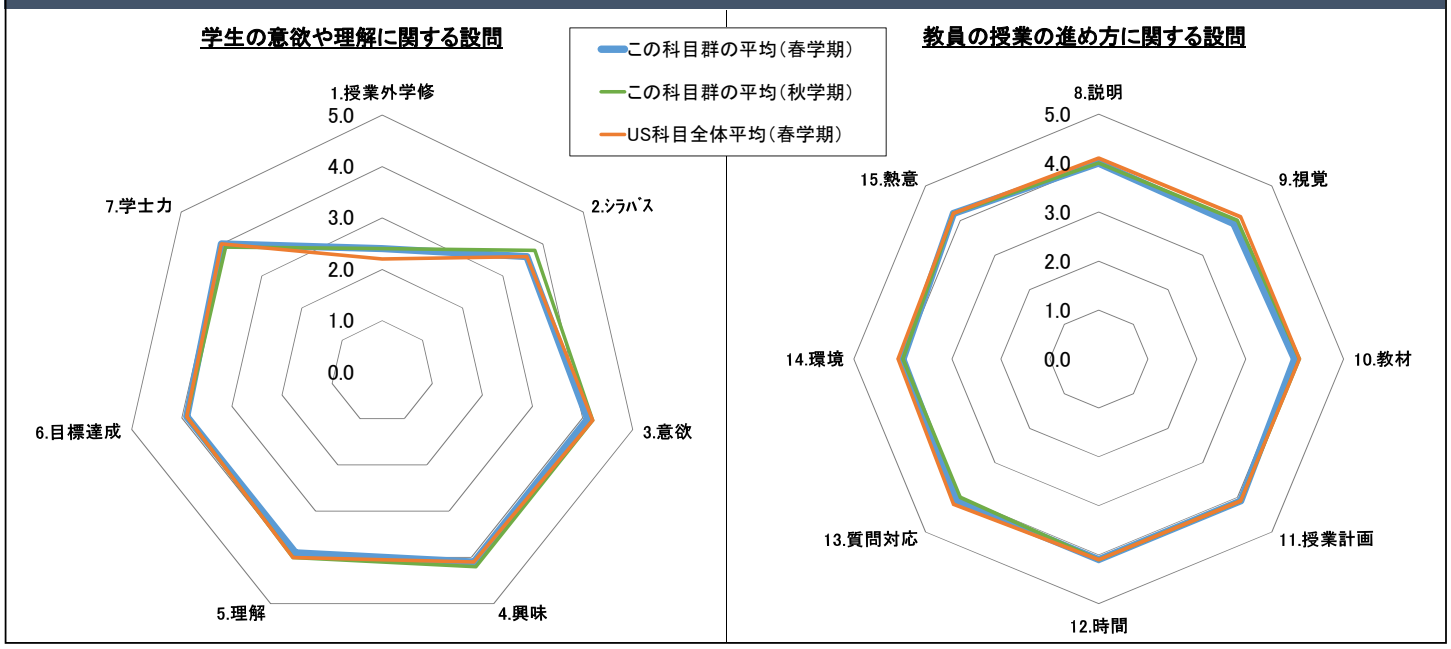
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

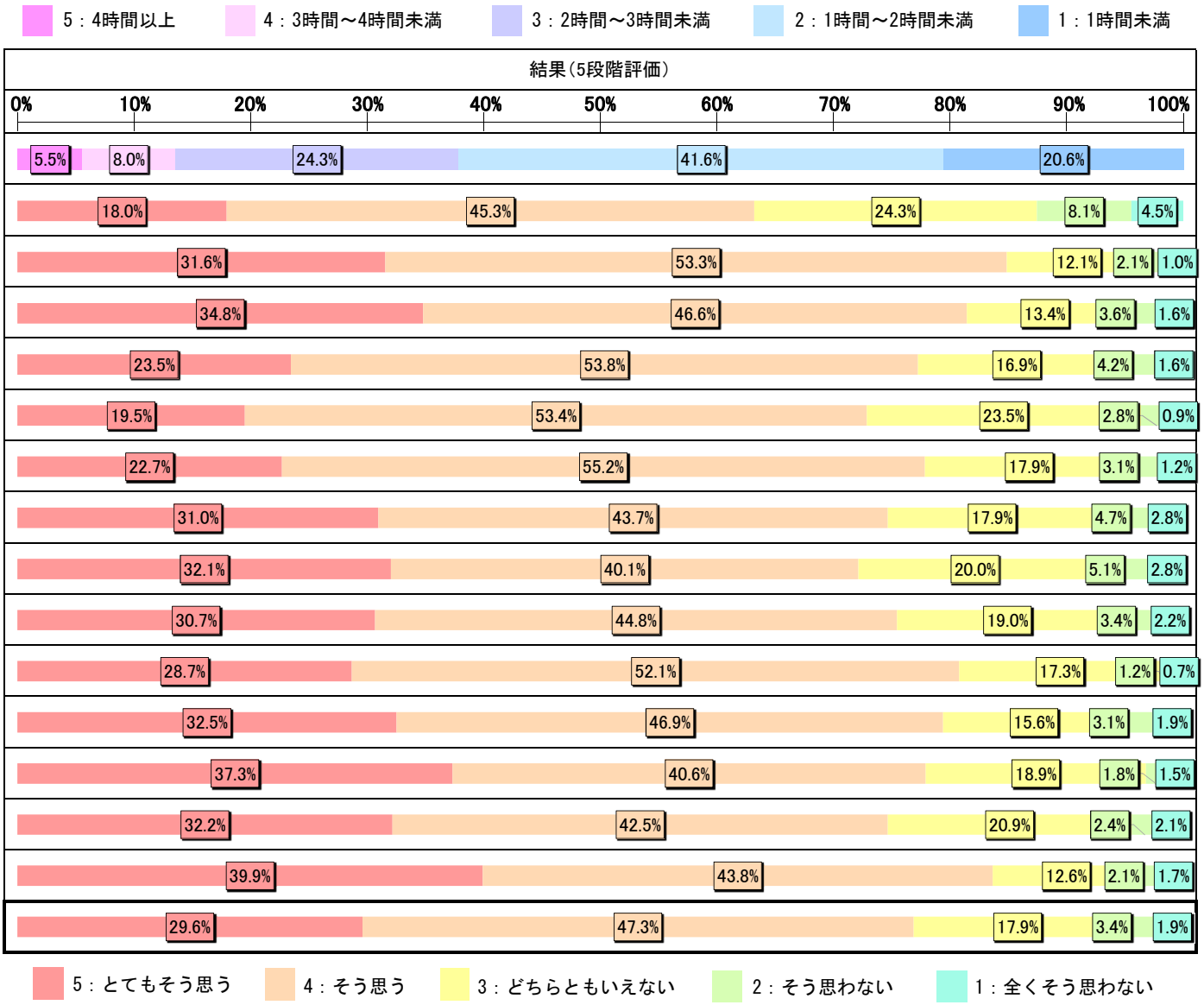
US科目　人文科学科目群　　履修者数： 2,556 名　　回答者数： 1,666 名　　回答率： 65.2 %

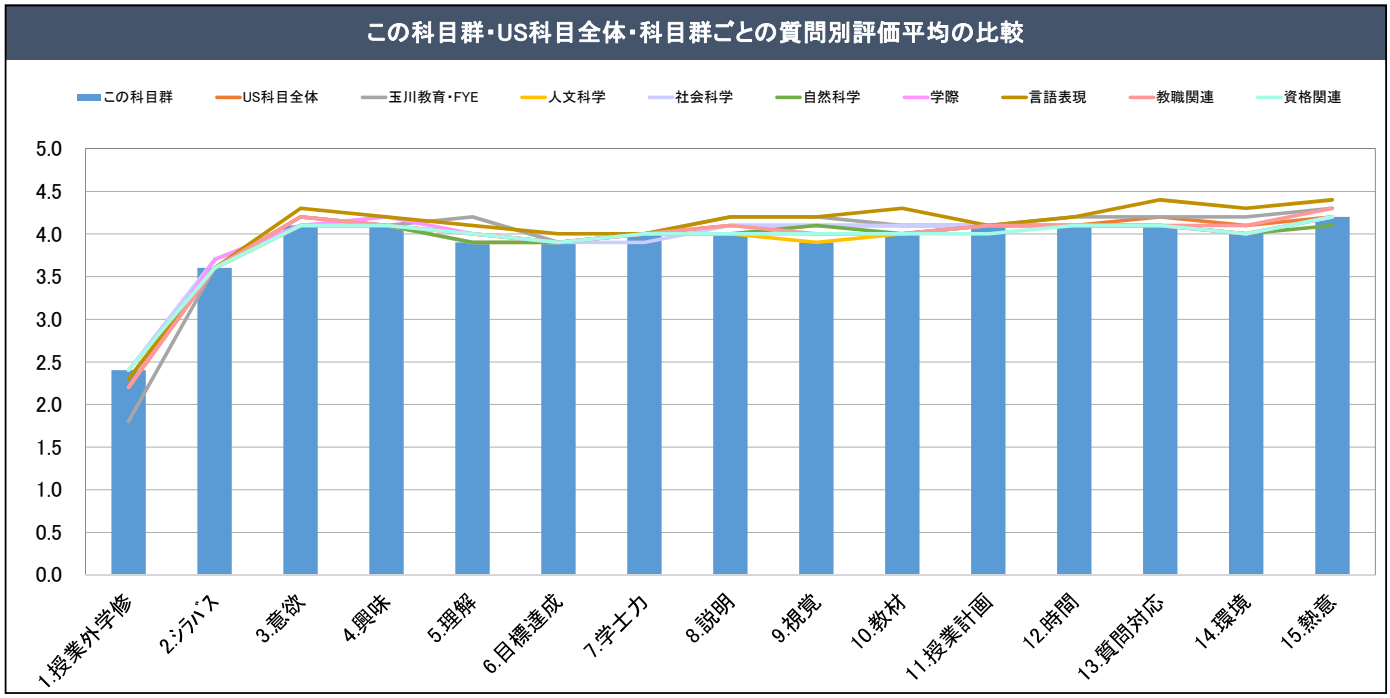
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.9	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
5.5% 8.0% 24.3% 41.6% 20.6%
18.0% 45.3% 24.3% 8.1% 4.5%
31.6% 53.3% 12.1% 2.1% 1.0%
34.8% 46.6% 13.4% 3.6% 1.6%
23.5% 53.8% 16.9% 4.2% 1.6%
19.5% 53.4% 23.5% 2.8% 0.9%
22.7% 55.2% 17.9% 3.1% 1.2%
31.0% 43.7% 17.9% 4.7% 2.8%
32.1% 40.1% 20.0% 5.1% 2.8%
30.7% 44.8% 19.0% 3.4% 2.2%
28.7% 52.1% 17.3% 1.2% 0.7%
32.5% 46.9% 15.6% 3.1% 1.9%
37.3% 40.6% 18.9% 1.8% 1.5%
32.2% 42.5% 20.9% 2.4% 2.1%
39.9% 43.8% 12.6% 2.1% 1.7%
29.6% 47.3% 17.9% 3.4% 1.9%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

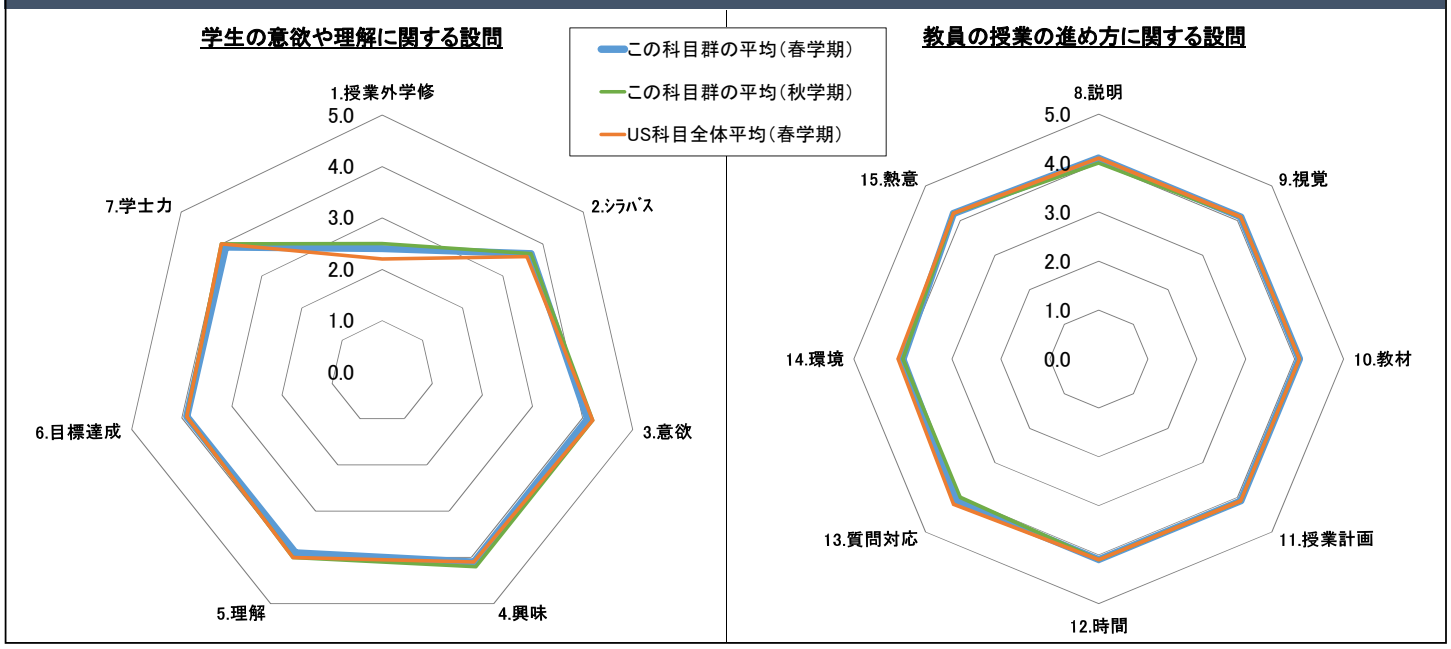
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

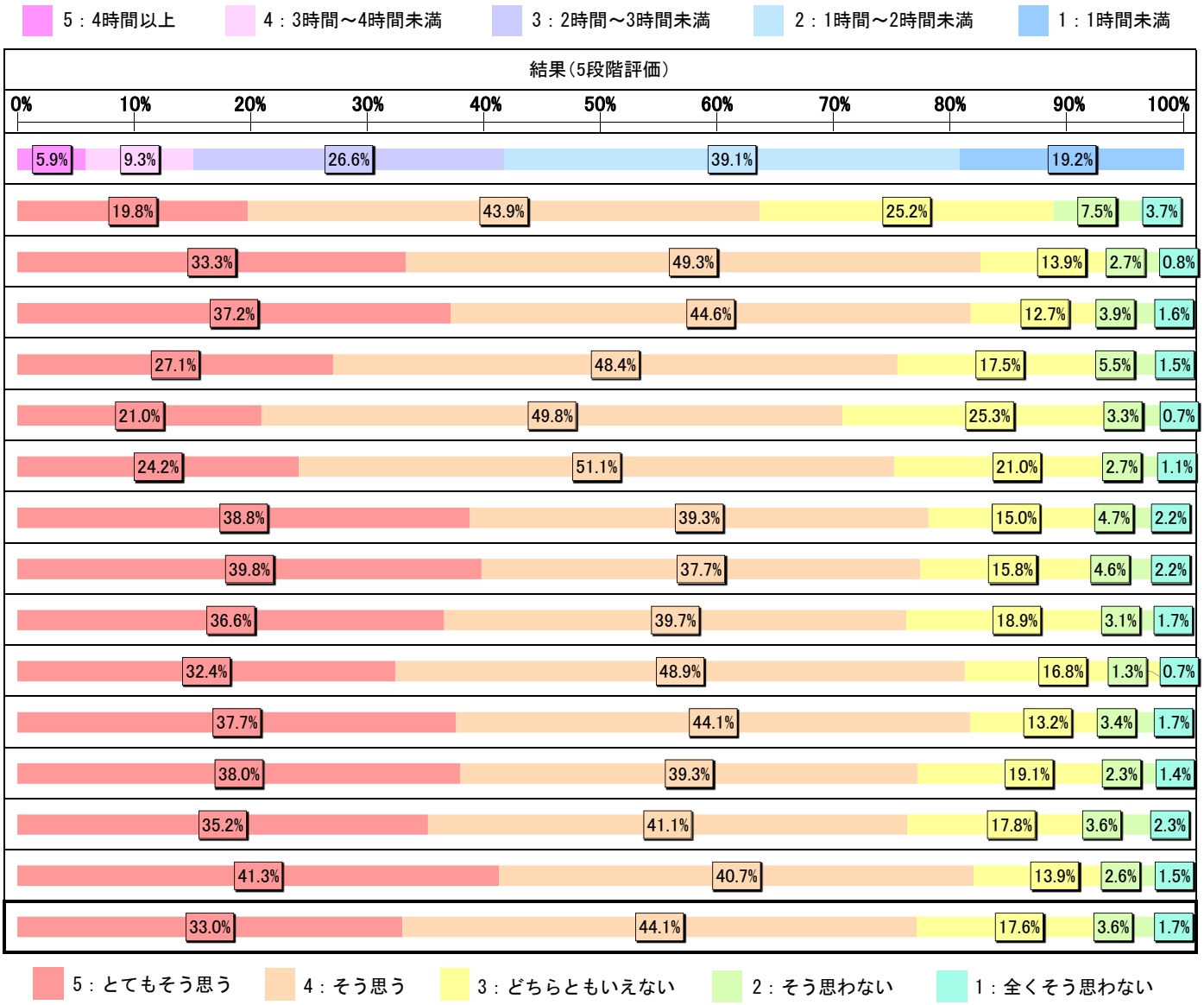
US科目　社会科学科目群　　履修者数： 2,203 名　　回答者数： 1,437 名　　回答率： 65.2 %

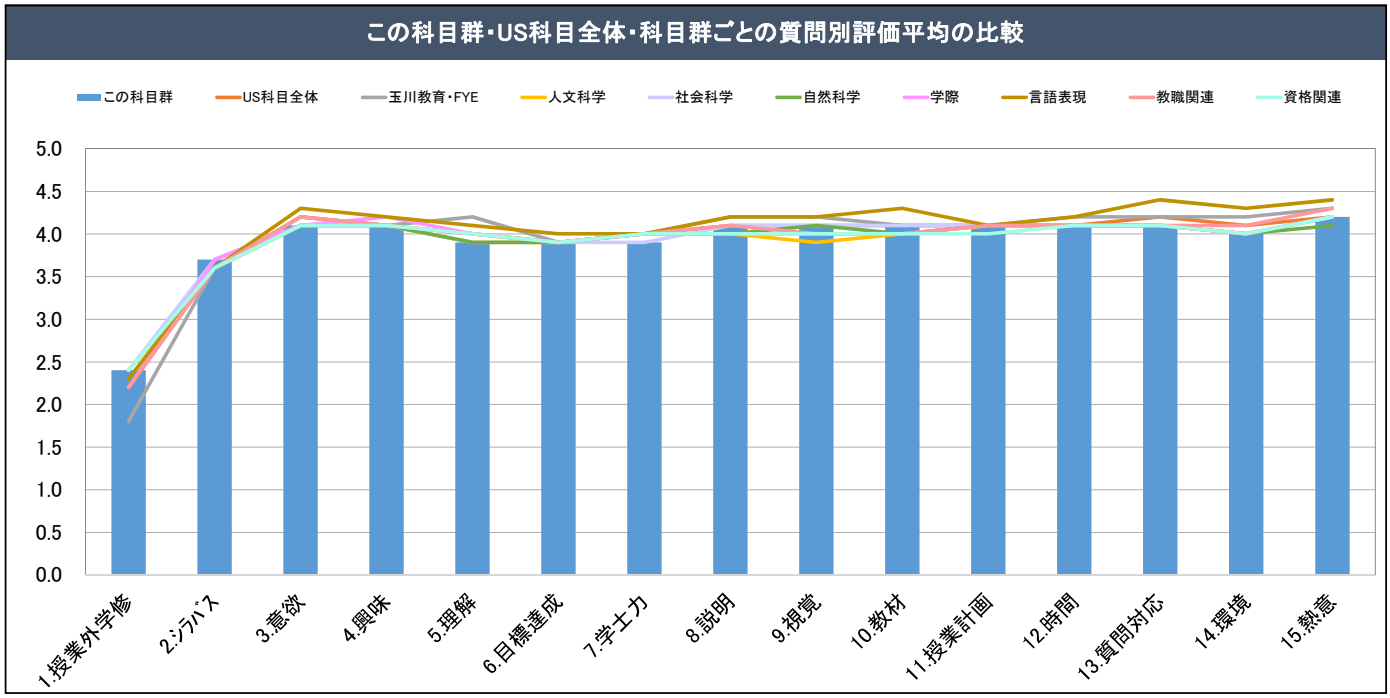
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
5.9% 9.3% 26.6% 39.1% 19.2%
19.8% 43.9% 25.2% 7.5% 3.7%
33.3% 49.3% 13.9% 2.7% 0.8%
37.2% 44.6% 12.7% 3.9% 1.6%
27.1% 48.4% 17.5% 5.5% 1.5%
21.0% 49.8% 25.3% 3.3% 0.7%
24.2% 51.1% 21.0% 2.7% 1.1%
38.8% 39.3% 15.0% 4.7% 2.2%
39.8% 37.7% 15.8% 4.6% 2.2%
36.6% 39.7% 18.9% 3.1% 1.7%
32.4% 48.9% 16.8% 1.3% 0.7%
37.7% 44.1% 13.2% 3.4% 1.7%
38.0% 39.3% 19.1% 2.3% 1.4%
35.2% 41.1% 17.8% 3.6% 2.3%
41.3% 40.7% 13.9% 2.6% 1.5%
33.0% 44.1% 17.6% 3.6% 1.7%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

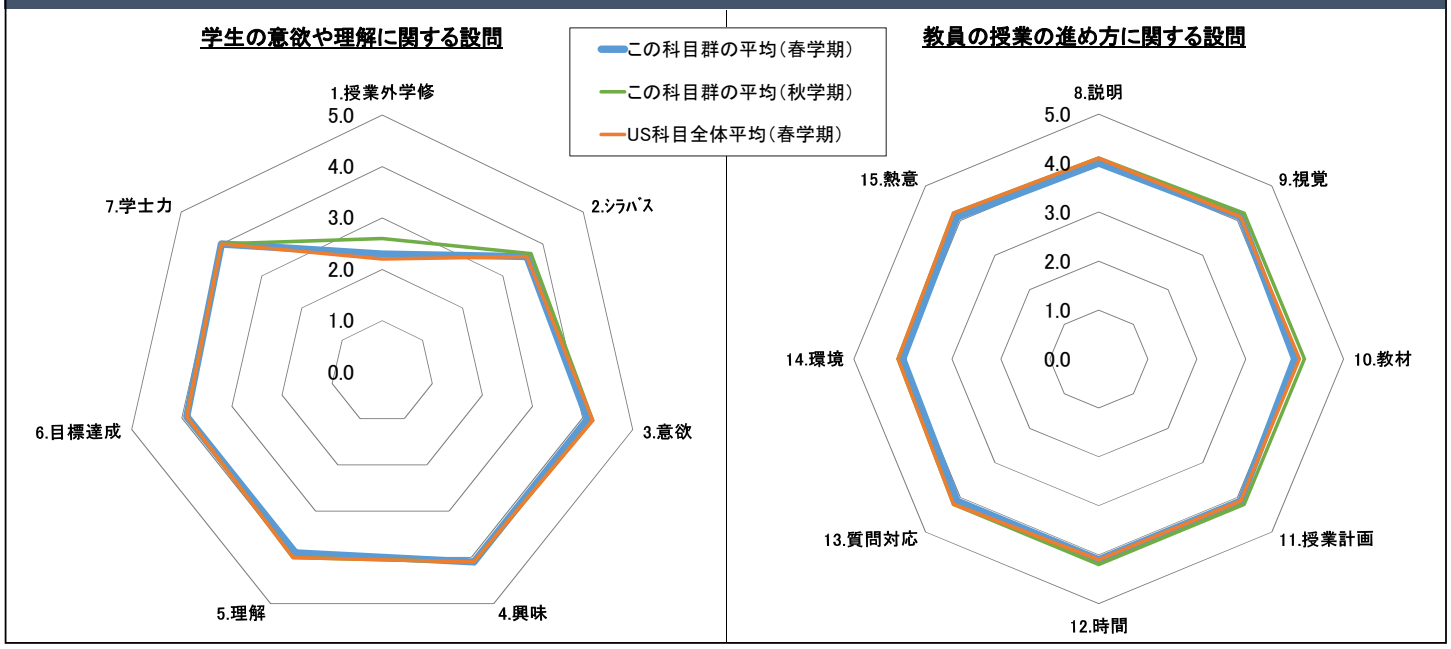
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

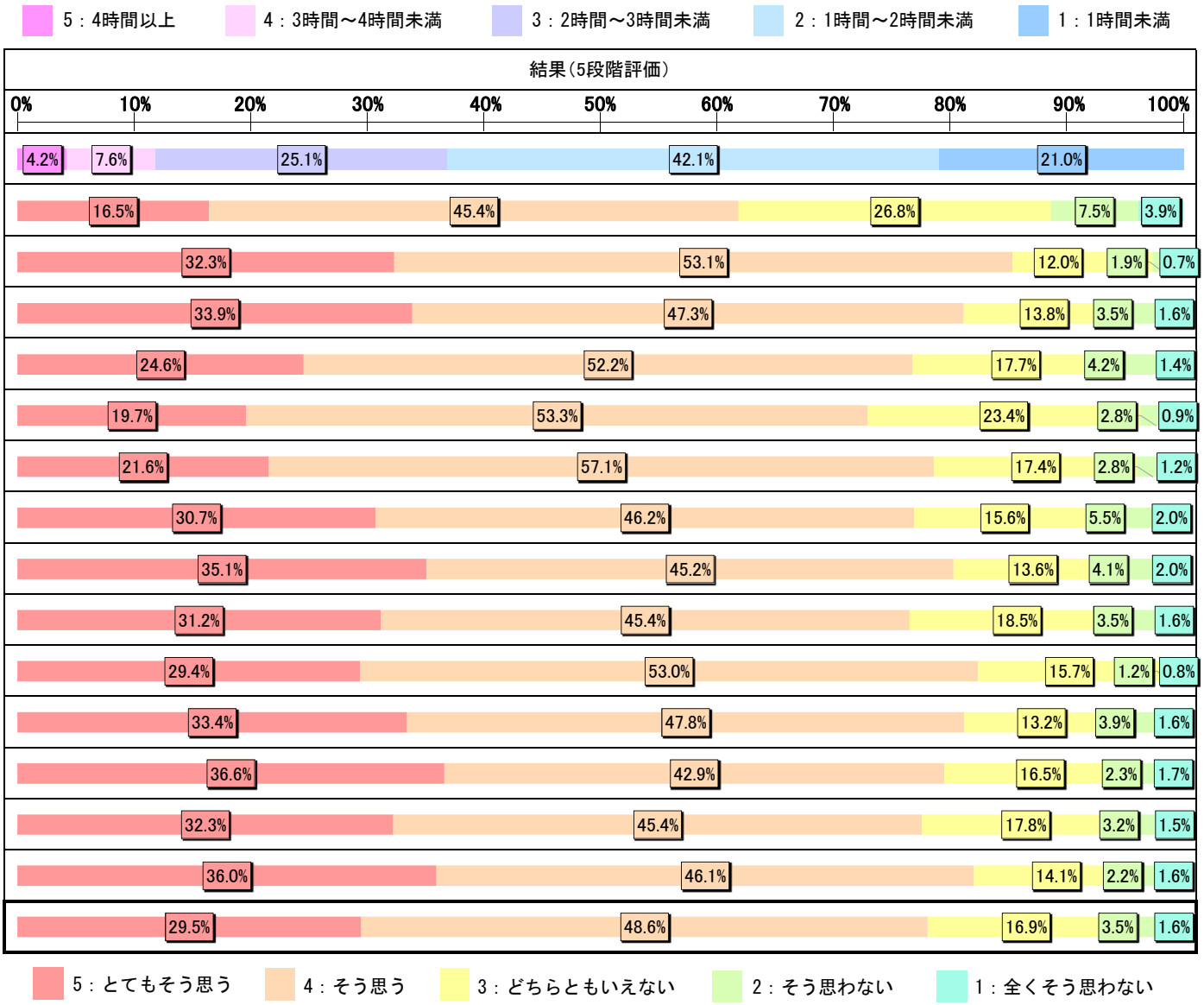
US科目　自然科学科目群　　履修者数： 3,457 名　　回答者数： 2,509 名　　回答率： 72.6 %

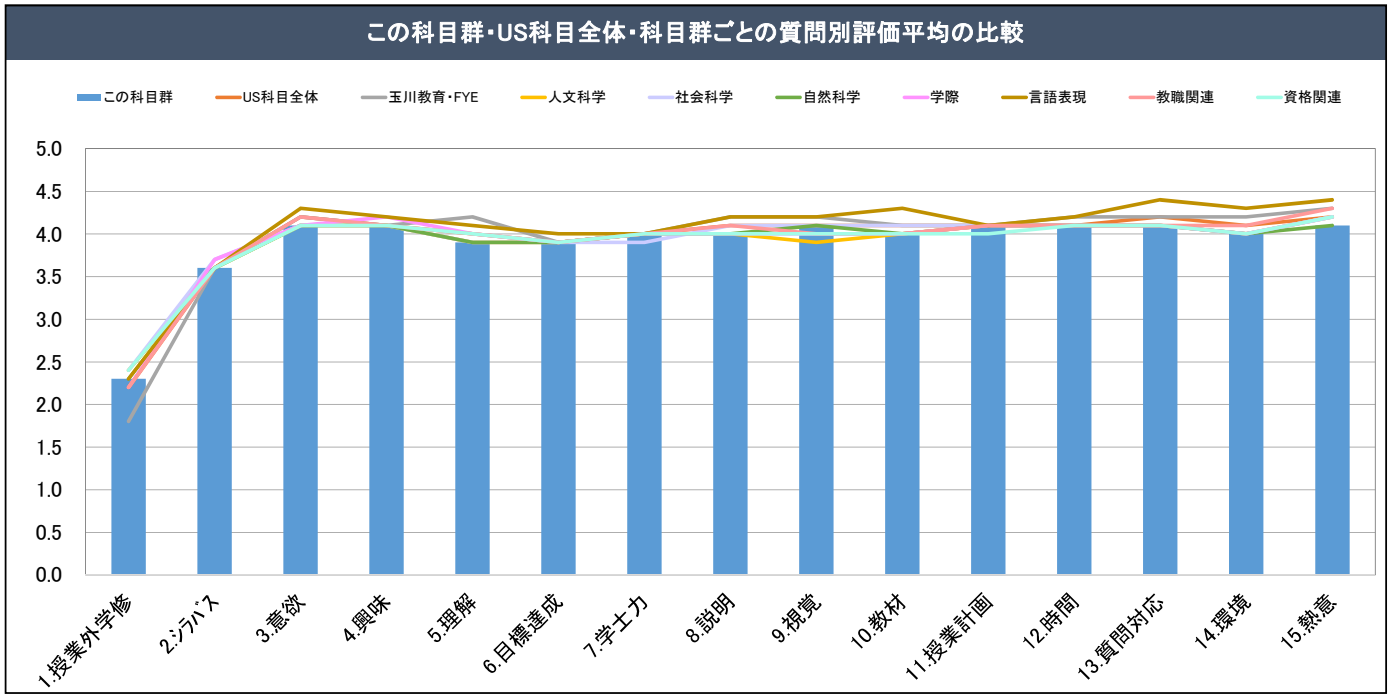
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
4.2% 7.6% 25.1% 42.1% 21.0%
16.5% 45.4% 26.8% 7.5% 3.9%
32.3% 53.1% 12.0% 1.9% 0.7%
33.9% 47.3% 13.8% 3.5% 1.6%
24.6% 52.2% 17.7% 4.2% 1.4%
19.7% 53.3% 23.4% 2.8% 0.9%
21.6% 57.1% 17.4% 2.8% 1.2%
30.7% 46.2% 15.6% 5.5% 2.0%
35.1% 45.2% 13.6% 4.1% 2.0%
31.2% 45.4% 18.5% 3.5% 1.6%
29.4% 53.0% 15.7% 1.2% 0.8%
33.4% 47.8% 13.2% 3.9% 1.6%
36.6% 42.9% 16.5% 2.3% 1.7%
32.3% 45.4% 17.8% 3.2% 1.5%
36.0% 46.1% 14.1% 2.2% 1.6%
29.5% 48.6% 16.9% 3.5% 1.6%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

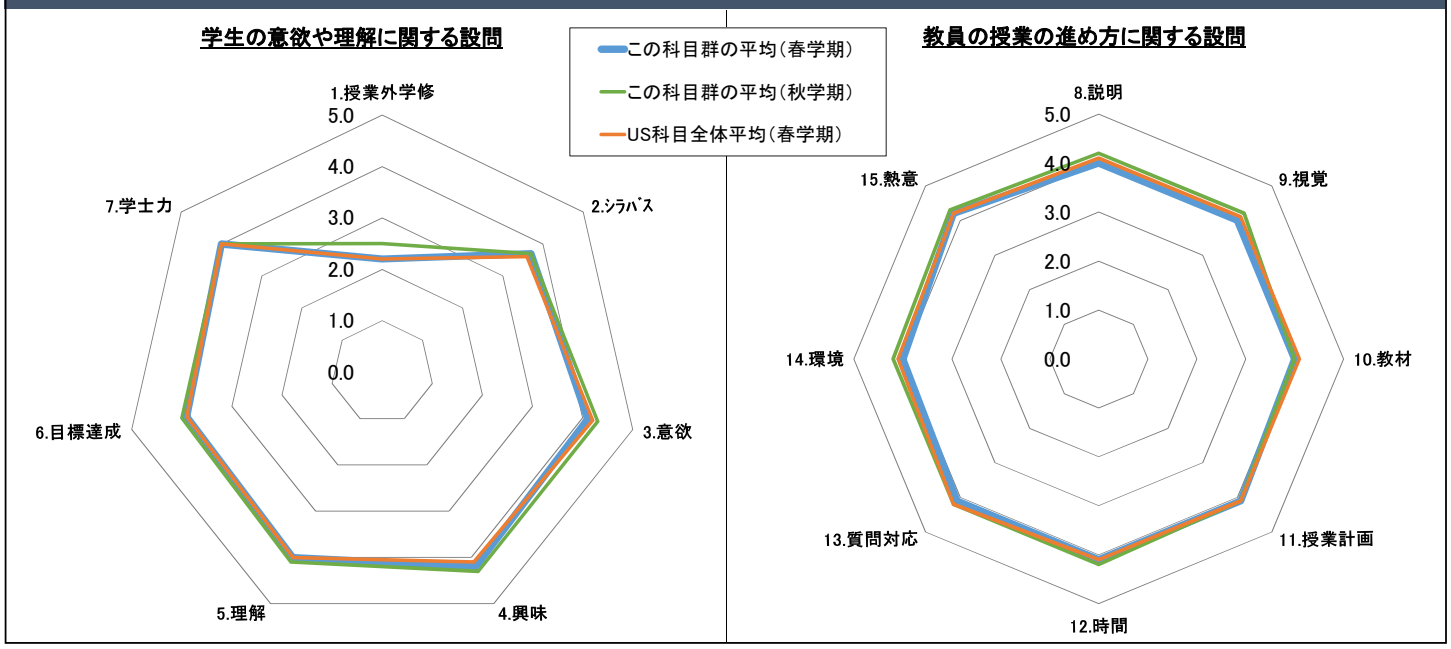
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

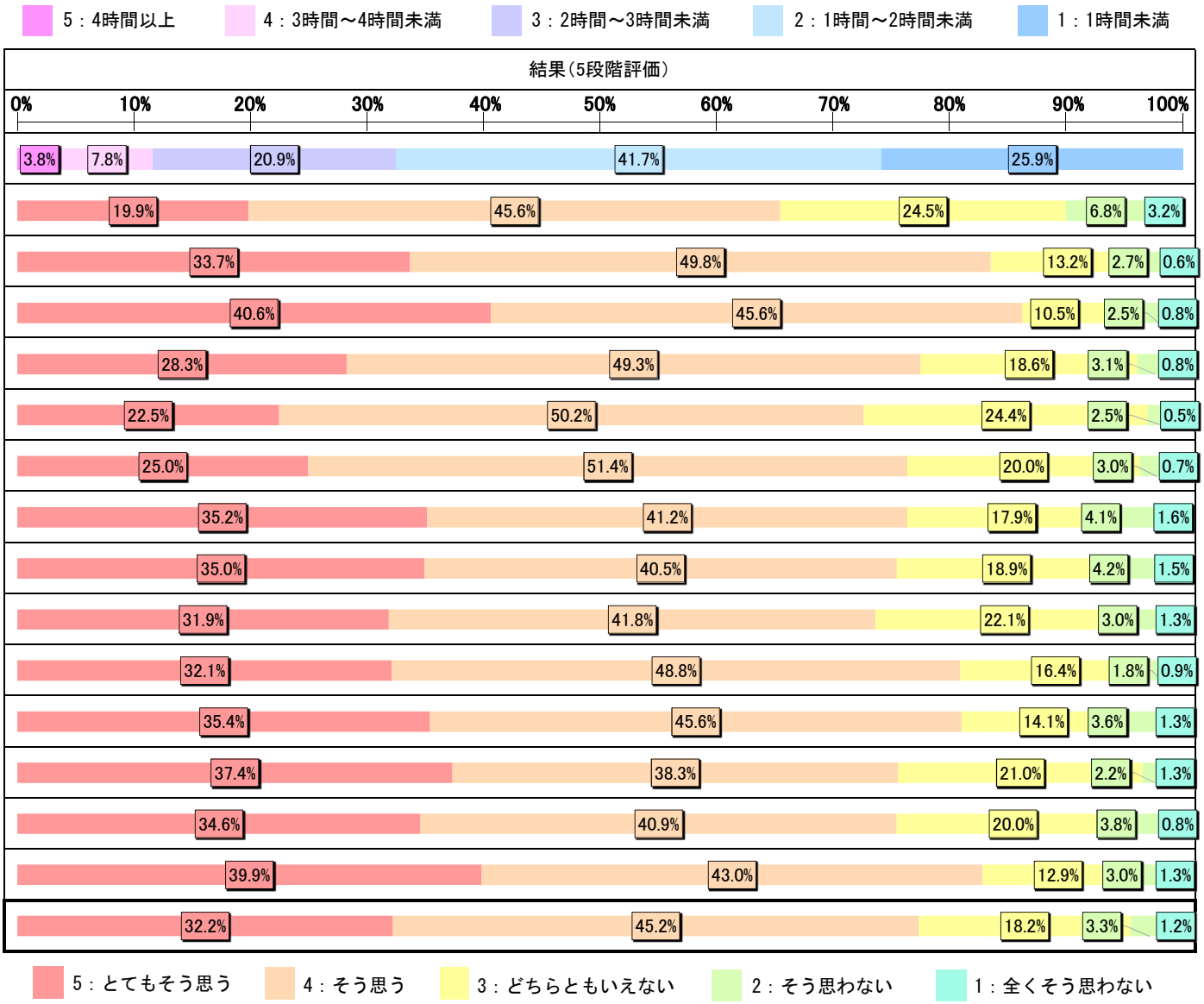
US科目　学際科目群　　履修者数：1,464 名　　回答者数：881 名　　回答率：60.2 %

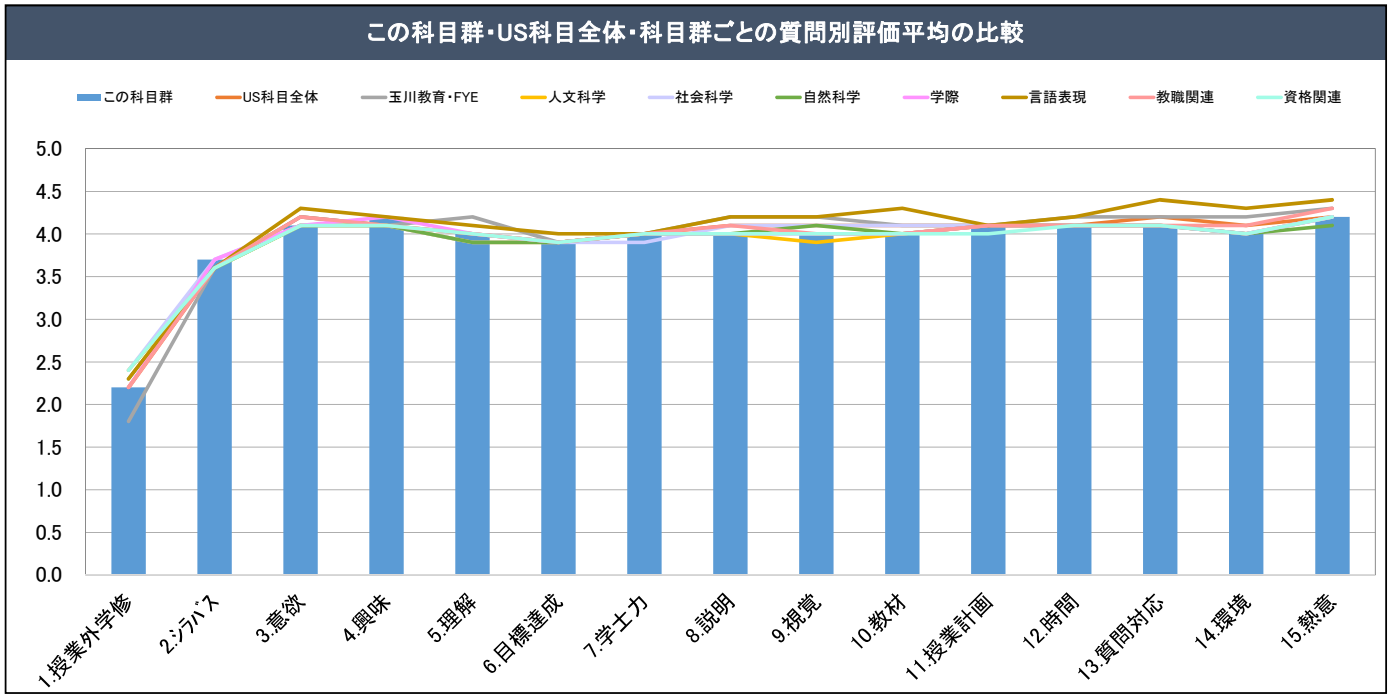
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.8% 7.8% 20.9% 41.7% 25.9%
19.9% 45.6% 24.5% 6.8% 3.2%
33.7% 49.8% 13.2% 2.7% 0.6%
40.6% 45.6% 10.5% 2.5% 0.8%
28.3% 49.3% 18.6% 3.1% 0.8%
22.5% 50.2% 24.4% 2.5% 0.5%
25.0% 51.4% 20.0% 3.0% 0.7%
35.2% 41.2% 17.9% 4.1% 1.6%
35.0% 40.5% 18.9% 4.2% 1.5%
31.9% 41.8% 22.1% 3.0% 1.3%
32.1% 48.8% 16.4% 1.8% 0.9%
35.4% 45.6% 14.1% 3.6% 1.3%
37.4% 38.3% 21.0% 2.2% 1.3%
34.6% 40.9% 20.0% 3.8% 0.8%
39.9% 43.0% 12.9% 3.0% 1.3%
32.2% 45.2% 18.2% 3.3% 1.2%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

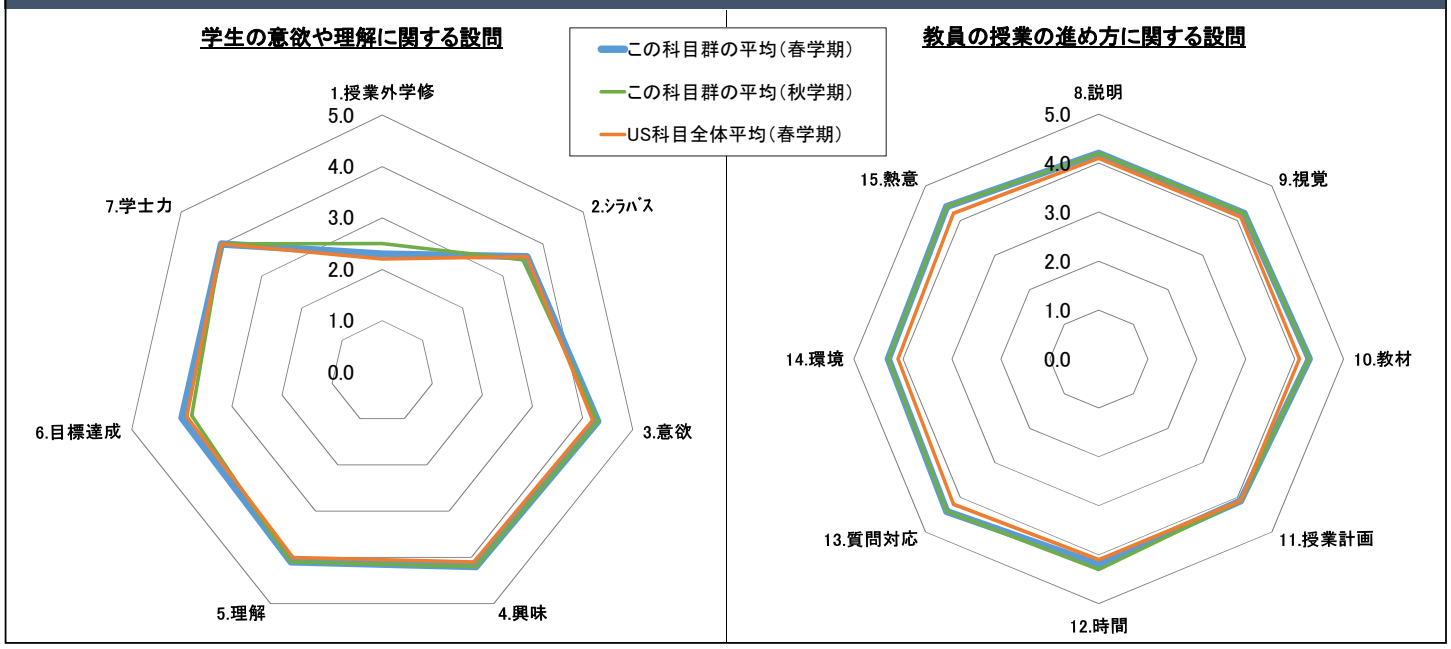
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

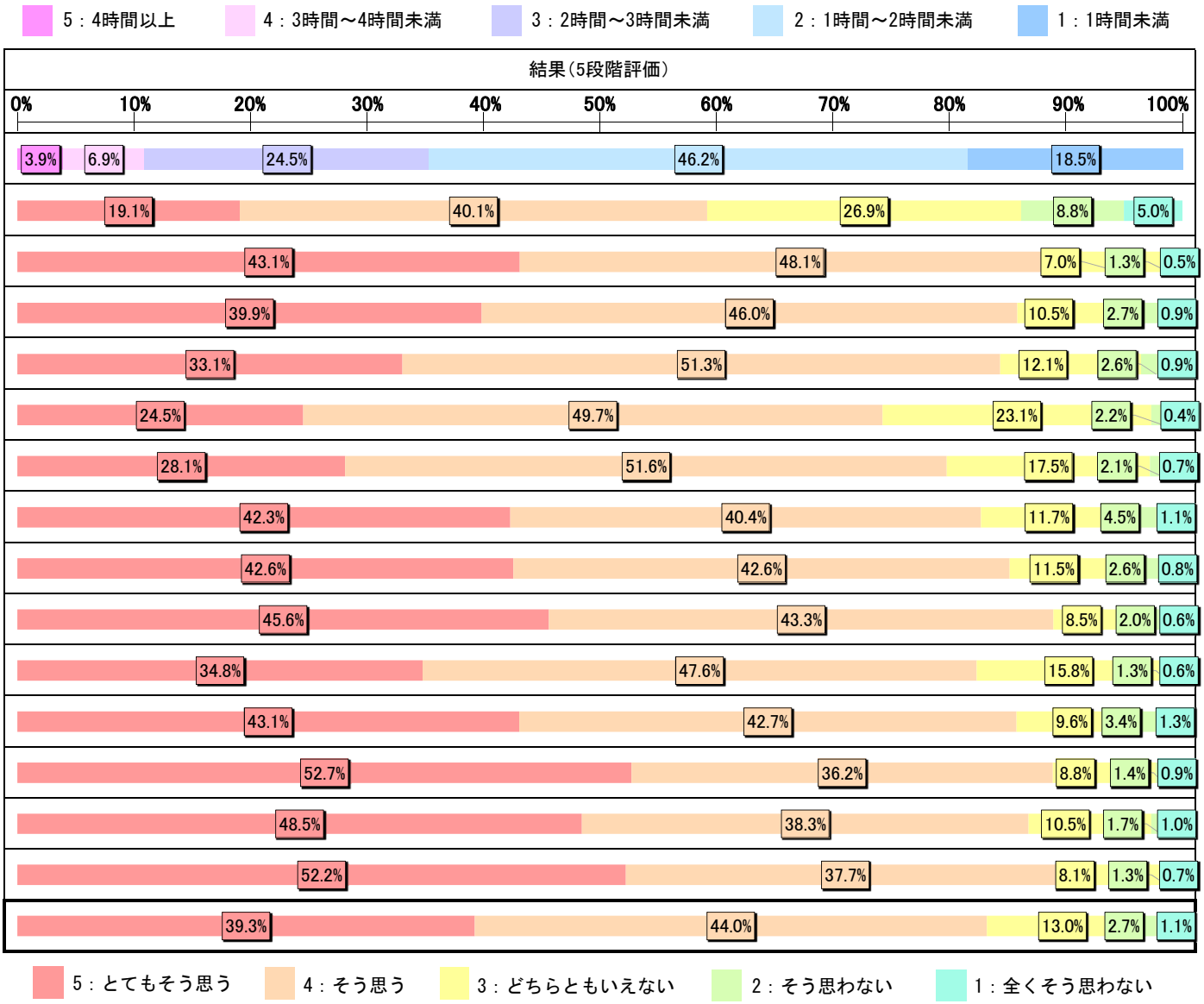
US科目　言語表現科目群　　履修者数： 2,482 名　　回答者数： 1,834 名　　回答率： 73.9 %

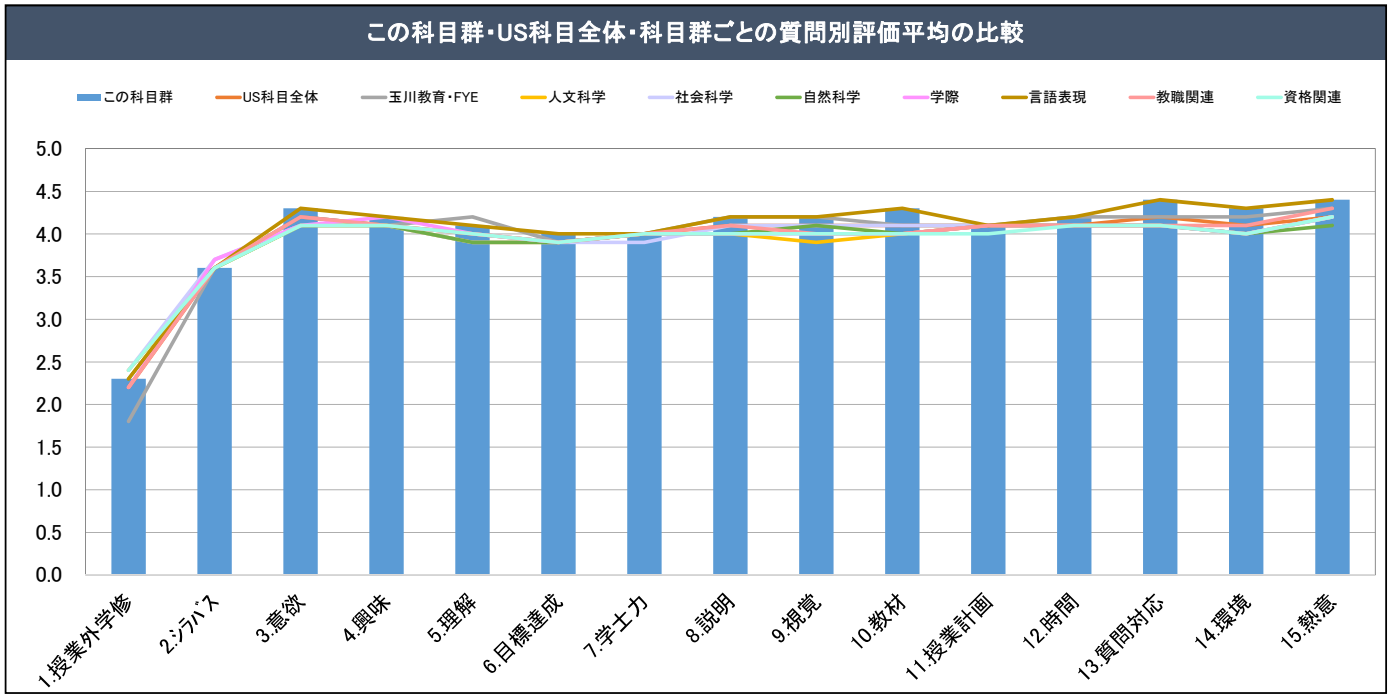
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.3	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.2
総合評価				4.0	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.9% 6.9% 24.5% 46.2% 18.5%
19.1% 40.1% 26.9% 8.8% 5.0%
43.1% 48.1% 7.0% 1.3% 0.5%
39.9% 46.0% 10.5% 2.7% 0.9%
33.1% 51.3% 12.1% 2.6% 0.9%
24.5% 49.7% 23.1% 2.2% 0.4%
28.1% 51.6% 17.5% 2.1% 0.7%
42.3% 40.4% 11.7% 4.5% 1.1%
42.6% 42.6% 11.5% 2.6% 0.8%
45.6% 43.3% 8.5% 2.0% 0.6%
34.8% 47.6% 15.8% 1.3% 0.6%
43.1% 42.7% 9.6% 3.4% 1.3%
52.7% 36.2% 8.8% 1.4% 0.9%
48.5% 38.3% 10.5% 1.7% 1.0%
52.2% 37.7% 8.1% 1.3% 0.7%
39.3% 44.0% 13.0% 2.7% 1.1%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

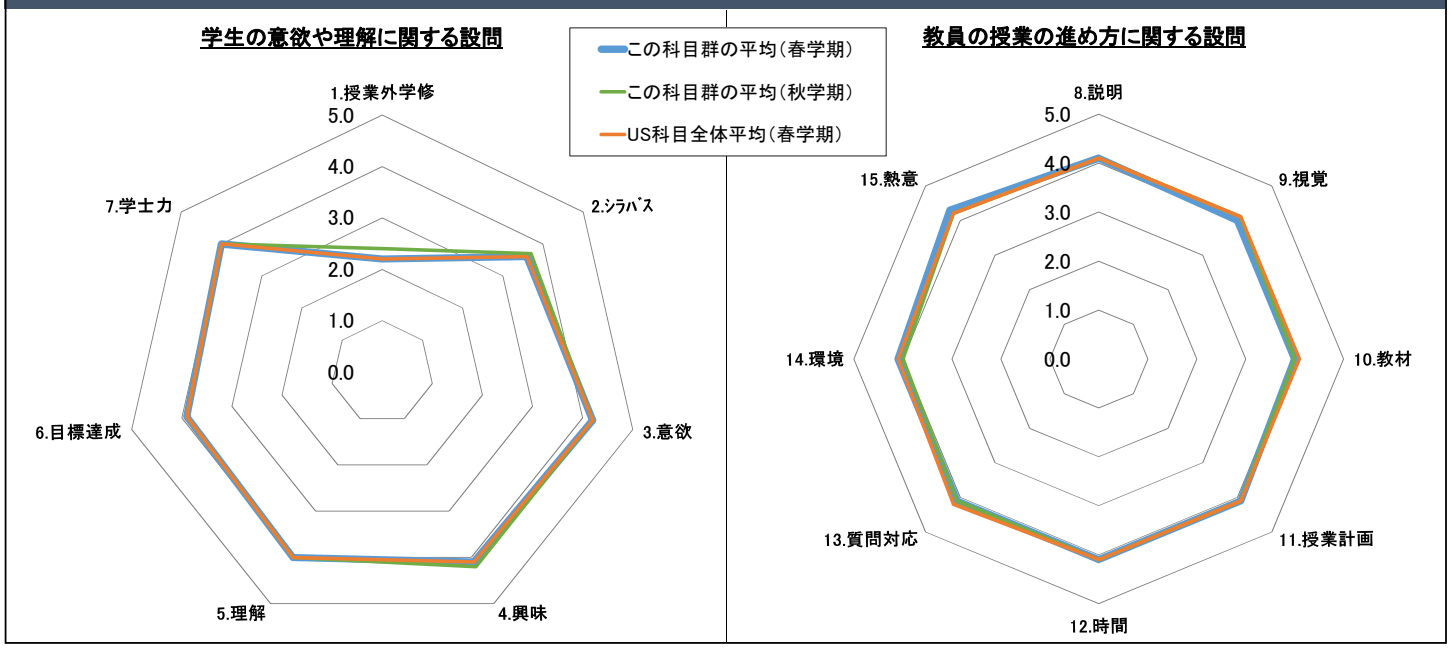
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

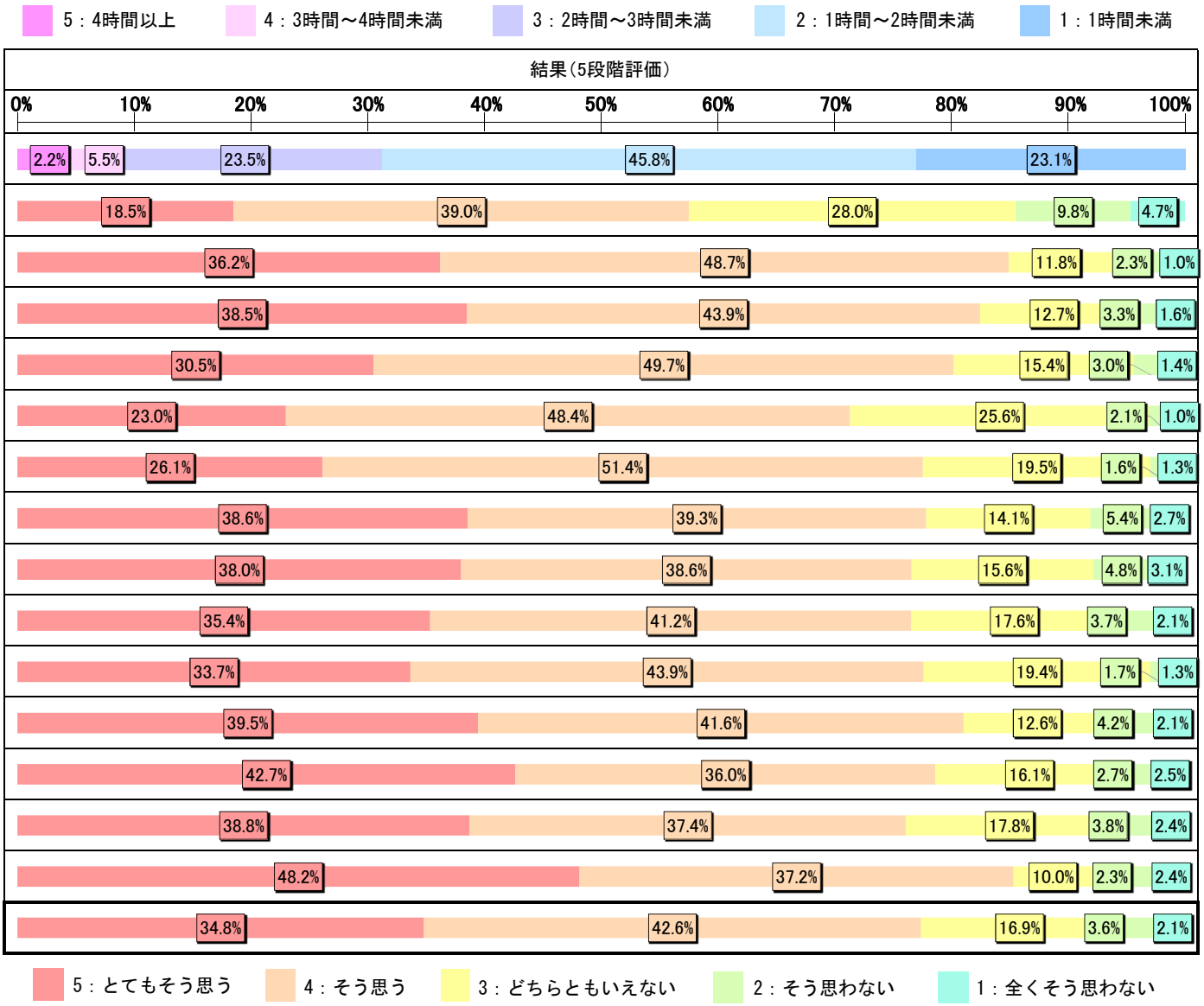
US科目　教職関連科目群　　履修者数： 2,180 名　　回答者数： 1,657 名　　回答率： 76.0 %

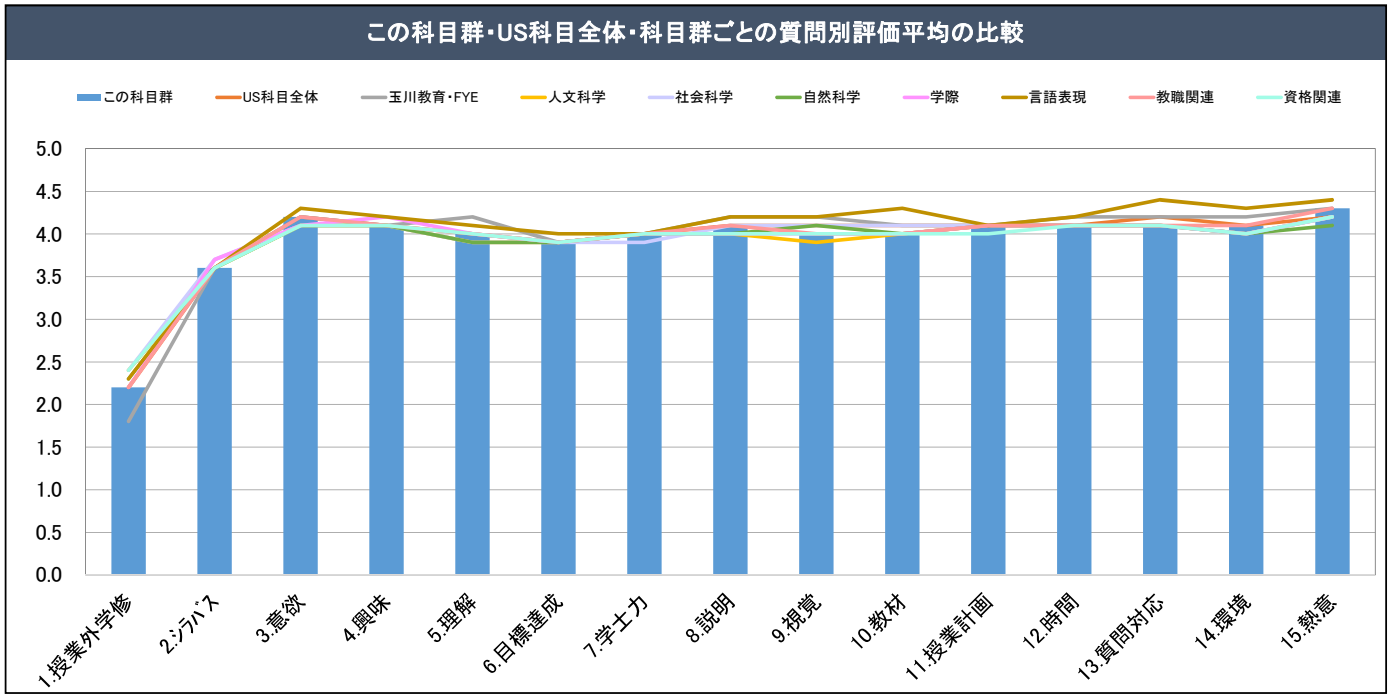
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
2.2% 5.5% 23.5% 45.8% 23.1%
18.5% 39.0% 28.0% 9.8% 4.7%
36.2% 48.7% 11.8% 2.3% 1.0%
38.5% 43.9% 12.7% 3.3% 1.6%
30.5% 49.7% 15.4% 3.0% 1.4%
23.0% 48.4% 25.6% 2.1% 1.0%
26.1% 51.4% 19.5% 1.6% 1.3%
38.6% 39.3% 14.1% 5.4% 2.7%
38.0% 38.6% 15.6% 4.8% 3.1%
35.4% 41.2% 17.6% 3.7% 2.1%
33.7% 43.9% 19.4% 1.7% 1.3%
39.5% 41.6% 12.6% 4.2% 2.1%
42.7% 36.0% 16.1% 2.7% 2.5%
38.8% 37.4% 17.8% 3.8% 2.4%
48.2% 37.2% 10.0% 2.3% 2.4%
34.8% 42.6% 16.9% 3.6% 2.1%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

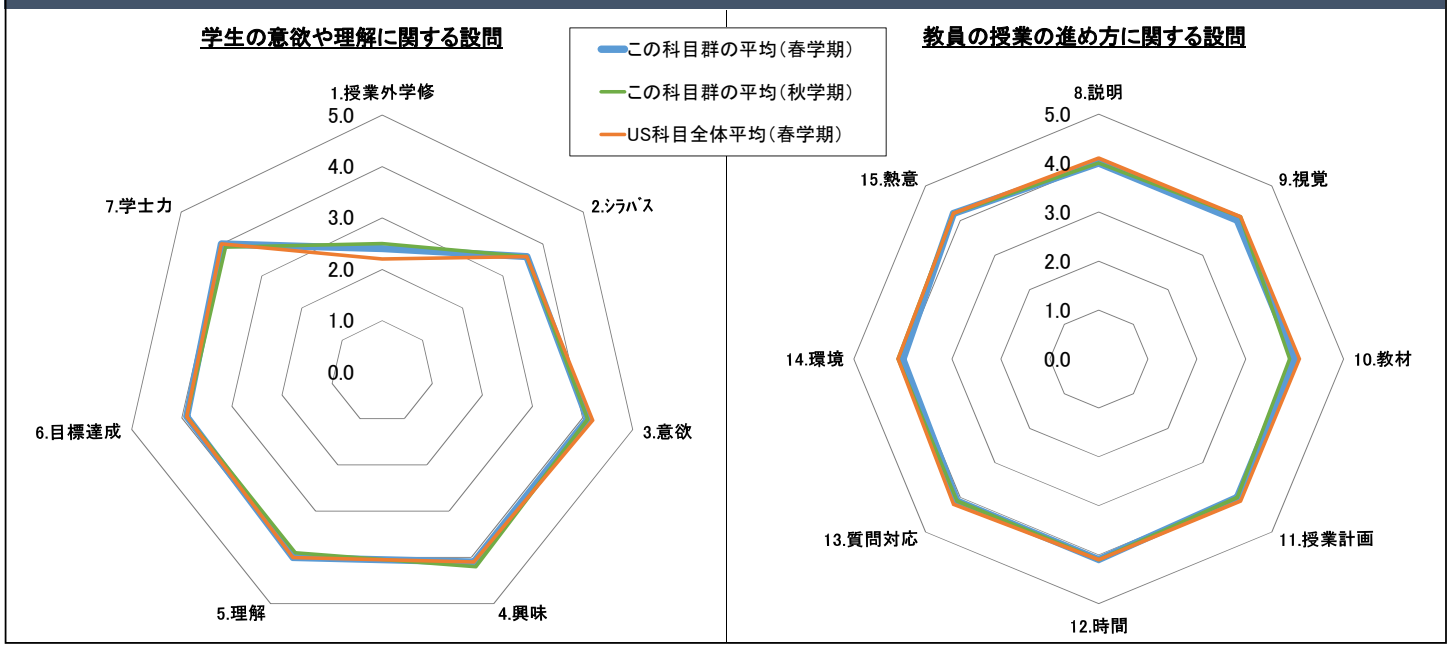
令和3年度　春学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

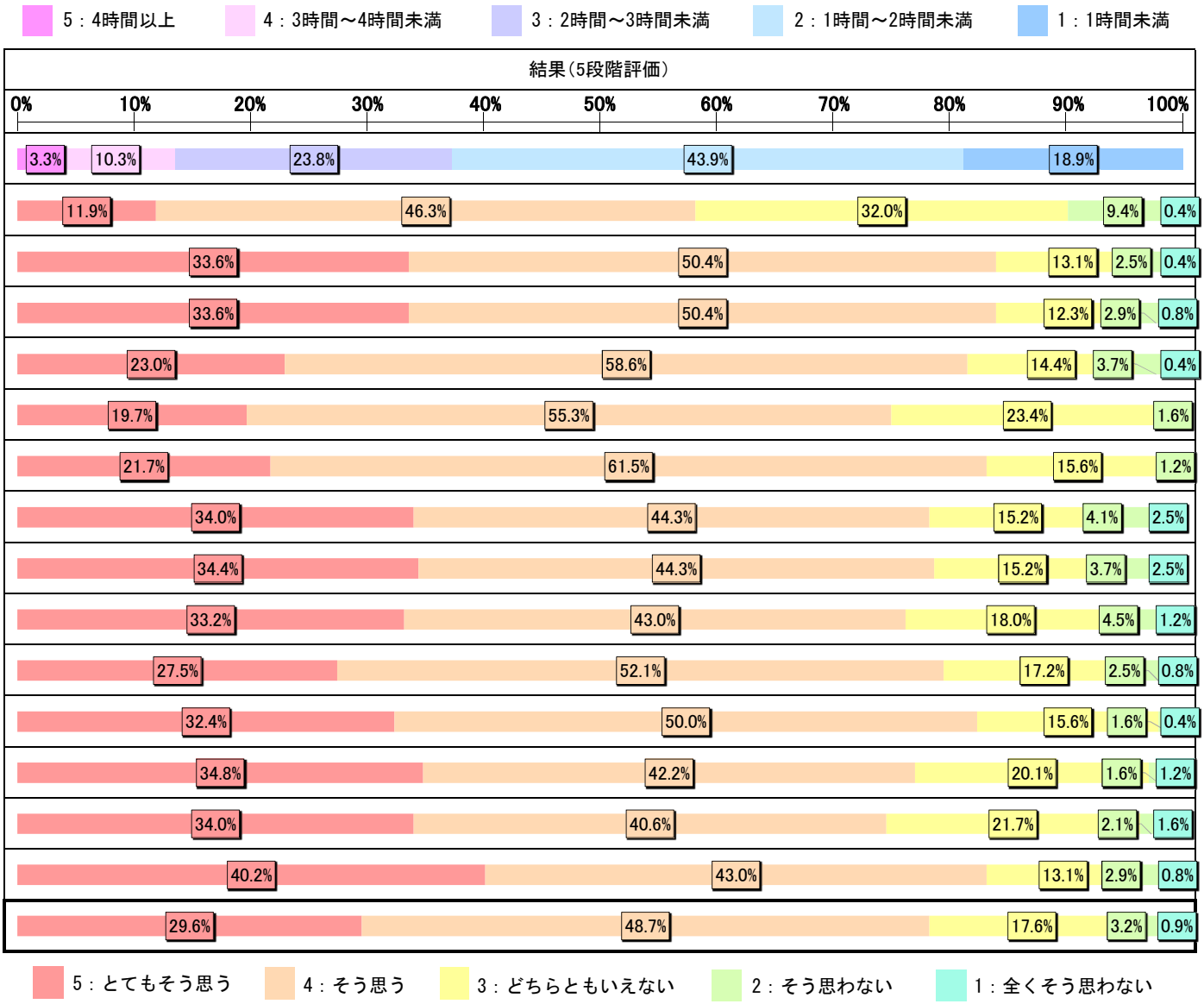
US科目　資格関連科目群　　履修者数：　387 名　　回答者数：　244 名　　回答率：　63.0 %

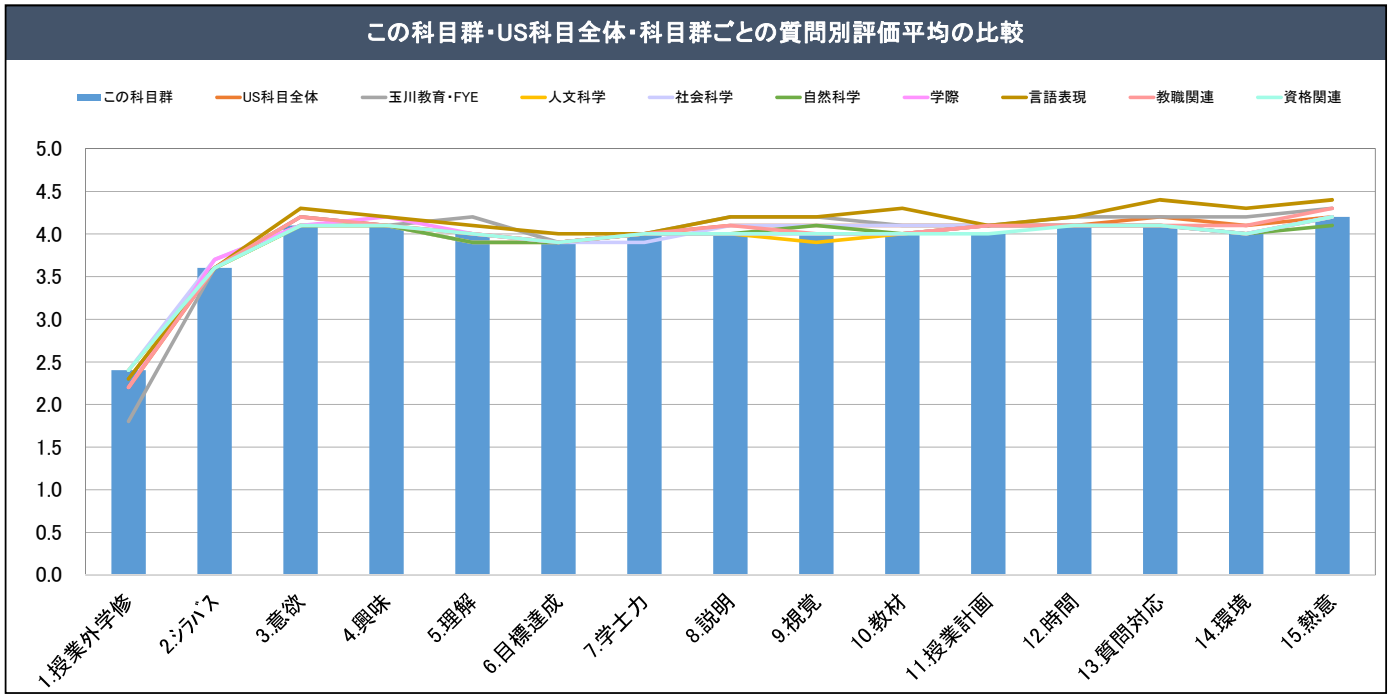
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.0
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.0	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.1
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.2
総合評価				3.9	3.9

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.3%
10.3%
23.8%
43.9%
18.9%
11.9%
46.3%
32.0%
9.4%
0.4%
33.6%
50.4%
13.1%
2.5%
0.4%
33.6%
50.4%
12.3%
2.9%
0.8%
23.0%
58.6%
14.4%
3.7%
0.4%
19.7%
55.3%
23.4%
1.6%
21.7%
61.5%
15.6%
1.2%
34.0%
44.3%
15.2%
4.1%
2.5%
34.4%
44.3%
15.2%
3.7%
2.5%
33.2%
43.0%
18.0%
4.5%
1.2%
27.5%
52.1%
17.2%
2.5%
0.8%
32.4%
50.0%
15.6%
1.6%
0.4%
34.8%
42.2%
20.1%
1.6%
1.2%
34.0%
40.6%
21.7%
2.1%
1.6%
40.2%
43.0%
13.1%
2.9%
0.8%
29.6%
48.7%
17.6%
3.2%
0.9%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

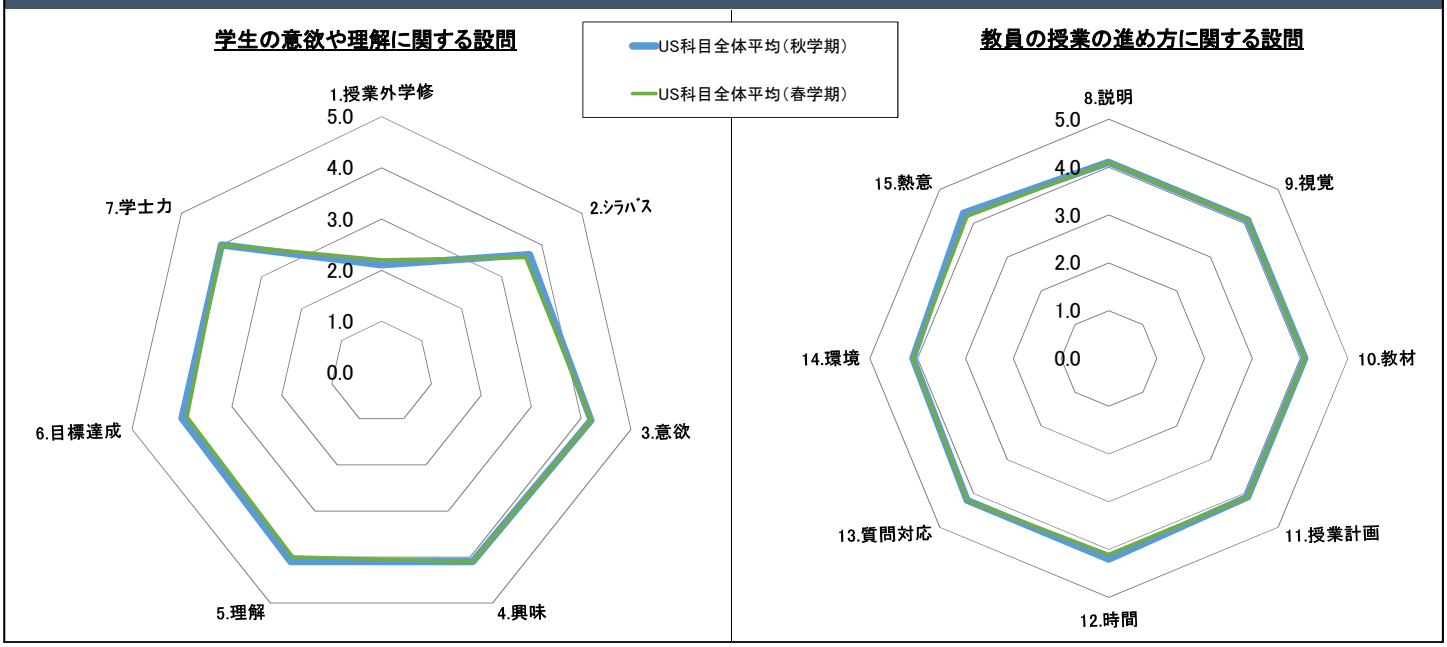
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

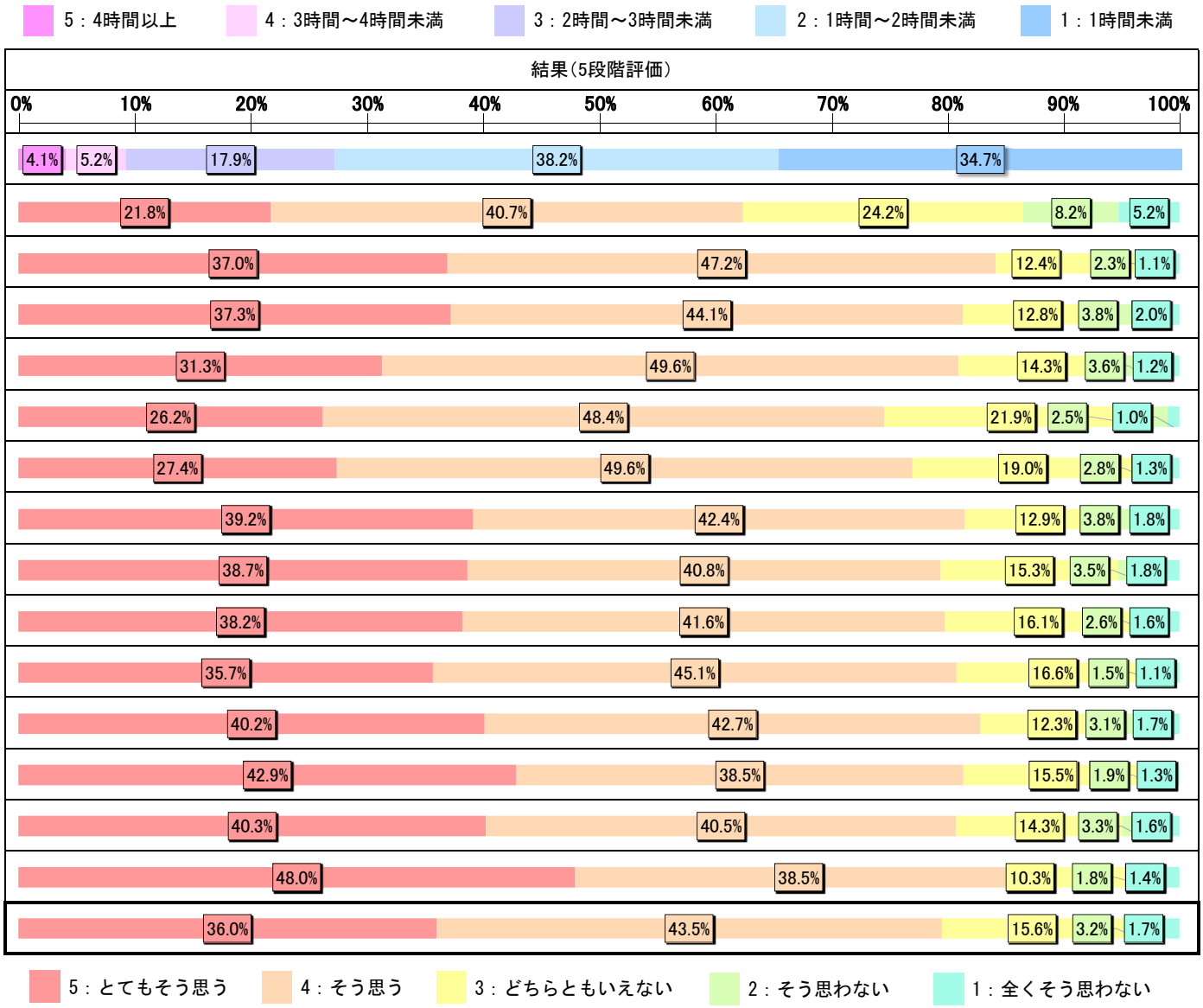
US科目全体　　履修者数： 17,382 名　　回答者数： 8,610 名　　回答率： 49.5 %

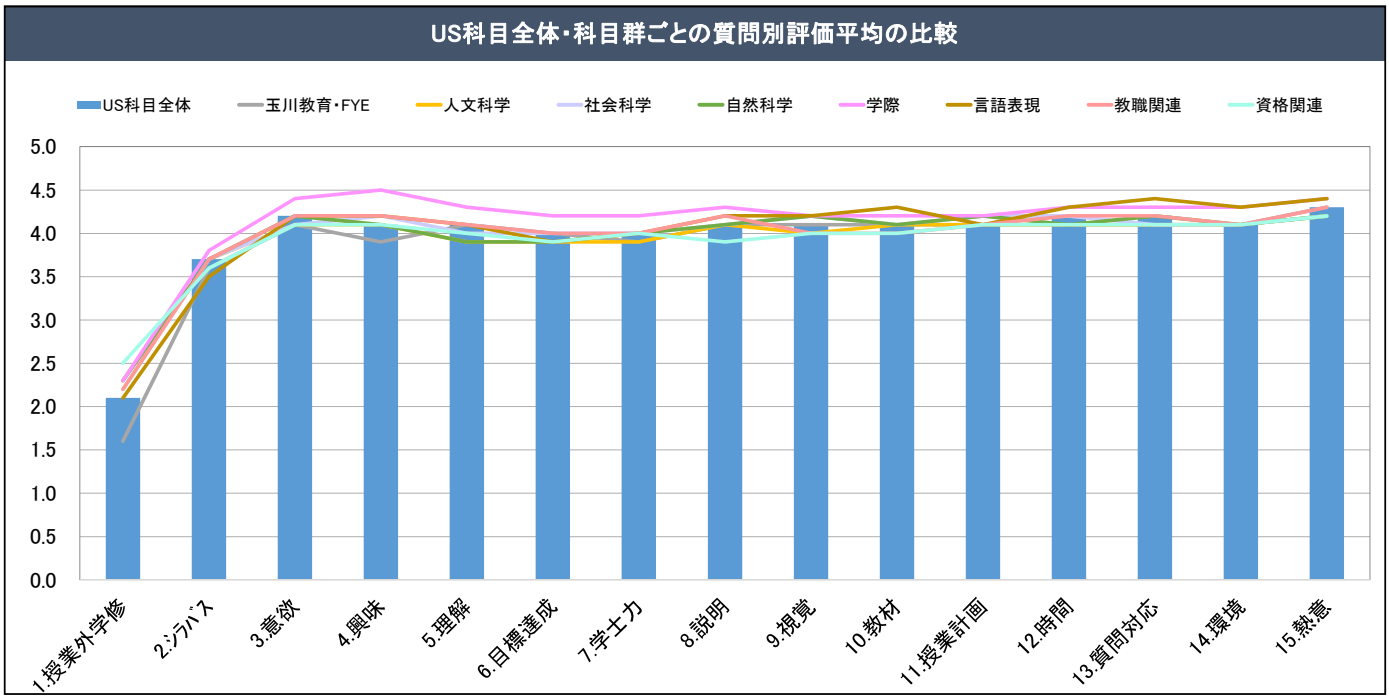
			設問	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価				4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
4.1%
5.2%
17.9%
38.2%
34.7%
21.8%
40.7%
24.2%
8.2%
5.2%
37.0%
47.2%
12.4%
2.3%
1.1%
37.3%
44.1%
12.8%
3.8%
2.0%
31.3%
49.6%
14.3%
3.6%
1.2%
26.2%
48.4%
21.9%
2.5%
1.0%
27.4%
49.6%
19.0%
2.8%
1.3%
39.2%
42.4%
12.9%
3.8%
1.8%
38.7%
40.8%
15.3%
3.5%
1.8%
38.2%
41.6%
16.1%
2.6%
1.6%
35.7%
45.1%
16.6%
1.5%
1.1%
40.2%
42.7%
12.3%
3.1%
1.7%
42.9%
38.5%
15.5%
1.9%
1.3%
40.3%
40.5%
14.3%
3.3%
1.6%
48.0%
38.5%
10.3%
1.8%
1.4%
36.0%
43.5%
15.6%
3.2%
1.7%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

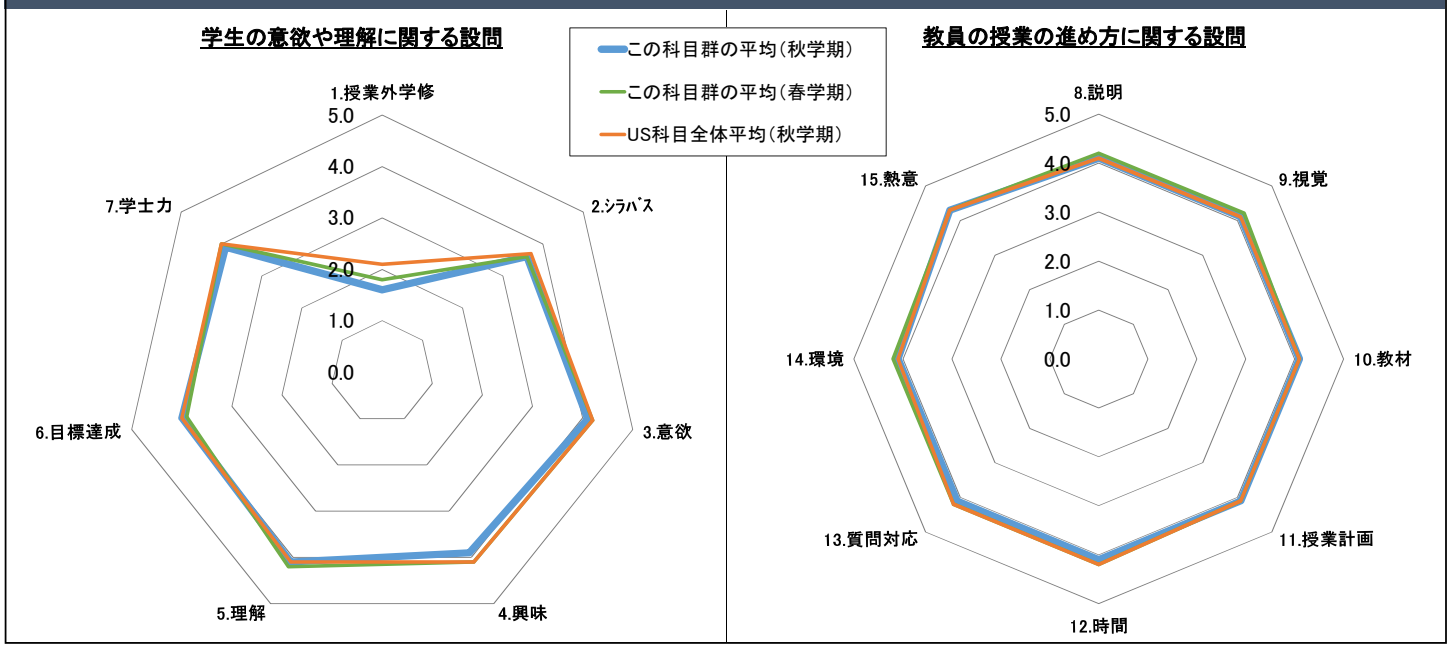
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

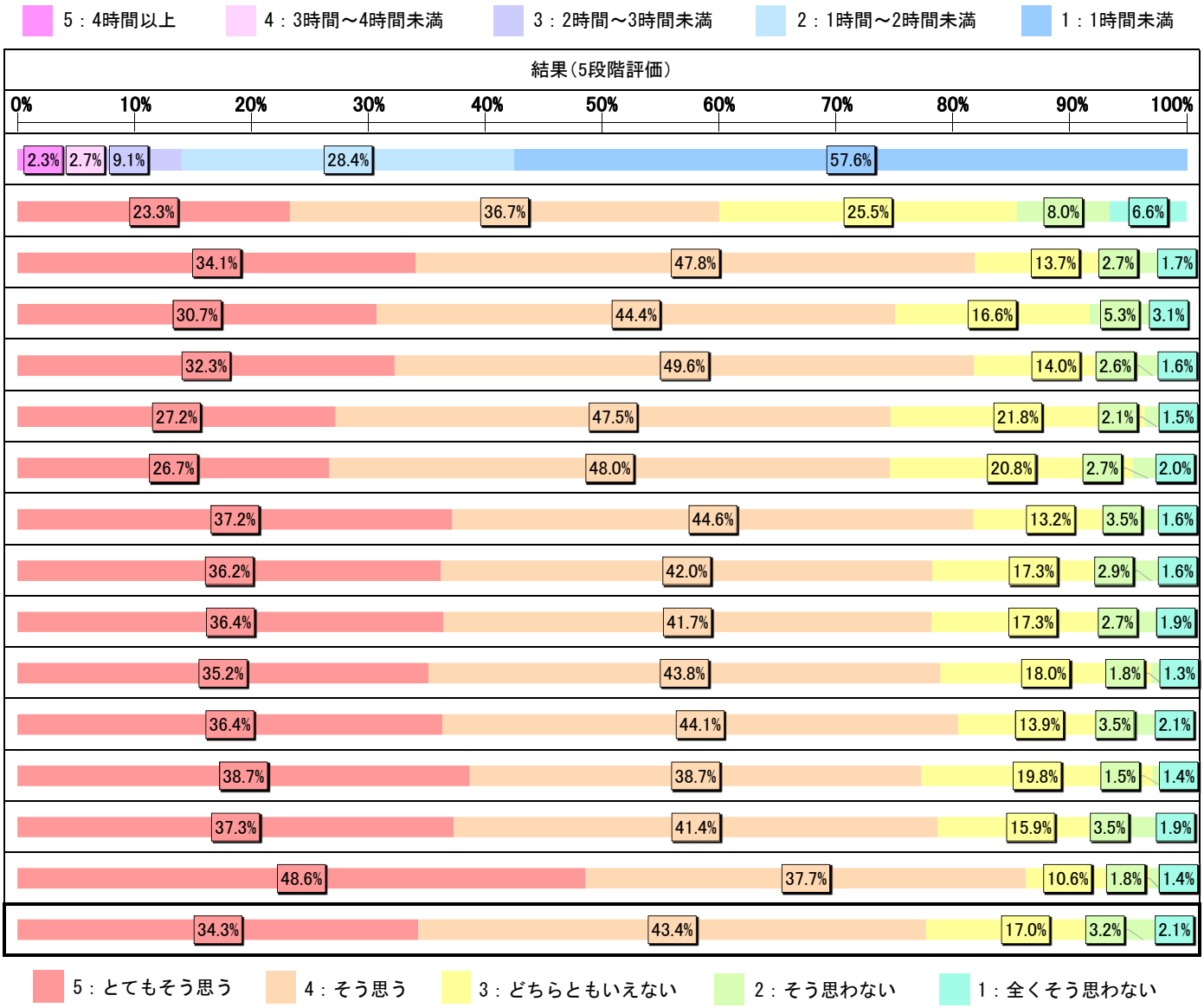
US科目　玉川教育・FYE科目群　　履修者数： 4,832 名　　回答者数： 2,492 名　　回答率： 51.6 %

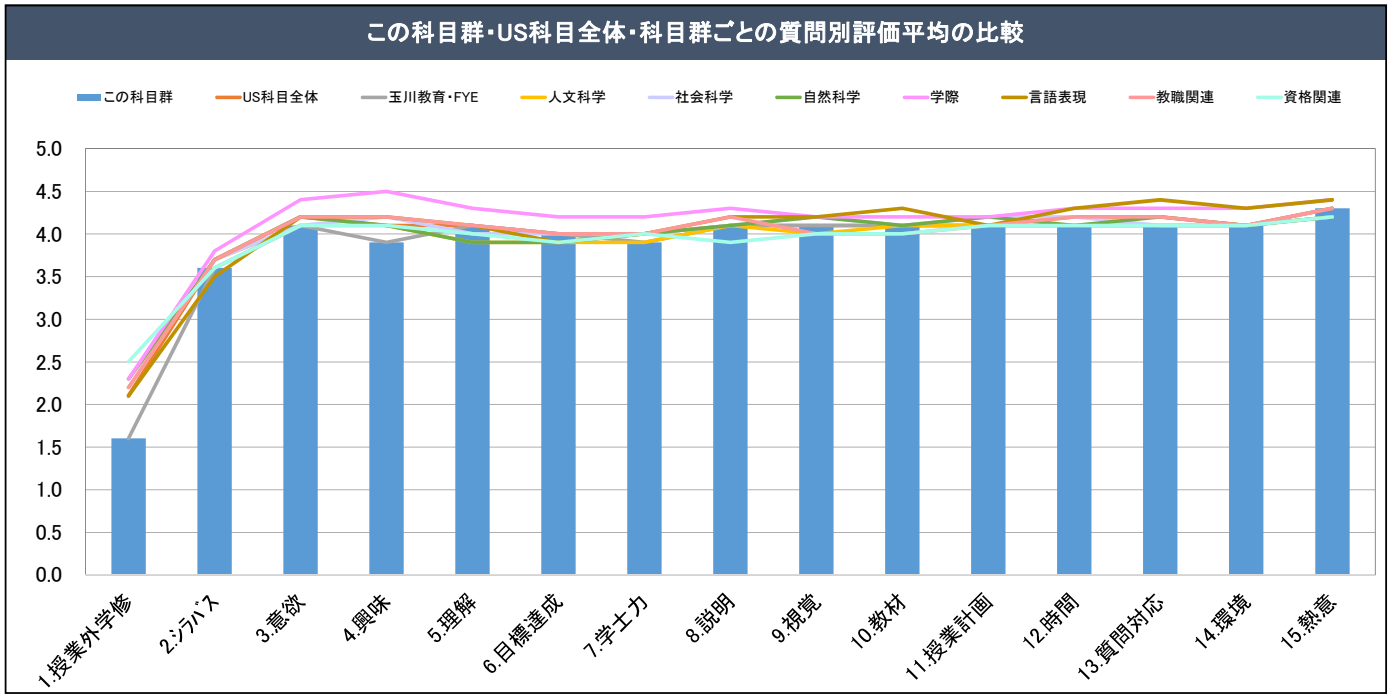
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	1.6	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	3.9	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価				3.9	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
2.3% 2.7% 9.1% 28.4% 57.6%
23.3% 36.7% 25.5% 8.0% 6.6%
34.1% 47.8% 13.7% 2.7% 1.7%
30.7% 44.4% 16.6% 5.3% 3.1%
32.3% 49.6% 14.0% 2.6% 1.6%
27.2% 47.5% 21.8% 2.1% 1.5%
26.7% 48.0% 20.8% 2.7% 2.0%
37.2% 44.6% 13.2% 3.5% 1.6%
36.2% 42.0% 17.3% 2.9% 1.6%
36.4% 41.7% 17.3% 2.7% 1.9%
35.2% 43.8% 18.0% 1.8% 1.3%
36.4% 44.1% 13.9% 3.5% 2.1%
38.7% 38.7% 19.8% 1.5% 1.4%
37.3% 41.4% 15.9% 3.5% 1.9%
48.6% 37.7% 10.6% 1.8% 1.4%
34.3% 43.4% 17.0% 3.2% 2.1%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

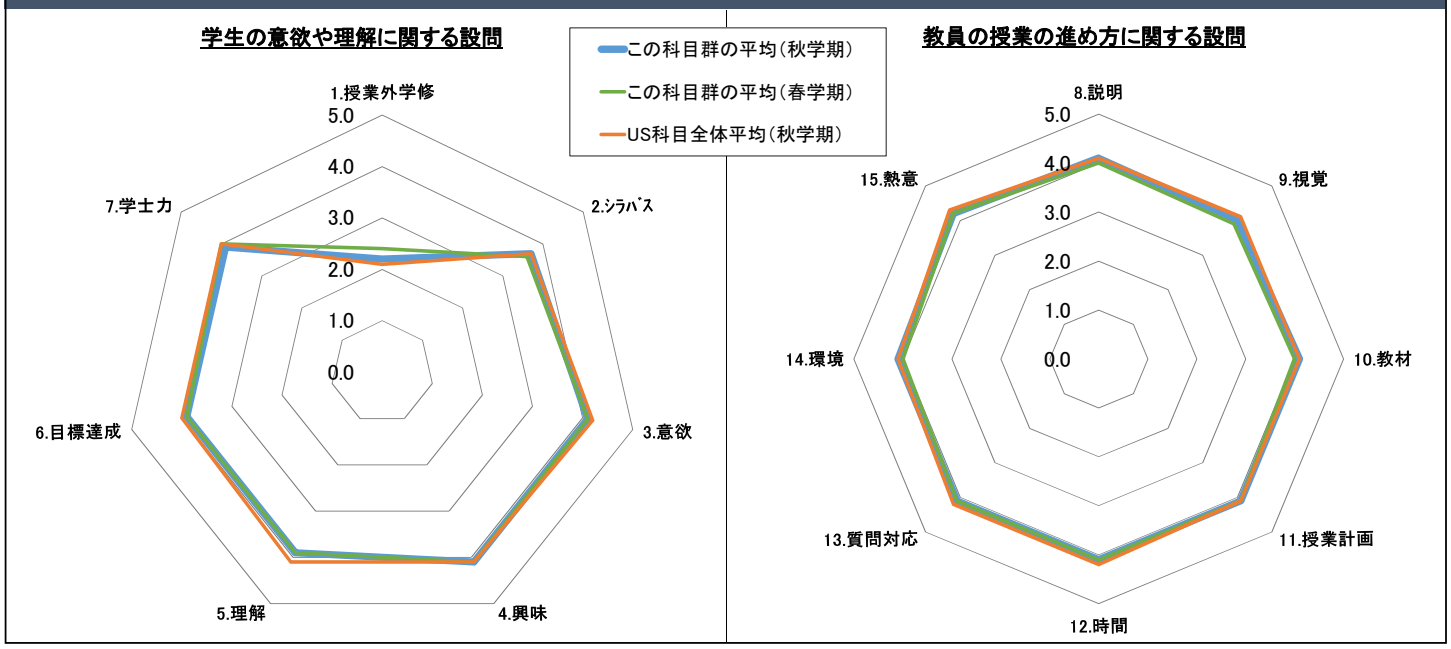
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

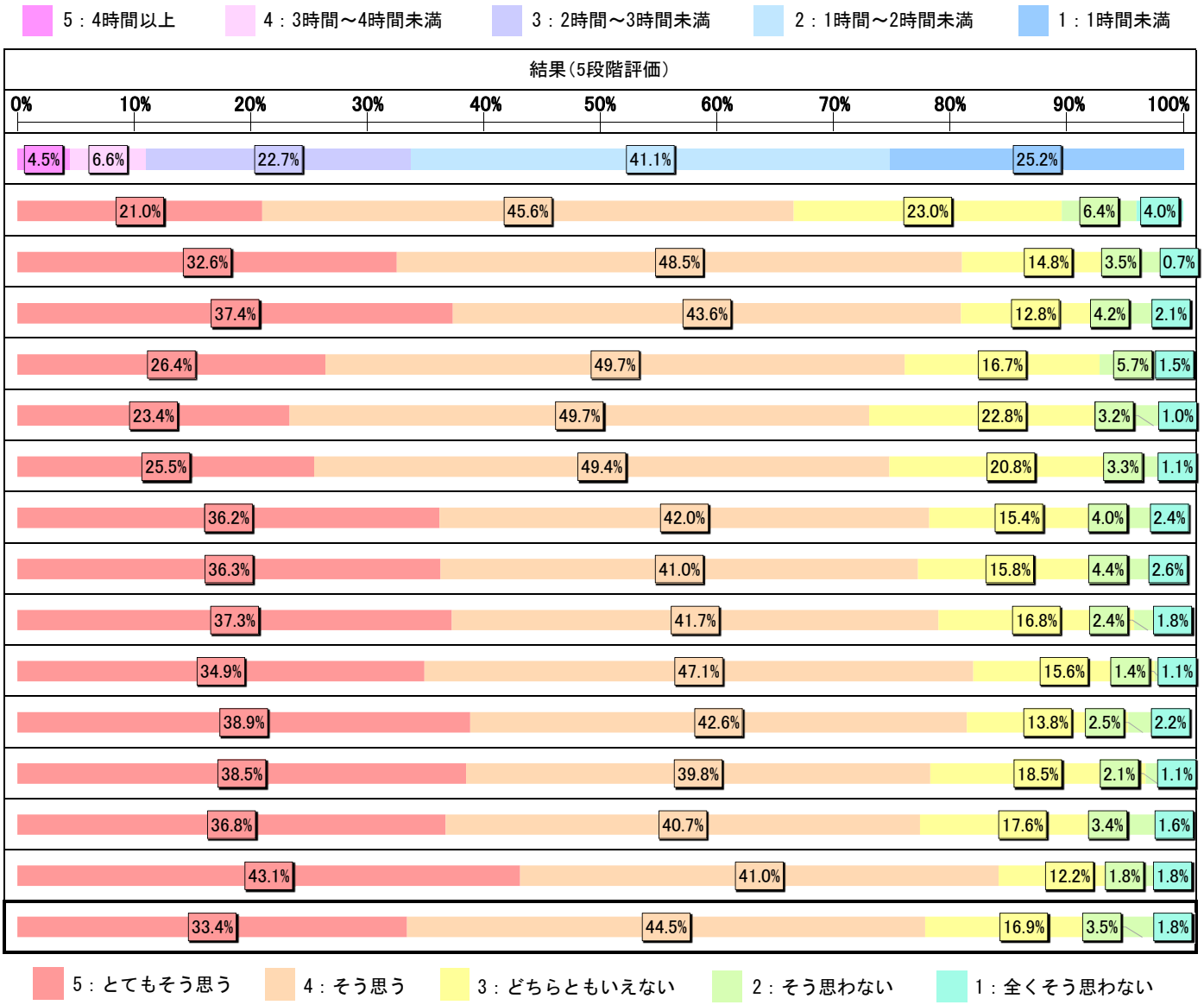
US科目　人文科学科目群　　履修者数： 2,690 名　　回答者数： 1,143 名　　回答率： 42.5 %

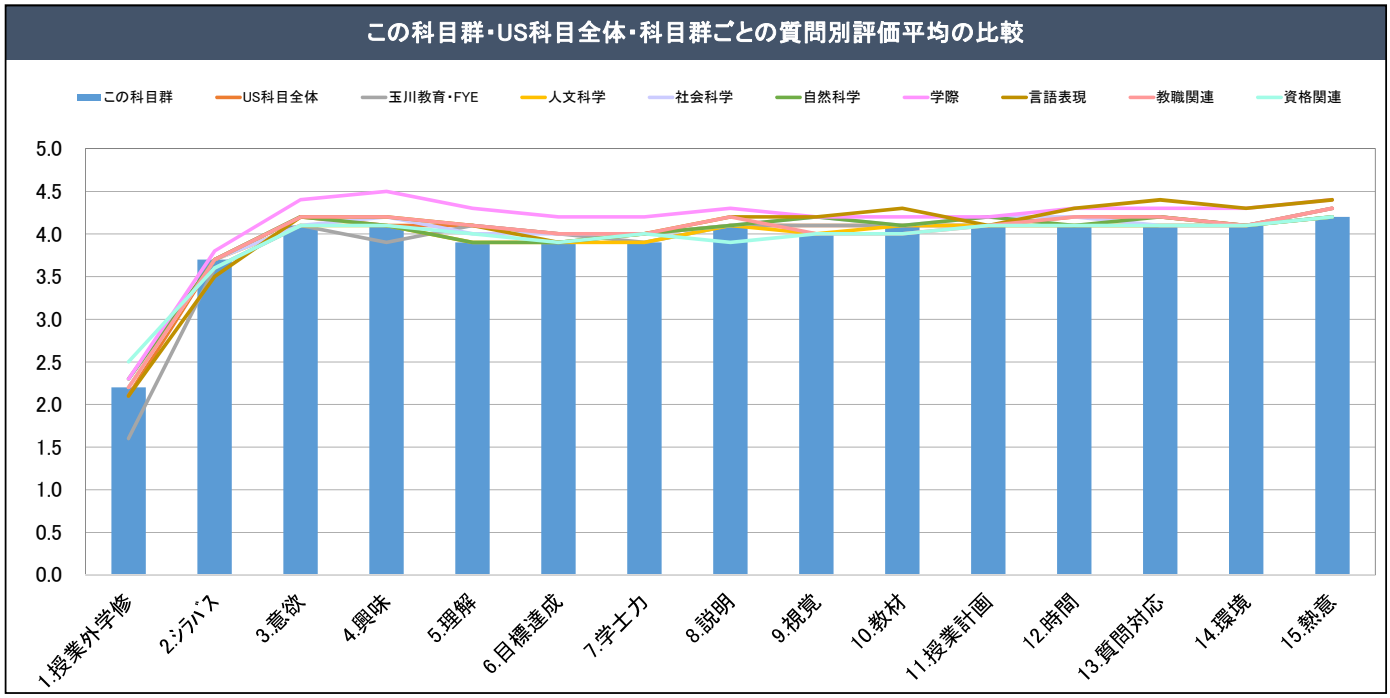
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
4.5%
6.6%
22.7%
41.1%
25.2%
21.0%
45.6%
23.0%
6.4%
4.0%
32.6%
48.5%
14.8%
3.5%
0.7%
37.4%
43.6%
12.8%
4.2%
2.1%
26.4%
49.7%
16.7%
5.7%
1.5%
23.4%
49.7%
22.8%
3.2%
1.0%
25.5%
49.4%
20.8%
3.3%
1.1%
36.2%
42.0%
15.4%
4.0%
2.4%
36.3%
41.0%
15.8%
4.4%
2.6%
37.3%
41.7%
16.8%
2.4%
1.8%
34.9%
47.1%
15.6%
1.4%
1.1%
38.9%
42.6%
13.8%
2.5%
2.2%
38.5%
39.8%
18.5%
2.1%
1.1%
36.8%
40.7%
17.6%
3.4%
1.6%
43.1%
41.0%
12.2%
1.8%
1.8%
33.4%
44.5%
16.9%
3.5%
1.8%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

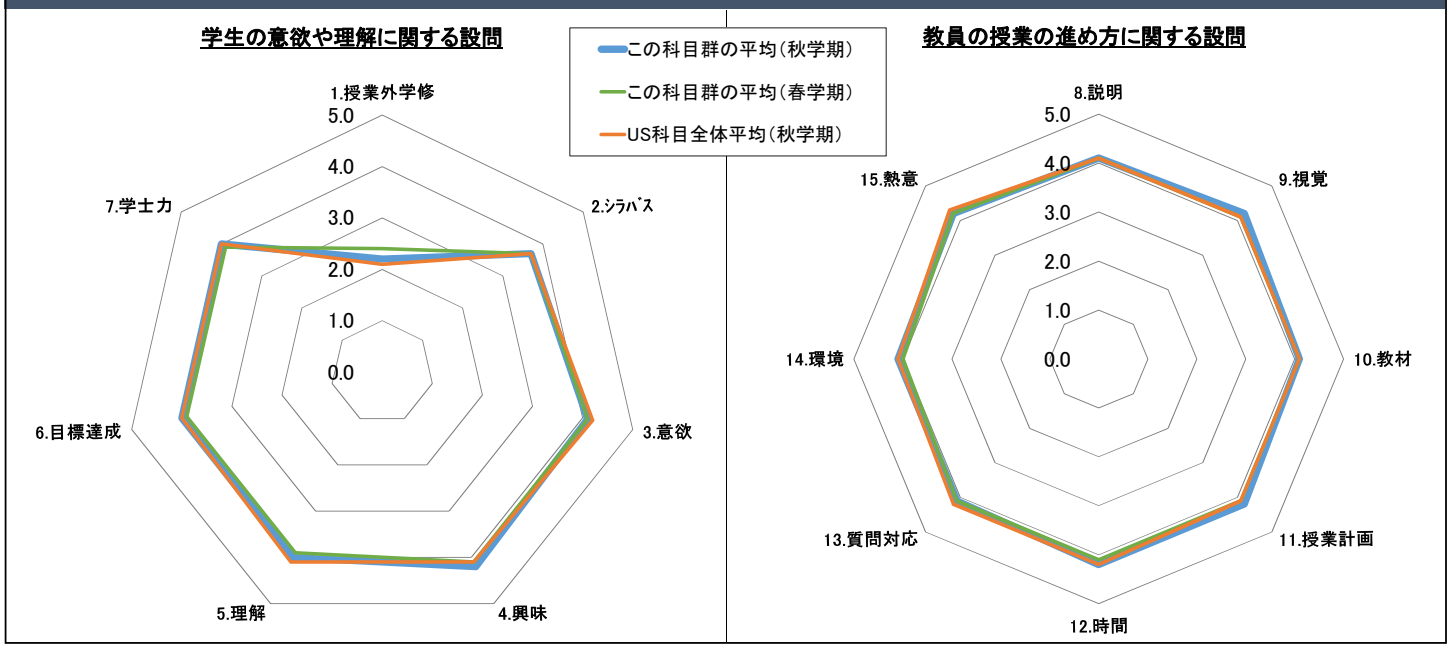
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

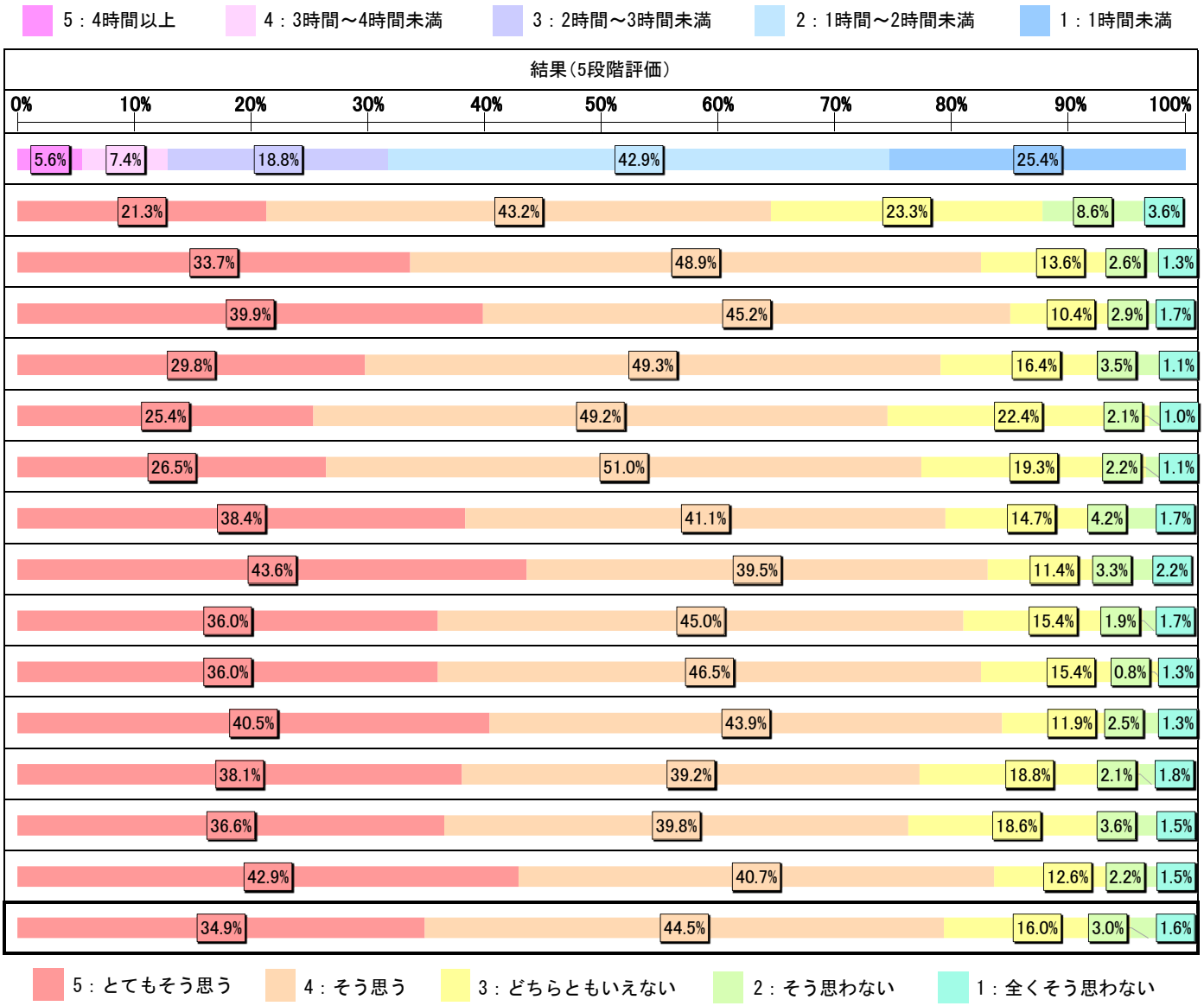
US科目　社会科学科目群　　履修者数：1,687 名　　回答者数：722 名　　回答率：42.8 %

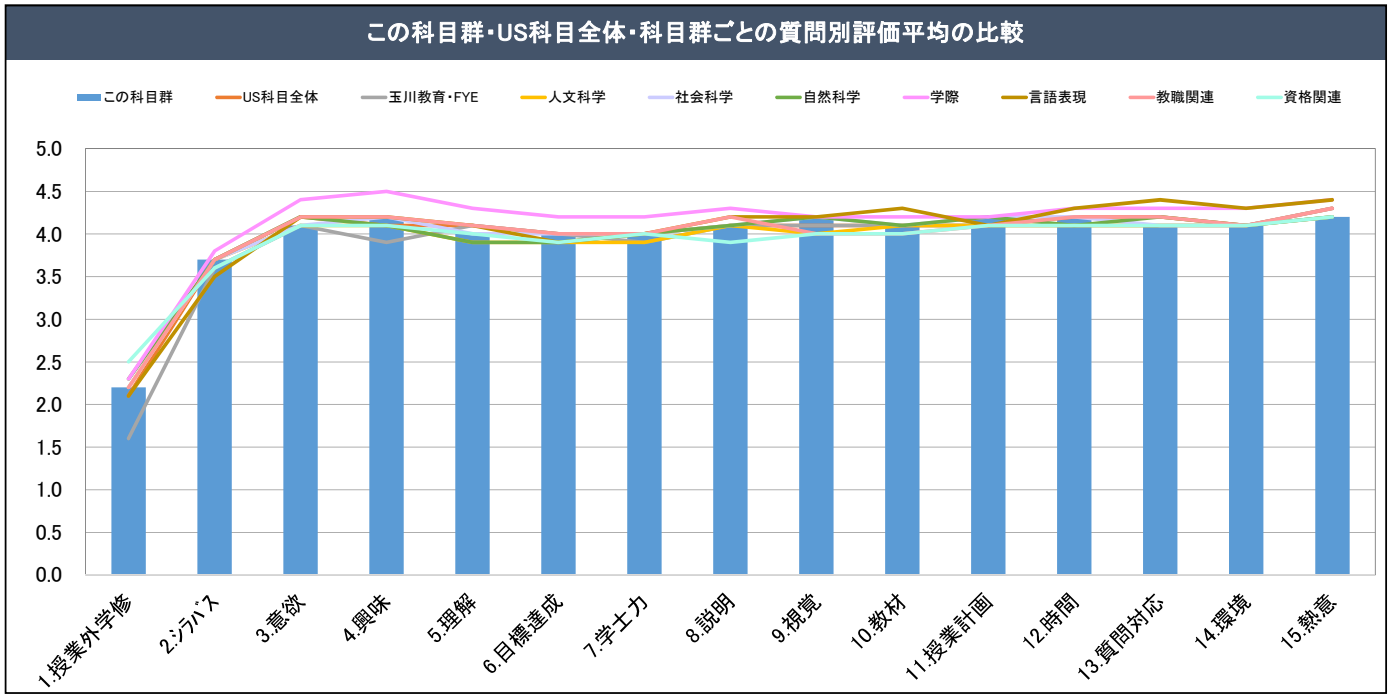
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
5.6% 7.4% 18.8% 42.9% 25.4%
21.3% 43.2% 23.3% 8.6% 3.6%
33.7% 48.9% 13.6% 2.6% 1.3%
39.9% 45.2% 10.4% 2.9% 1.7%
29.8% 49.3% 16.4% 3.5% 1.1%
25.4% 49.2% 22.4% 2.1% 1.0%
26.5% 51.0% 19.3% 2.2% 1.1%
38.4% 41.1% 14.7% 4.2% 1.7%
43.6% 39.5% 11.4% 3.3% 2.2%
36.0% 45.0% 15.4% 1.9% 1.7%
36.0% 46.5% 15.4% 0.8% 1.3%
40.5% 43.9% 11.9% 2.5% 1.3%
38.1% 39.2% 18.8% 2.1% 1.8%
36.6% 39.8% 18.6% 3.6% 1.5%
42.9% 40.7% 12.6% 2.2% 1.5%
34.9% 44.5% 16.0% 3.0% 1.6%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

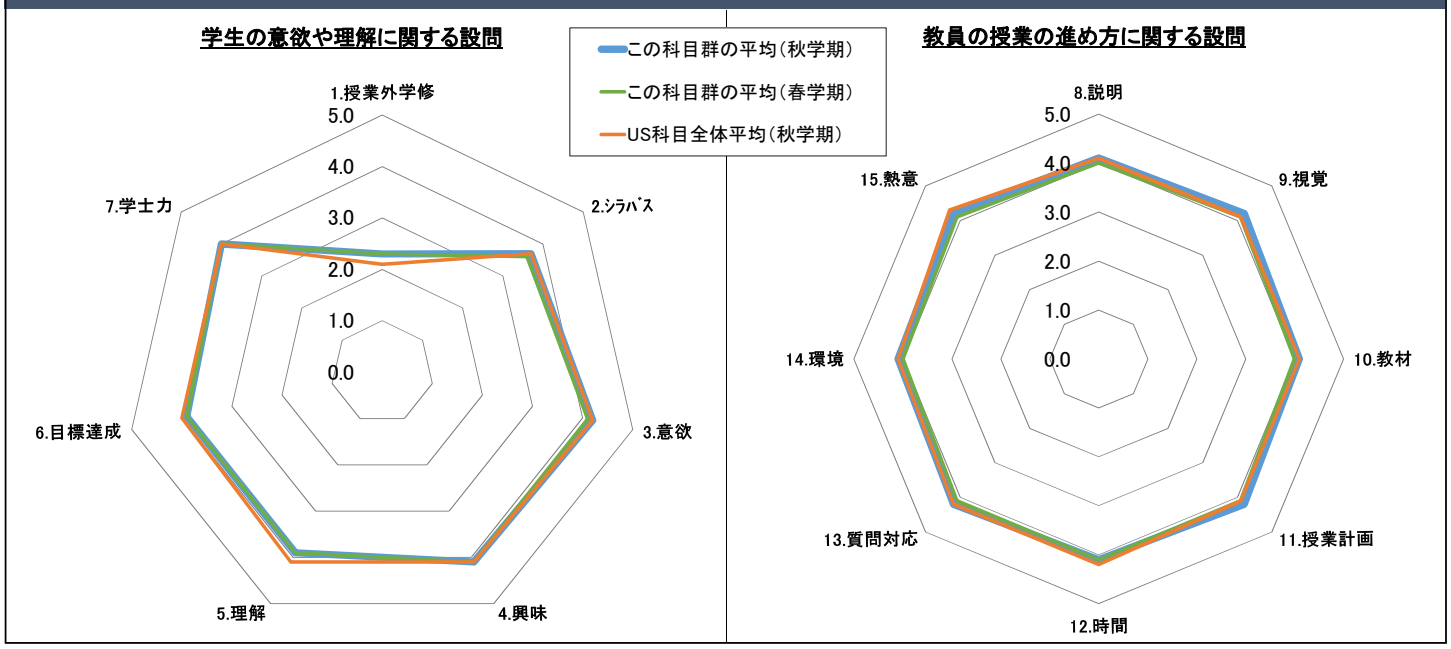
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

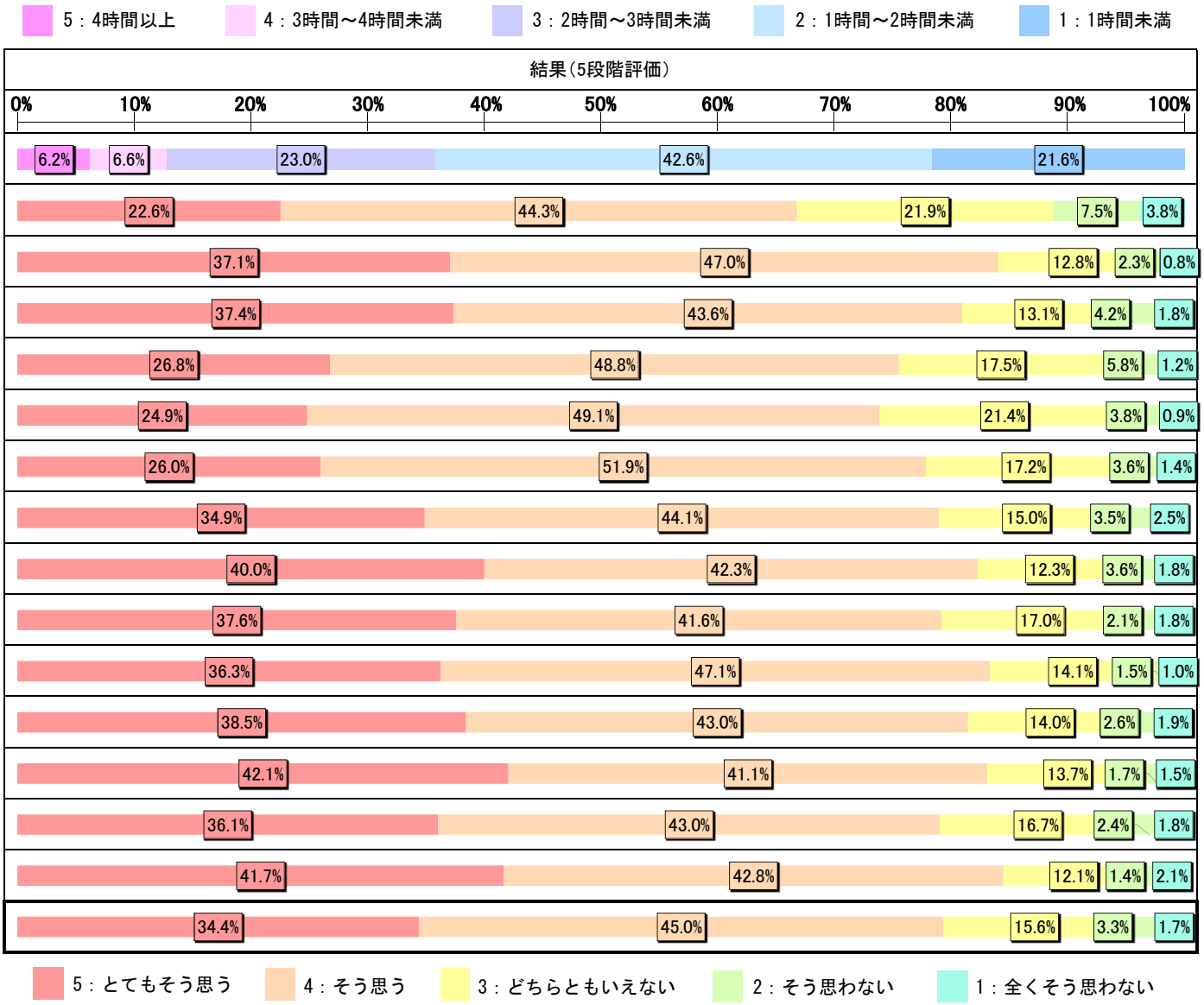
US科目　自然科学科目群　　履修者数： 2,011 名　　回答者数：　962 名　　回答率： 47.8 %

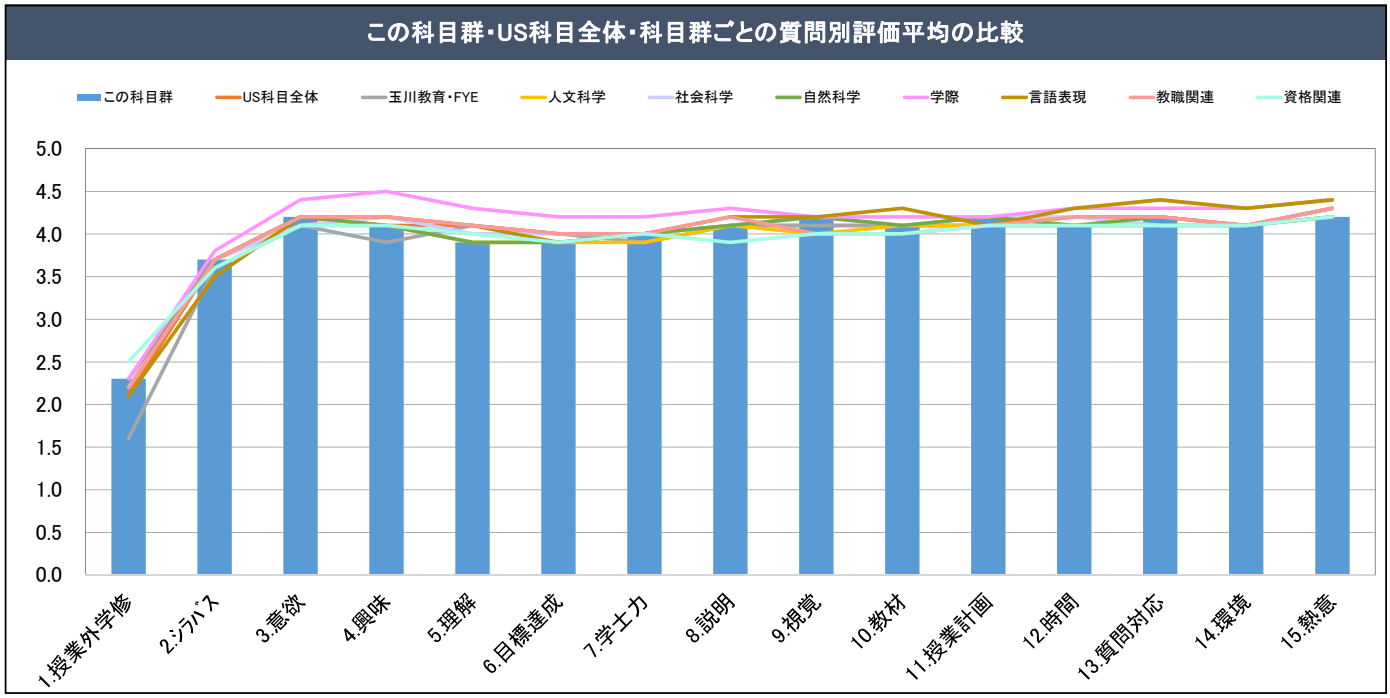
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
6.2% 6.6% 23.0% 42.6% 21.6%
22.6% 44.3% 21.9% 7.5% 3.8%
37.1% 47.0% 12.8% 2.3% 0.8%
37.4% 43.6% 13.1% 4.2% 1.8%
26.8% 48.8% 17.5% 5.8% 1.2%
24.9% 49.1% 21.4% 3.8% 0.9%
26.0% 51.9% 17.2% 3.6% 1.4%
34.9% 44.1% 15.0% 3.5% 2.5%
40.0% 42.3% 12.3% 3.6% 1.8%
37.6% 41.6% 17.0% 2.1% 1.8%
36.3% 47.1% 14.1% 1.5% 1.0%
38.5% 43.0% 14.0% 2.6% 1.9%
42.1% 41.1% 13.7% 1.7% 1.5%
36.1% 43.0% 16.7% 2.4% 1.8%
41.7% 42.8% 12.1% 1.4% 2.1%
34.4% 45.0% 15.6% 3.3% 1.7%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

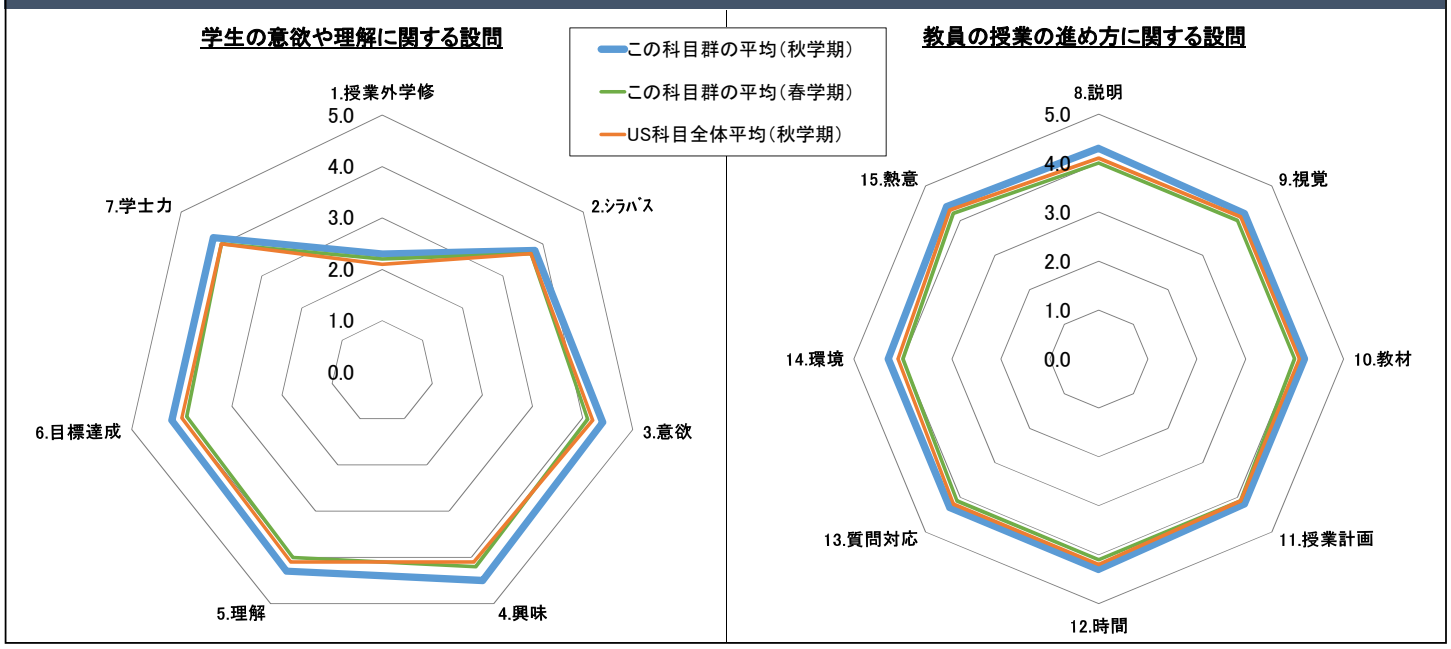
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

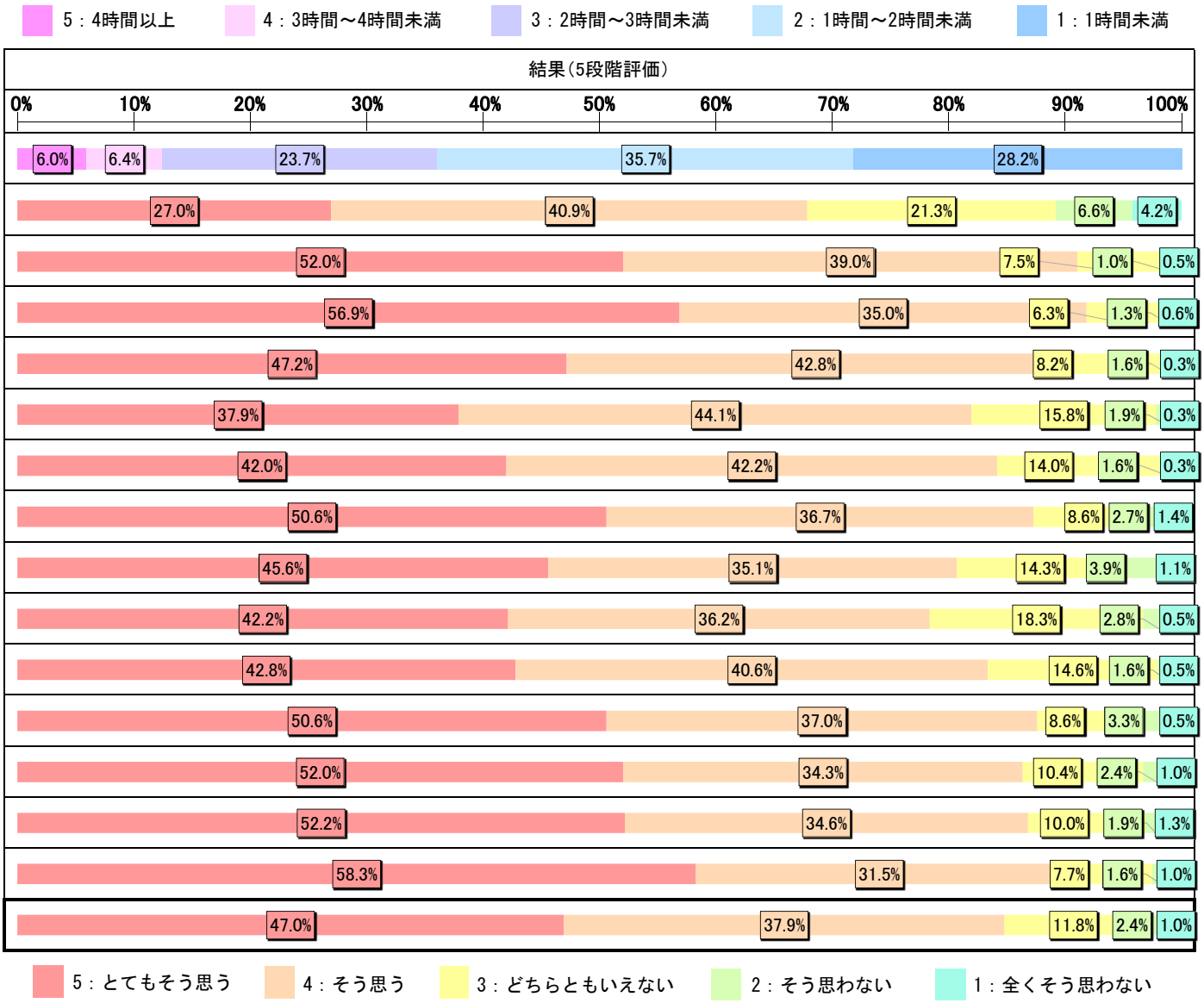
US科目　学際科目群　　履修者数： 1,420 名　　回答者数： 638 名　　回答率： 44.9 %

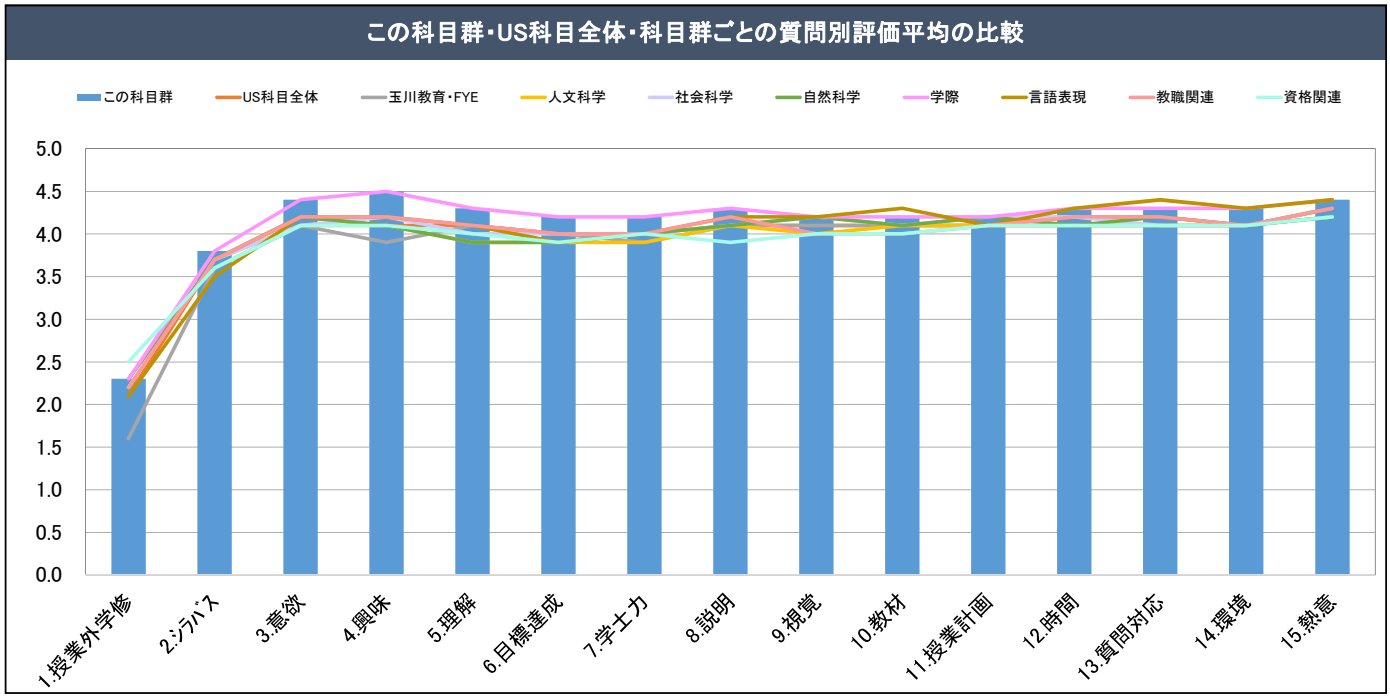
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.4	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.5	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.3	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.2	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.2	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価				4.1	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
6.0% 6.4% 23.7% 35.7% 28.2%
27.0% 40.9% 21.3% 6.6% 4.2%
52.0% 39.0% 7.5% 1.0% 0.5%
56.9% 35.0% 6.3% 1.3% 0.6%
47.2% 42.8% 8.2% 1.6% 0.3%
37.9% 44.1% 15.8% 1.9% 0.3%
42.0% 42.2% 14.0% 1.6% 0.3%
50.6% 36.7% 8.6% 2.7% 1.4%
45.6% 35.1% 14.3% 3.9% 1.1%
42.2% 36.2% 18.3% 2.8% 0.5%
42.8% 40.6% 14.6% 1.6% 0.5%
50.6% 37.0% 8.6% 3.3% 0.5%
52.0% 34.3% 10.4% 2.4% 1.0%
52.2% 34.6% 10.0% 1.9% 1.3%
58.3% 31.5% 7.7% 1.6% 1.0%
47.0% 37.9% 11.8% 2.4% 1.0%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

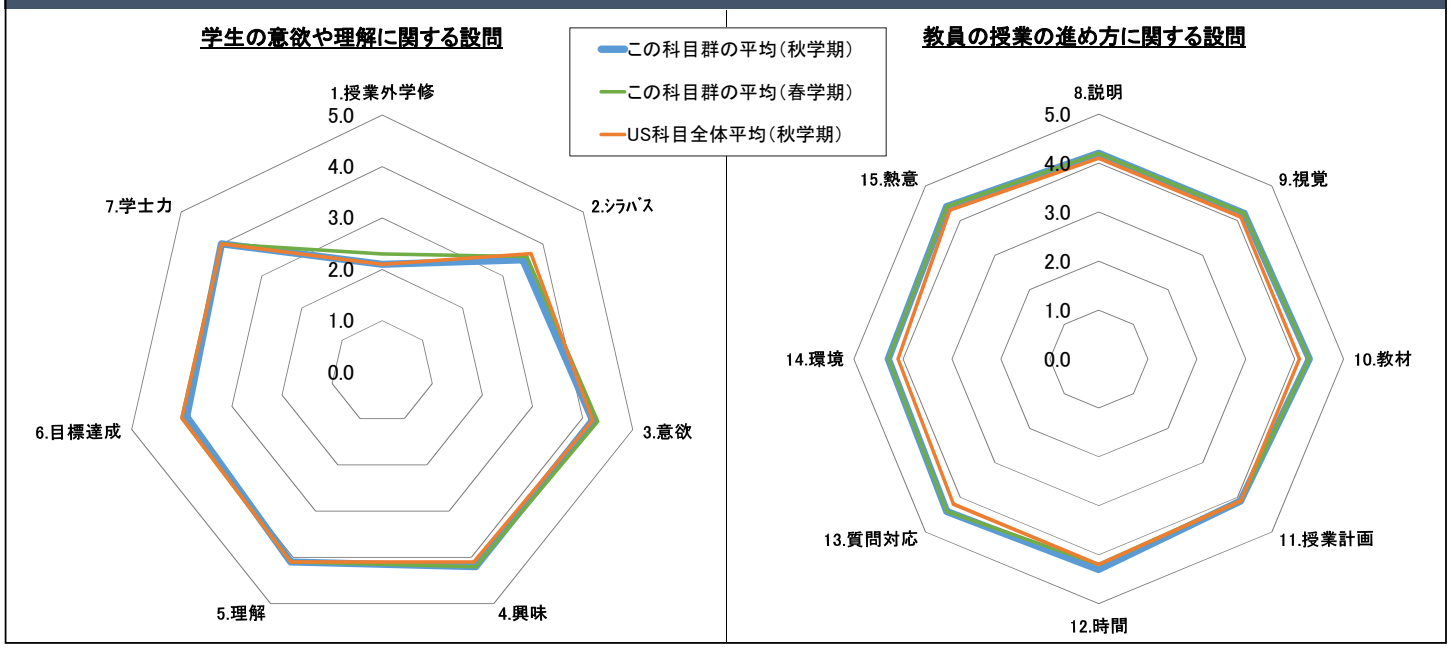
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

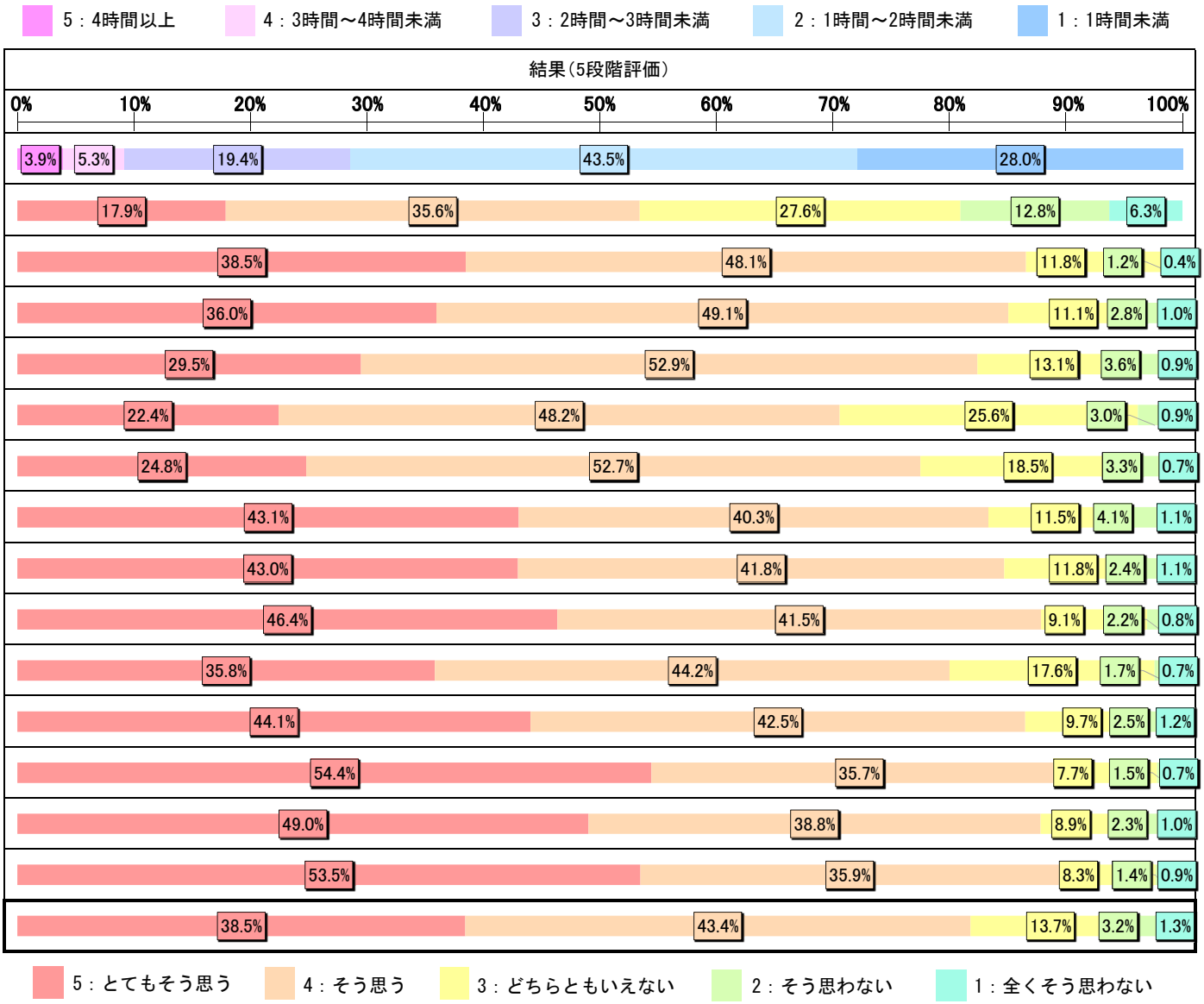
US科目　言語表現科目群　　履修者数： 2,207 名　　回答者数： 1,387 名　　回答率： 62.8 %

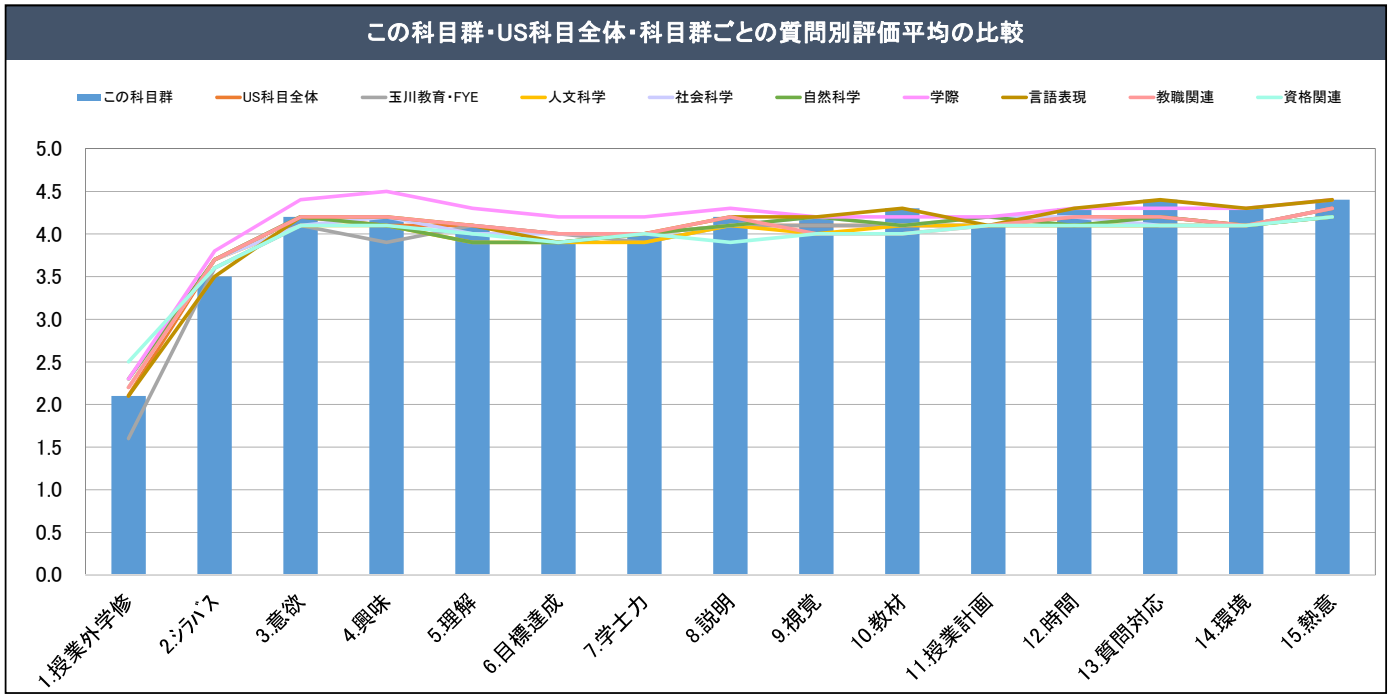
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.1	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.3	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.9% 5.3% 19.4% 43.5% 28.0%
17.9% 35.6% 27.6% 12.8% 6.3%
38.5% 48.1% 11.8% 1.2% 0.4%
36.0% 49.1% 11.1% 2.8% 1.0%
29.5% 52.9% 13.1% 3.6% 0.9%
22.4% 48.2% 25.6% 3.0% 0.9%
24.8% 52.7% 18.5% 3.3% 0.7%
43.1% 40.3% 11.5% 4.1% 1.1%
43.0% 41.8% 11.8% 2.4% 1.1%
46.4% 41.5% 9.1% 2.2% 0.8%
35.8% 44.2% 17.6% 1.7% 0.7%
44.1% 42.5% 9.7% 2.5% 1.2%
54.4% 35.7% 7.7% 1.5% 0.7%
49.0% 38.8% 8.9% 2.3% 1.0%
53.5% 35.9% 8.3% 1.4% 0.9%
38.5% 43.4% 13.7% 3.2% 1.3%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

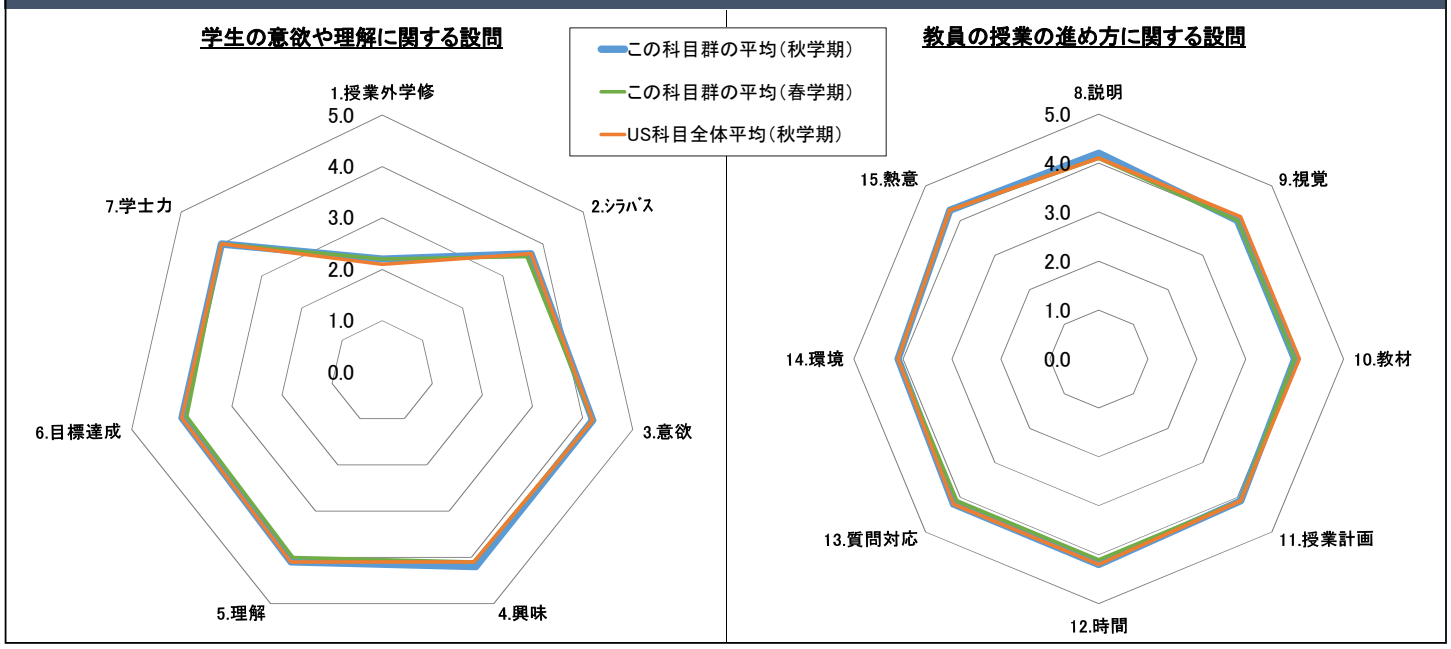
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

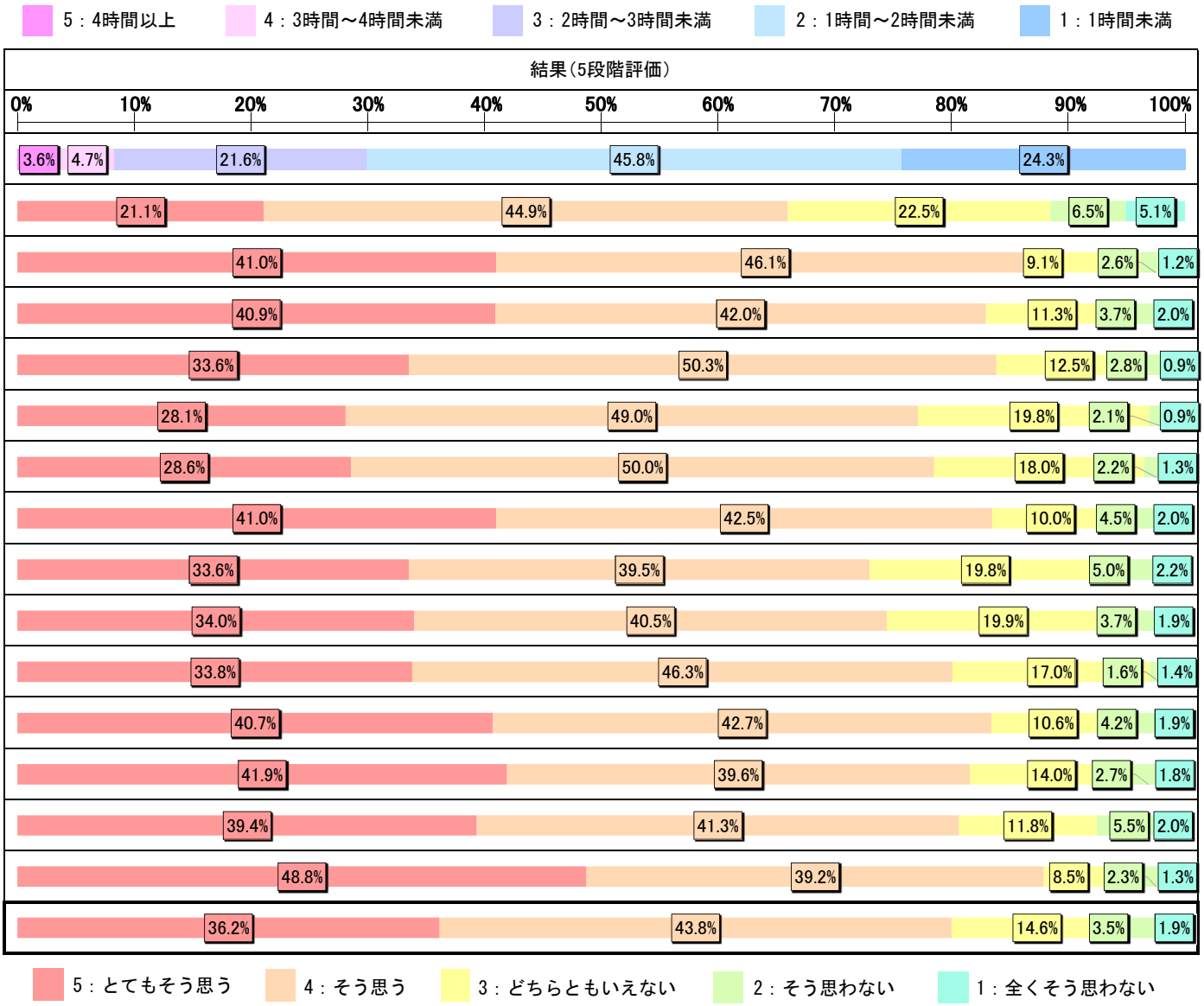
US科目　教職関連科目群　　履修者数： 2,155 名　　回答者数： 1,085 名　　回答率： 50.3 %

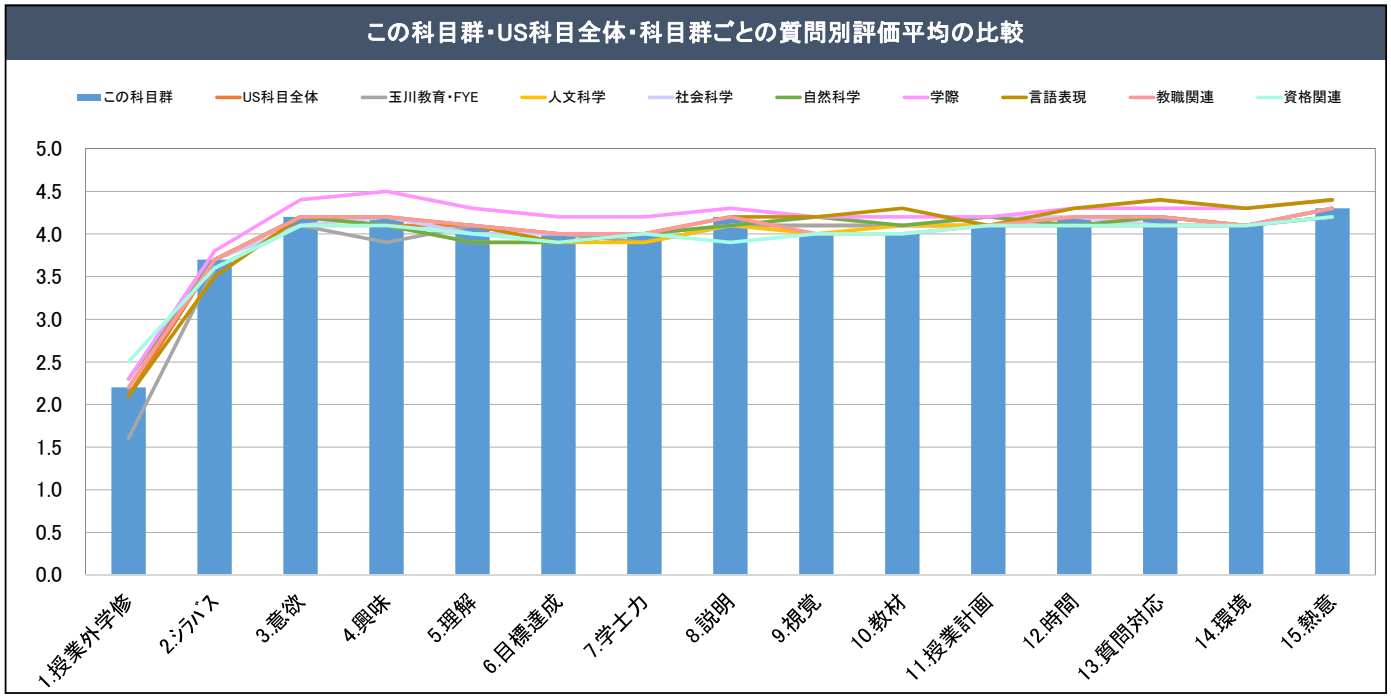
設問				科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.2	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1） ／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
3.6% 4.7% 21.6% 45.8% 24.3%
21.1% 44.9% 22.5% 6.5% 5.1%
41.0% 46.1% 9.1% 2.6% 1.2%
40.9% 42.0% 11.3% 3.7% 2.0%
33.6% 50.3% 12.5% 2.8% 0.9%
28.1% 49.0% 19.8% 2.1% 0.9%
28.6% 50.0% 18.0% 2.2% 1.3%
41.0% 42.5% 10.0% 4.5% 2.0%
33.6% 39.5% 19.8% 5.0% 2.2%
34.0% 40.5% 19.9% 3.7% 1.9%
33.8% 46.3% 17.0% 1.6% 1.4%
40.7% 42.7% 10.6% 4.2% 1.9%
41.9% 39.6% 14.0% 2.7% 1.8%
39.4% 41.3% 11.8% 5.5% 2.0%
48.8% 39.2% 8.5% 2.3% 1.3%
36.2% 43.8% 14.6% 3.5% 1.9%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

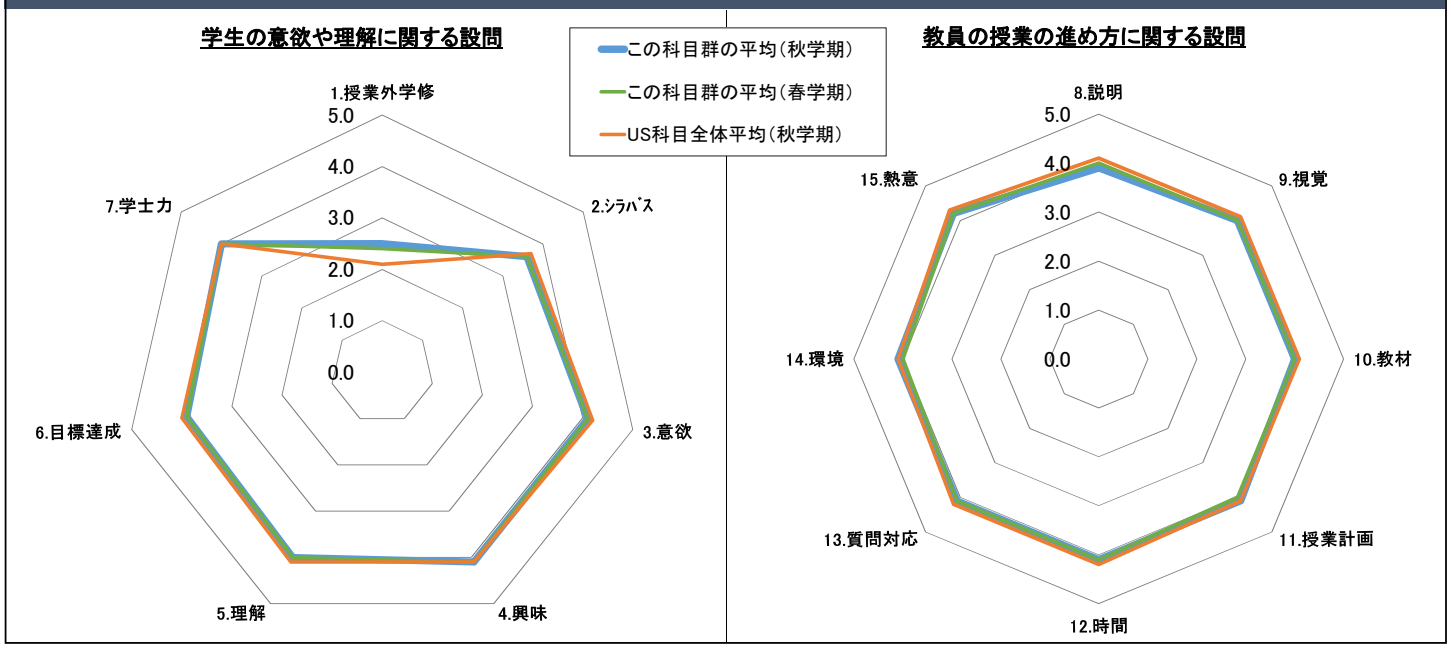
令和3年度　秋学期　学生による授業アンケート集計結果　　玉川大学

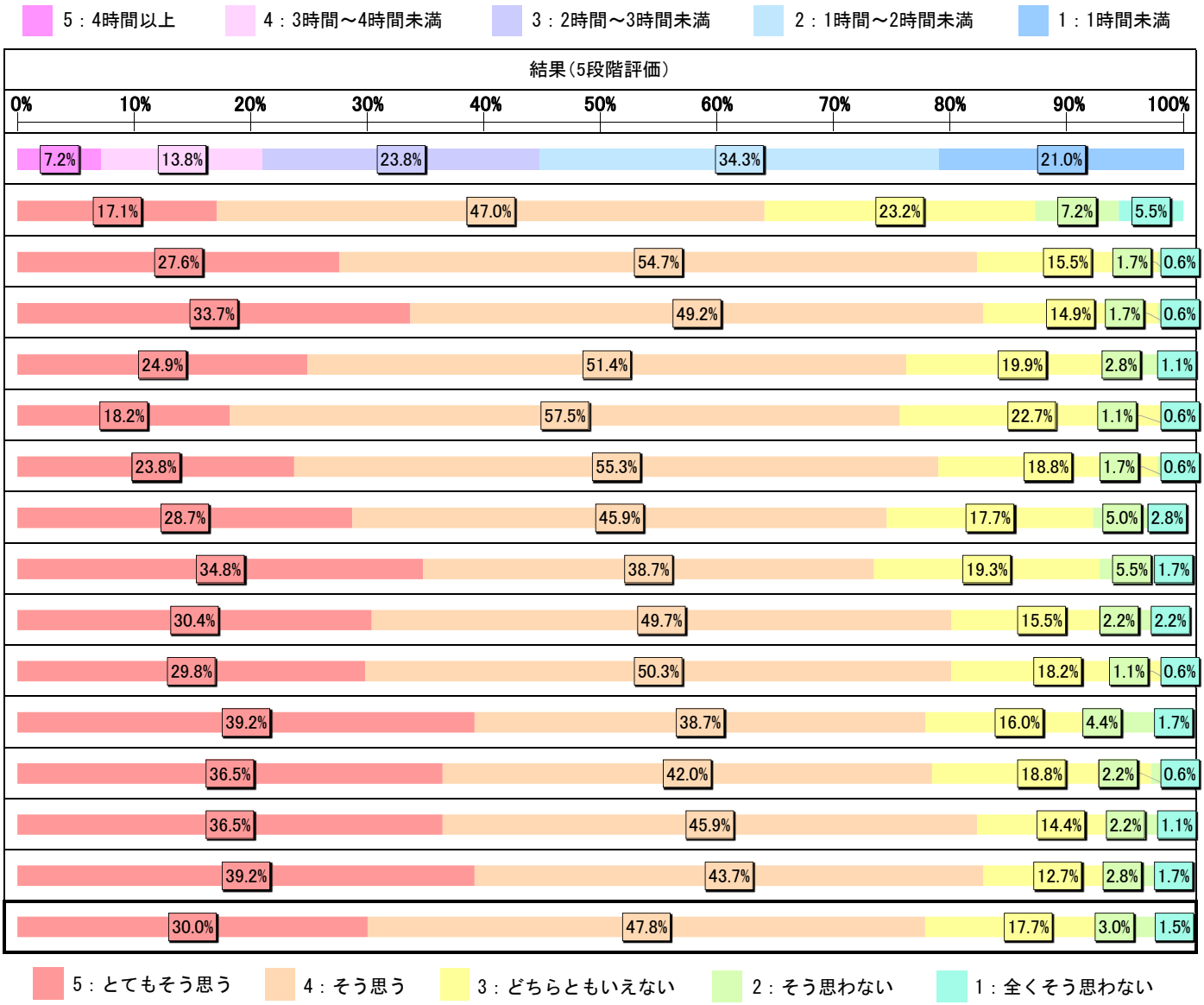
US科目　資格関連科目群　　履修者数：　380 名　　回答者数：　181 名　　回答率：　47.6 %

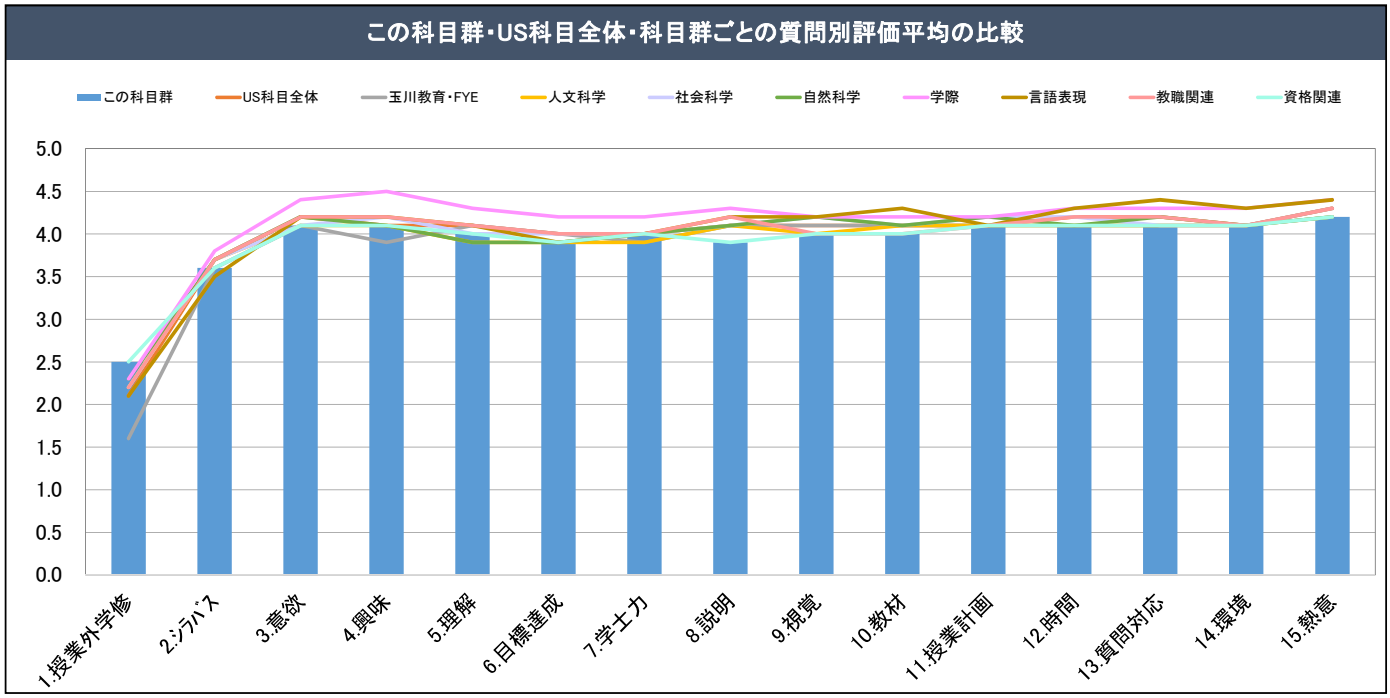
			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.1
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.9	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

平均値＝（「5」回答数×5 ＋「4」回答数×4 ＋「3」回答数×3 ＋「2」回答数×2 ＋「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

質問別評価平均レーダーチャート




5：4時間以上
4：3時間～4時間未満
3：2時間～3時間未満
2：1時間～2時間未満
1：1時間未満
結果（5段階評価）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
7.2% 13.8% 23.8% 34.3% 21.0%
17.1% 47.0% 23.2% 7.2% 5.5%
27.6% 54.7% 15.5% 1.7% 0.6%
33.7% 49.2% 14.9% 1.7% 0.6%
24.9% 51.4% 19.9% 2.8% 1.1%
18.2% 57.5% 22.7% 1.1% 0.6%
23.8% 55.3% 18.8% 1.7% 0.6%
28.7% 45.9% 17.7% 5.0% 2.8%
34.8% 38.7% 19.3% 5.5% 1.7%
30.4% 49.7% 15.5% 2.2% 2.2%
29.8% 50.3% 18.2% 1.1% 0.6%
39.2% 38.7% 16.0% 4.4% 1.7%
36.5% 42.0% 18.8% 2.2% 0.6%
36.5% 45.9% 14.4% 2.2% 1.1%
39.2% 43.7% 12.7% 2.8% 1.7%
30.0% 47.8% 17.7% 3.0% 1.5%
5：とてもそう思う
4：そう思う
3：どちらともいえない
2：そう思わない
1：全くそう思わない


この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較
この科目群
US科目全体
玉川教育・FYE
人文科学
社会科学
自然科学
学際
言語表現
教職関連
資格関連
5.0
4.5
4.0
3.5
3.0
2.5
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1.授業外学修
2.シラバス
3.意欲
4.興味
5.理解
6.目標達成
7.学士力
8.説明
9.視覚
10.教材
11.授業計画
12.時間
13.質問対応
14.環境
15.熱意

Ⅱ　大学院 FD 活動報告

＜文学研究科＞

（1）講演会・研修会・ワークショップなど

FD 活動計画のとおり、文学研究科の修了生に対して、「大学院での学修はどのように役に立っているか」と題したインタビュー調査を行い、文学研究科のカリキュラム等の改善のための資料を得ることを試みた。人間学専攻の修了生 1 名、英語教育専攻の修了生 2 名に対して、Zoom でのインタビューを行った。インタビューの中では、以下のような質問を行った。

・修士課程在籍中には何を学んだと感じているか。
・現在の職業において修士課程での学びが役立っている点はあるか。
・修士課程在籍中に、これは学んでおきたかったという点はあるか。
・修士課程在籍中に、学び以外の点で、この点をサポートしてほしかった、という点はあるか。あるいはサポートがあってよかったという点はあるか。
・職業生活以外で、修士課程での学びが役立っている点はあるか。

文学研究科の教員はインタビューに参加、または、後日録画動画を視聴した後に、次の項目について、各自がレポートを提出した。

・今後の大学院の授業で、新しく取り組みたいことや、より意識していきたいこと
・大学院のカリキュラム改編への案
・入学者を増やすための取り組みの案

今後の大学院の授業でより意識していきたいこととして以下のような内容が見られた。

・学生一人ひとりに応じた学びの指導をきめ細かく行い、入学生が修了後においてより広範囲の学びにつながることが期待できる基礎的学力の涵養に努めていきたい。
・より一層受講生の思考プロセスの吟味やテキストを踏まえたディスカッションの充実などに努めていきたい。
・大学院生が現在に有している視点と授業実施者が有している視点とを意識しながら、視野を押し広げ、ユニークな枠組みを培うことができるように、授業を展開していきたい。

今後のカリキュラム等の改善のための取り組み案として、以下のような内容が見られた。

・英語力を向上させるための科目の設置
・英語以外の外国語科目の履修の可能性の検討
・英語教員を目指す学生（英語教員系）と企業就職を目指す学生（非英語教員系）の両方を想定したカリキュラム作り
・ビジネス英語のような実践科目を大学院共通科目として設置することの検討
・「学部＋大学院」の 5 年プログラムの可能性の検討
・文献をしっかりと読み解釈をし、それを基にして議論をする力の育成
・修了生と大学院生が交流できる実践的な科目の設置の検討
・現職英語教員を想定した大学院のプログラムの検討

今後は、これらの改善案を考慮しながら、文学研究科のカリキュラム等の改定を行っていくとともに、文学研究科の課題を知るために、来年度も同様に修了生に調査を行っていく。

（2）調査・研究など

FD 活動計画のとおり、カリキュラム・授業改善のための基礎データ収集の目的で、修了生へのインタビューを行った。内容については、上記（1）で示したとおりである。

（3）学会発表の成果の検証

FD 活動計画のとおり、学会発表の成果検証として、学会発表後に、学生および指導担当教員が報告書を提出した。令和 3 年度は英語教育専攻の学生が下記の学会・研究会等で発表を行った。

・令和 3 年 8 月　玉川大学英語教育セミナー（2 年生 2 名）
・令和 3 年 12 月　ASIA TEFL（1 年生 2 名、2 年生 1 名）
・令和 3 年 2 月　大学生英語教育論文合同発表会（2 年生 2 名）

これらの報告書からは、以下の課題が挙げられた。

・発表申込から発表当日までかなりの期間がある学会が多いが、その間の準備の計画をより念入りに練る必要がある。
・質問に対する回答を簡潔に行うための練習が必要である。
・英語での発表の場合、原稿を書いて読み上げることで発表自体は可能だが、聴き手にとっては聞きにくいこともあるので、書き言葉にならないように発表を意識した原稿作りが大切である。

今後は、これらの課題を踏まえた指導を行っていくとともに、学会発表の報告書を学生と教員が提出することを継続的に行っていきたい。

（4）学生による授業アンケート

FD 活動計画のとおり、学生による授業アンケートを行った。対象となった授業は文学研究科が提供しているすべての授業であった。下記のとおり、全授業において、おおむね評価が高かった。「2. この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。」の項目について、平均値が他の項目と比べてやや低いものが散見されるが、履修するすべての科目が、各学生の研究課題と直接関係するわけではないことから、今後、特に改善すべき点として捉える必要はないと考える。履修者が少ない授業、特に履修者が 1 名の授業においては、回答した学生の匿名性が確保されないが、学生からは特にその点の指摘がなかったことから、今後も、すべての科目で同様のアンケートを実施する予定である。また、項目の内容の見直しを行い、必要があれば、新項目を設定するなど、アンケート内容を改良していく予定である。

授業ごとの結果は以下の表のとおりだが、各授業における数値は、以下の 4 段階の尺度の平均値である。

4 とても当てはまる
3 やや当てはまる
2 あまり当てはまらない
1 まったく当てはまらない

春学期		ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ﾘﾃﾗｼｰ	思想文化演習	西洋思想史研究	人間行動学研究	人間学研究	応用言語学研究	英語教育研究	言語教育政策研究
	履修者数	4名	2名	1名	1名	1名	3名	3名	2名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	3.3	3.5	3.0	3.0	3.0	3.7	3.7	3.5
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	3.0	3.5	3.0	4.0	3.0	4.0	3.7	3.5
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.7	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	2.8	3.5	4.0	4.0	4.0	3.7	3.3	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0

春学期		英語授業演習	英語教材論研究	英語圏文学研究	研究指導Ⅰ（教員A）	研究指導Ⅰ（教員B）
	履修者数	1名	3名	1名	1名	1名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	3.7	3.0	4.0	4.0
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	2.7	2.0	4.0	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.0	3.	3.0	4.0	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.0	2.7	2.0	4.0	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	3.0	3.7	4.0	4.0	3.0

秋学期		現代倫理学研究	表象文化研究	認知論史研究	ニューロエシックス研究	英語教授法入門	多文化社会研究	現代英語研究
	履修者数	１名	１名	１名	１名	３名	２名	４名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	3.8
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	3.0	4.0	3.0	4.0	4.0	3.3
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.0	4.0	3.0	4.0	4.0	4.0	3.5
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	4.0	4.0	3.0	4.0	4.0	3.8

秋学期		言語評価・テスト論研究	研究指導Ⅱ（教員A）	研究指導Ⅱ（教員B）
	履修者数	２名	１名	１名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	4.0	4.0
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	3.5	4.0	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.5	4.0	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	4.0	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	4.0	4.0

（５）その他（院生に対する研究倫理教育の実施）

昨年度に引き続き、全学生（人間学専攻１名・英語教育専攻５名）に eL CoRE の受講を義務づけた。年度初めの４月中に全学生が受講を終え、受講証明書を提出した。また、学生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL CoRE の学習内容、及び関連学会の研究倫理を参考にしながら、研究倫理チェックリストを作成し、学生に配布した。2 年生は、修士論文の提出の際に、チェックを入れたものを一緒に提出した。提出したリストを教員が確認したところ、すべての学生が適切な手順で研究を行っていた。今後は、研究倫理チェックリストを必要があれば改良し、引き続き、学生に配付した上で、研究を行う際に活用していく予定である。

＜農学研究科＞

活動計画

（１）オンライン授業における著作物利用についての講演会の開催
（２）学生の心のケアに関する講演会の開催
（３）海外からの留学生・研究者の受入れ制度に関する講演会の開催
（４）大学院生の学修・研究環境の実態調査とその改善
（５）英語学修に関するアンケートの実施と授業改善
（６）研究談話会の開催

活動計画（１）オンライン授業における著作物利用についての講演会の開催

「オンライン授業における著作物利用」（講師：弁護士　雪丸 真吾先生）という演題で著作権に関する講演をオンライン形式で令和３年９月 30 日（木）に開催した。農学研究科教員以外に農学部教員や技術員・職員を含む多数が参加した。講演では、大学院での講義の説明で用いる資料や学生に配布する資料などに関して、著作権の対象となる範囲を説明していただき、資料の利用や配布の際の注意事項などの情報を教員間で共有した。

活動計画（２）学生の心のケアに関する講演会の開催

「学生の心のケア」（講師：保健センター健康院・カウンセラー　伊東 優子先生）という演題でコロナ禍での学生の精神的不安・負担に対する対応に関する講演をオンライン形式で令和３年９月 16 日（木）に開催した。農学研究科教員以外に農学部教員や技術員・職員の参加も見られた。講演では、保健センター健康院での学生カウンセリング制度の紹介やコロナ禍での取り組みについて説明していただき、事前に教員から提出してもらった質問に対する回答・コメントをいただいた。具体的な対応をアドバイスしていただき、それらの情報を教員間で共有した。

活動計画（３）海外からの留学生・研究者の受入れ制度に関する講演会の開催

「SATREPS 事業におけるグローバル人材育成」（講師：農学部　渡辺 京子教授・石川 晃士准教授）という演題で海外からの留学生や研究者を受け入れる制度に関する講演をオンライン形式で令和３年８月 13 日（金）に開催した。農学研究科教員以外に農学部教員や技術指導員・大学院生の参加も見られた。講演では、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）の紹介や現在の進行状況、外国人研究者や留学生の受け入れ制度などについて、フィリピンとの

共同事業を例に話をしていただいた。今後、他国からも留学生を受け入れる可能性があり、学費・生活費援助制度などの情報を教員間で共有した。

活動計画（４）大学院生の学修・研究環境の実態調査とその改善

大学院生が学修・研究活動に集中できる環境を提供するために、大学 6 号館の大学院生共通学修スペースの利用状況について調査した。大学 6 号館を活動拠点とする学生の多くはこのスペースを利用しているものの、学生数に対して学習机の数が足りず、利用時間の重ならない学生間で机をシェアすることなど、利用ルールを決めた。また、プリンターやコピー機の利用やロッカーの割振りなど、従来の利用上の問題を実態調査した上で、より良い利用法を決めた。

活動計画（５）英語学修に関するアンケートの実施と授業改善

Microsoft Forms を利用した英語学修に関するアンケートを農学研究科の院生を対象に秋学期末に実施した。農学研究科では次年度から留学生が入学することから、学生の英語学修に対する意識が以前よりも高くなることを期待しており、それを念頭に置いた上でのアンケート調査であった。大学院生 23 名（在籍院生 30 名中）から得られた回答を分析した結果、学部生時と比べて英語文献を読む機会が増えたことや学生が国際学会等で英語ヒヤリングや英語スピーキングのスキルを必要とし、その重要性を認識している点が把握できた（別紙）。一方、Google 翻訳等の翻訳プログラムをほとんどの学生が利用しており、その依存度が高く、そのことを学生自身が自覚していることも分かった。これらの情報を農学研究科の教員間で共有し、今後の研究指導に役立てることになった。

活動計画（６）研究談話会の開催

大学院教育は教員の研究活動が教育の質に直結するため、教員の研究レベルの向上も FD 活動として重要である。高い評価を受けている研究や最先端の技術を取り込んだ研究の紹介は教員にとって大いに参考になり、研究に対する動機付けも高まる。農学研究科では「研究談話会」を企画して、そのような機会を教員や大学院生に提供している。令和 3 年 11 月 19 日（金）には「光受容体フィトクロムによるゲノムワイドな転写開始点選択制御の発見」（講師：摂南大学農学部講師　牛島 智一氏）という演題でオンライン形式による講演をしていただいた。農学研究科教員を始め、農学部教員、大学院生、学部生からの参加があり、活発な質疑応答が行われた。

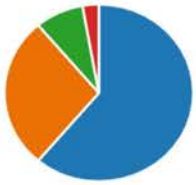
大学院英語アンケート結果

1. 学部4年生の時と比較して、大学院生になって英語に接する機会が増えたか？

	増えた	20
	変わらない	3
	減った	0

2. 現在、英語を使うのはどのような場面か（複数回答可）？

	英文読解	22
	英作文	10
	英会話	3
	その他	1

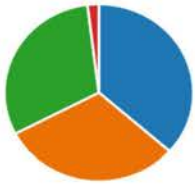


3. 研究を進める際に、新たな英語学習は必要か？

	とても必要	11
	必要	11
	必要ない（学部の英語学	1

4. 自分にとって学習が必要な英語力は何か（複数回答可）？

	単語力	19
	文法理解力	16
	ヒヤリング能力	16
	その他	1



5. Webの英語翻訳プログラム（Google翻訳など）を使用したことがあるか？

	ある	23
	ない	0

6. 5. で、「ある」と答えた人は、英語翻訳プログラムにどの程度依存しているか？

	ほとんどの英文に関して	13
	時々使用	10

7. 大学院での英語に関する科目で、何か要望があるようでしたら、自由に書いて下さい。

スピーキングの機会が多いとありがたいです。
国際学会の時に知っておくと便利な言葉
必修で履修する科学英語では、論文要旨を作成する際に必要な表現を学ぶ時間と口頭発表を想定したスピーキングをメインに行う時間で構成されてますが、文法とスピーキングを別々の授業で行って頂きたいと思いました。科学英語の各7回ずつの文法とスピーキングの時間では慣れたタイミングで両方とも終わってしまい、感覚が掴めそうで掴めないもどかしい感じを経験し、希望しました。
課題(他の学生のAbstractの添削や、発表スライドの作成など)の重要性は感じたが、課題にかかる時間が非常に長く、他の授業課題や研究などに影響があった。学生によって英語力にかなり差があるため、授業のスピードや難易度が適切ではない学生もいたように感じる。

＜工学研究科＞

令和 3 年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習Ⅰ」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした 2 回の FD 研修会を計画に沿って実施した。大学院生によるアンケートについては、各科目の授業アンケートを実施したほか、令和 2 年度修了予定者を対象として令和 3 年 3 月にはじめて実施したアンケートを分析した。2 回の FD 研修会の内容について、実施計画では、「Zoom による遠隔授業の手法と実施例」、「数理・データサイエンス・AI 教育」に関する講演を予定していたが、いずれも講師の調整に苦慮し、前者についてはオンデマンド形式により実施、後者については、ESTEAM エリアに「Consilience Hall 2020」が完成したことから「玉川大学の ESTEAM 教育」に内容を変更して実施した。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

（1） 大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進

春学期および秋学期において大学院生による授業アンケートを実施した。対象科目は、工学研究科の大学院生が受講している全科目である。アンケートは遠隔で行われ、Microsoft Forms を用いて作成し、全面的に実施した。大学院生には PC やスマートフォンを用いてオンラインで回答を入力してもらい、その回答は匿名性を確保した上で収集した。

各科目の授業アンケートの結果は、授業改善に活用してもらうため、授業担当教員にフィードバックした。さらに、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論した後、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告とした。なお、秋学期の集計結果については、令和 4 年度初回の第 1 工学研究科会（令和 4 年 4 月 1 日）で報告する予定である。

この活動の成果として、授業アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの一連のプロセスを実施することができた。アンケートの回答率は、春学期が 70%、秋学期が 66%であった。集計結果から、回答があった授業科目においては特に問題は見出されず、良好であることが確認された。授業外学修時間の項目で、1 回の授業あたり 4 時間以上の十分な学修時間を取る学生がいる一方で、1 時間未満と回答する学生が同一科目内でもいたことから、主体的な学修については個人差が大きいことが確認された。

次年度も授業アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。さらに、アンケート結果に基づいた授業の改善とその効果の記録方法について、引き続き検討していく。

新たな試みとして、令和 2 年度修了予定者を対象とし、令和 3 年 3 月 8 日に「修了予定者を対象としたアンケート」を匿名により実施した。対象者は機械工学専攻修士課程、電子情報工学専攻、システム科学専攻博士課程後期の修了予定者 11 名であり、そのうち 9 名が回答した（回答率 82%）。これは工学研究科のアセスメント・ポリシーの定める「修了時の学生へのアンケート」に対応するアンケートであり、ディプロマ・ポリシーの評価の役割を担う。アンケート項目の作成に際しては、工学研究科の人材養成等教育研究に係る目的と照らし合わせて、工学研究科が研究教育活動を通じて育みたい人物像であるか否かを抽出できるかに留意した。

回答結果はまず教務担当者会で吟味された。研究指導教員への信頼の高さや今後の生活への意欲の高さをはじめとして、おおむね修了生は満足感をもって玉川から旅立つ様子が確認された。一方で、図書館利用回数の低さ、教養を高める活動への取り組みの低調さ、就職活動での苦労等も確認されている。また、このアンケートでは英語運用能力の向上に関しての意欲は十分に示されたが、TOEIC のスコアはその意識の高さとは裏腹であることも明らかになった。

回答の詳細は教務担当者の分析を添えて、令和3年度第1回第1工学研究科会（令和3年4月1日）で報告された。また、第3回第1工学研究科会（令和3年5月27日）で、アセスメント・ポリシーに基づき令和2年度の研究教育活動を点検した結果を報告する際に、このアンケートの基本統計が改めて報告された。

工学研究科会での報告により前年度修了者の抱く満足感や研究教育活動の中での改善必要箇所などを断片的ではあるが全教員で共有することができた。本アンケートは今回がはじめての実施のため、今後の継続的な実施が肝心であることを確認した。

次年度は、引き続きの実施はもちろんのこと、アンケートで検出された問題を分析し、解決へと向かわせるしくみについての議論の活発化を目指す。また、アンケートの検出精度・検出能力向上を目指しアンケート内容の追加・更新・削除の検討も行う。

（2）「専門演習Ⅰ」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習Ⅰ」は、修士課程1年生を対象とし、工学研究科の全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実際的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通した技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

技術発表会は令和3年9月16日（木）にオンライン（Zoom）口頭発表の形式で開催された。大学院生の発表11件に対して、教員19名、大学院生17名、学部生3名の計39名が参加した。参加した教員および他の学生との間で活発な質疑応答が行われた。科目の実施概要および発表会の審査結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果としては、前年度から引き続き教員だけでなく博士課程のTA（本年度は1名）を活用した実習指導によって、質の高い発表内容が見られ、研究科全体として継続的に大学院生の実践力強化のための教育方法の改善を確認することができた。

次年度も、履修者がより早い時期に具体的なテーマを決め、計画を適切に立案し、課題に取り組めるよう、4月当初に予定されている新入生ガイダンスで科目に関する説明をし、TAによる指導を効果的に取り入れ、内容の充実を検討していく。

（3） 大学院教育活動の質向上を目的としたFD研修会の実施

1） Zoomによる遠隔授業に関するFD 研修会

概要：新型コロナウイルス感染症への対策として多くの科目が遠隔授業で行われている。また、昨年度実施した教員による遠隔授業実施アンケートによると、工学部ではオンライン双方向型の授業の46%においてZoomが使用されていた（『令和2年度ファカルティ・ディベロップメント活動報告書』参照）。このような状況を踏まえ、遠隔授業の質の向上のため、Zoomによる遠隔授業に関する研修を行う。

到達目標：遠隔授業の質の向上

実施日：令和3年7月9日（金）～7月29日（木）

場所：オンライン（オンデマンド）

Zoom Japan FAQのサイト「教育機関向けウェビナー＆録画コンテンツ」で公開されている動画「教育従事者様向けトレーニング（応用編）」を視聴する動画視聴型の研修を実施した。受講期間は令和3年7月9日（金）～7月29日（木）とした。研修への参加状況の確認は授業運営課の協力のもとUNITAMAのアンケート機能を利用した。

この研修会には、工学部・工学研究科の教員 28 名が参加した。 研修終了後のアンケートでは以下のコメント（原文そのまま）が寄せられた。

- 秋セメからは対面授業となる可能性が高いと思われますが、Zoom を使う場面は今後もあると思いますし、動画により基本的な設定や操作を学べたことはとても有意義でした。
- 投票とチャットの記述内容と BOR を連携させる方法に興味をもった。早速試行したい。レポートの使い方を学修した。学生の受講状況（離席・退室と入室のアナログメモ）と照合したが Zoom 滞在時間がデータで確認できた。10～15 人前後の Zoom 授業では在室有無の視覚的な確認が容易だが、人数が多い Zoom 授業の場合、特にスライド共有し講義中は特定の学生の離席まで気が回らず、今後の出席管理対策を考える必要がある。
- (1)ビデオの利用、e ラーニングコースの利用というタイプの研修は、時間を拘束されずに自由な空き時間で研修を受けれて、とてもよい。(2) Zoom の投票、BOR、チャットの保存など、様々な機能を知ることができたのは収穫である反面、私はそんなに器用に同時にたくさんのことはできませんので使いこなすのはなかなかハードルが高そうです。
- 教育効果の測定について理論的に知りたいと思っています。
- オンラインでの研修は場所と時間を選ばずに受講できるので大変良いと思いました。コロナ禍で優良な録画コンテンツも増えていますし、今後も継続を希望します。内容もこの時期には適切であったと思います。
- 投票や小テストなど、今後の授業で役立つ内容について理解できた。今回のように情報提供を目的とする研修の場合は、今回のようなオンデマンド形式のはとても良いと感じた。受講者の都合に合わせて受講できるとともに、各自の事前の知識、関心によってビデオ再生の速度を変えることができ、時間を有効に使うことができるためである。

2) ESTEAM 教育に関する FD 研修会

概要：ESTEAM 教育を実践する ESTEAM エリアの建物である「Consilience Hall 2020」が完成した。また、ESTEAM 教育における異文化融合をベースにした「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」がスタートしている。ここであらためて ESTEAM 教育への取り組みを振り返るとともに ESTEAM 教育に関する理解をアップデートする。

到達目標：ESTEAM 教育に関する理解をアップデートする

実施日：令和 4 年 1 月 27 日（木）18：00～18：44

場所：オンライン（Zoom）

講師：相原　威 教授　（工学部長・工学研究科長）

工学研究科会の前に実施され、工学部・工学研究科の教員 34 名が参加した。講演では、STEM 教育から STEAM 教育を経て ESTEAM 教育へと至る経緯を時代背景とともに解説された。また、工学部マネジメントサイエンス学科・工学研究科機械工学専攻教務担当の小酒井正和教授による「複合領域研究 210 工農芸融合価値創出プロジェクト」の実践事例報告があった。

＜マネジメント研究科＞

（1）コースのカリキュラムや授業改善に関する検証

【報告】

大学院生（本学職員）の声をもとにコースのカリキュラムや授業改善に関する検証を行うため例年、大学院生、教員、人事部スタッフ参加による FD 会（ワークショップ）を実施している。今年度は対面での開催を避けるため、昨年度実施した大学院生に対する意見記述型のアンケートの要約を教員に共有し、コースのカリキュラムや授業改善に関する教員のみの FD 会を実施した。

【成果・課題】

FD 会において教員側から得られた課題や改善提案は次のとおりである。第一にスクール・マネジメント研究コースについて、MBA のようにある程度（5 年程度）の業務経験を経てからの方が、新卒での入学に比べ学修意欲が期待でき、より実践的な教育効果が得られるのではないかという点である。第二に、本研究科を現状のように日本型の修士課程とするのか、MBA 型コースと捉えるか今後の方向性を明確にすべきという点である。MBA 型コースと位置付けるならば、事前に経営学部科目を履修させることや、課題研究論文を廃止し、各科目で科目修了レポートを課す方法も考えられる。第三に、スクール・マネジメント研究コースにおける院生のバックグラウンドの違いである。経営学部出身者もいれば、他学部出身者もおり、研究分野に対する知識も多様である。現在は教員の裁量によってカバーしているが、フォローの仕組みや体制を検討する必要がある。

以上の課題は、研究科の問題以外も含まれるため、必要に応じて関係部署とも連携して取り組んでいく。次年度もアンケートの実施や FD 会などの機会を設けて大学院における授業の在り方や指導内容、今後のカリキュラムについて検討したい。

（2）課題研究セミナーⅠ・Ⅱの指導方法検証

【報告】

今年度は 2 名のスクール・マネジメント研究コースの院生が大学院を修了した。学位取得に向けて、課題研究の指導方法に関しての課題を共有した。この課題をどのように解決すべきかを次年度も引き続き共有し、解決の方策を教員間で共有したい。

【成果・課題】

スクール・マネジメント研究コースの院生が課題研究報告書を執筆するにあたり、研究テーマの設定方法や調査設計について関係者間での意思統一の必要性が認められた。FD 会において教員間の意見交換を行い、共通認識の醸成及びベストプラクティスの共有を図った。

（3）大学院生による授業アンケートの実施

【報告】

各セメスター終了後に全授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックし、授業改善に役立ててもらった。

【成果・課題】

記述式アンケートの内容をレビューしたところ、授業に対して特別に不満を感じていることはないことを確認した。院生によっては、英語科目で苦戦している様子が伺える。授業アンケートについては、次年度も継続して実施し、大学院生からの要望を把握するために実施したい。

＜教育学研究科＞

（1）【活動計画】研修会（FD 委員会）の開催

・研究科会後に FD 委員会を 8 回開催。（5/26、7/28、9/29、11/24、12/22、1/7、1/27、2/16）

【成果・課題】

・授業開講期間中、上記の日程で「授業および研究指導体制の改善について」の研修会（FD 委員会）を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。

・気になる学生の情報共有などをして、研究指導体制の見直しや改善を討論することができた。

（2）【活動計画】授業改善に関する議論

・春学期中間で 1 年生への Web アンケートを実施し、授業への意見、研究科での生活への意見を聞く。

【成果・課題】

・学生の意見から、全体及び個人の意見を抽出し、授業改善を討論することができた。

・院生室の使用状況や学習の取り組みなどを把握し、希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。

（3）【活動計画】研修会「Moodle の実践と活用の一例」（講師：教育学研究科 ビーバーフォード，カーティス教授・令和 3 年 6 月 30 日（水））の開催

・IB 科目だけ使用している Moodle について、実践報告および Moodle の一例を紹介しながら、Moodle の使用方法などを実践的に解説していただき、活用方法を学ぶ。

【成果・課題】

・教育学研究科の教員が Moodle への知見を深めることができ、各自の授業に使用できる可能性が高まった。

・課題としては、細かな使用方法については各自試用してみることが必要であった。

（4）【活動計画】研修会「心のケアの必要な大学院生の指導について　大学院生のメンタルヘルス」（講師：教育学部 原田眞理教授・令和 3 年 10 月 27 日（水））の開催

・心のケアが必要な大学院生の指導上の留意点を学び、想定事例を用いて所属教員内で共有する。

【成果・課題】

・症状や問題、発達の問題など、大学院生に多い心の問題、それらへの教員として配慮すべき点について学ぶことができた。本研究科に過去にあったケースも踏まえ、想定事例を用いて具体的に討論ができた。

・心のケアが必要な学生について、早期発見し、適切な指導ができるようになった。

・授業内での個人情報の取り扱いについての確認も行えた。

（5）【活動計画】学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

・春学期、秋学期終了後に授業アンケートの実施及び分析。

【成果・課題】

・アンケート内容を「授業方法に関する意見・要望」と「大学に関する意見・要望」に分けて分析し、特に後者において顕著であった「夜間大学院のオンライン授業を大学で受講する場合の照明延長」については、研究科長・教務担当を通して事務部門に申し入れをしてもらった。

・授業への要望については、教員間で話し合いを行い、改善につながるよう討議した。

＜教職大学院＞

（1）教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は、新型コロナウイルス感染予防対策（3 密、換気、消毒、衝立、3 部屋）をとり、対面と Zoom によるハイブリッド開催で 6 月 26 日（土）、11 月 27 日（土）の 2 回の日程で実施した。

◆令和 3 年 6 月 26 日（土）参加者 50 名（対面 38 名、Zoom12 名）

酒井 徹教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者： 現職 13 期：青山 明裕氏

SM14 期：粟飯原 美咲氏

◆令和 3 年 11 月 27 日（土）参加者 35 名（対面 30 名、Zoom5 名）

佐藤 修教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職 12 期：鈴木 真樹氏

SM12 期：永田 智也氏（Zoom）

① 成果

6 月 26 日（土）に第 1 回フォローアップ研修を対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式で行った。

修了生プレゼンテーションでは、青山 明裕氏と粟飯原 美咲氏に近況報告や SM へのアドバイス等をお話しいただいた。

現職 13 期：青山氏は「現場で役立つ処世術」をテーマに、学校の中核的な役割を担う上で教職大学院での学びが非常に役立っているということを、実例を交えてご紹介、また若手の教員の実態を通して、現在の院生に役立つ心構えなどをお話いただいた。

SM14 期の粟飯原氏からは、「初任者としての 1 年目」をコロナ禍での経験も踏まえてお話しいただいた。着任早々臨時休校となり難しい環境の中での子どもたちとの関わりについて分かりやすく伝えていただいた。クラスや学年の子どもたちの話をしている時の表情から、やはり教師は魅力的な仕事なのだと改めて思える発表であった。

グループディスカッションでは 4 グループ（対面 3、Zoom1）に分かれ、SM・現職・修了生・教授の立場から様々な意見が出て、活発な意見交換が行われた。

酒井 徹教授からは、「生徒指導における不易と流行」をテーマに研究報告がなされた。いじめ防止対策推進法の第 1 章第 4 条の「いじめの禁止」に着目し、教師は法律にいじめの禁止が載っていることを児童生徒に伝えなければならない。その上で、担任として学校組織の一員として「いじめのない学級作り」の想いを伝えることの大事さ等、教師としていじめにどのようにして向き合うかのヒントとなる講義であった。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。
https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_19092.html

11 月 27 日（土）に第 2 回フォローアップ研修が対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式で行われた。修了生プレゼンテーションでは、鈴木 真樹氏と永田 智也氏に近況報告や SM へのアドバイス等をお話しいただいた。

現職 12 期：鈴木 真樹氏は、「指導教諭という仕事はどのような仕事か」ということを中心にお話しされた。指導教諭の主な職務内容や指導教諭の実態について知ることができた。指導教諭について具体的に知る機会が少ない中、今回のお話は参考になるものばかりであった。

SM12 期：永田 智也氏は、「教師としての歩み」についてお話しされた。一人一人の子供たちへの向き合い方や授業準備の大切さ、教師としてやるべきことなど、とてもためになるお話であった。これから教壇に立つ私たちや、現職の先生方にも、心に響く内容であった。

グループディスカッションでは 4 グループ（対面 3、Zoom1）に分かれ、SM・現職・修了生・教授の立場から様々な意見の活発な意見交換が行われた。

佐藤 修教授からは、「教育 DX が授業風景を変える」のテーマで時代の変化に伴った教育のあり方についてお話しいただいた。GIGA スクール構想もあり、子供たちが受ける教育が変化していることや、求められる資質・能力も変化し続けていることが分かった。教師としてこれからどのような授業を作っていけば良いのかが明確になるお話であった。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。
https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_19695.html

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが、本年度も引き続き確認された。近々の課題を交流しあうブレイクアウトルームによるグループディスカッションも好評であった。

教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高める FD としての効果も引き続きねらっている。

教職大学院 OBOG の実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように活かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教授陣も知ることができる貴重な場となっている。グループディスカッションにおいても、教職大学院の講義が OBOG たちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することのできる貴重な機会となっている。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

また、OBOG からのアンケートについては、今年度から Google フォームを利用して意図的に蓄積していく取り組みを開始した。

② 課題

OBOG の参加者がやや少ない点が引き続き課題となっている。今年度から開始した Google ドメインによるメール連絡網や、有用リソースの整備等によって、修了した院生とのつながりが保てる工夫をしていくことが必要である。

（2）FD 授業研究について

5 月 6 日（久保田 善彦教授）、11 月 5 日（伊藤 美紀准教授）の 2 回の授業研究を実施した。

◆令和 3 年 5 月 6 日（木）15:00～16:40（担当：久保田 善彦 教授）

「算数科・理科指導の計画・実践・評価」

「理科における学習論」というテーマに対して、概念地図（コンセプトマップ）を作ることから始め、今後のベースとなる理論の枠組みを分かりやすく整理した内容であった。対面授業の中で、新型コロナウイルス感染症の対策を踏まえ、オンラインで役に立つ Google Classroom の使い方、Zoom 等の Web 会議で活用できるカメラの紹介など多岐にわたる情報交換の機会にもなった。

◆令和 3 年 11 月 4 日（木）15:00～16:40（担当：伊藤 美紀 准教授）

「教員の在り方と資質の向上」

保護者とのコミュニケーションや好ましい関係の構築は、学級担任としても学校全体としても、非常に重要なテーマであり、授業はロールプレイ等の活動を入れながら活発に展開した。教職専門実習中である SM にとって臨場感を高める演習となった。教員としての立ち振る舞いが問われる事例を通して、院生にとって新たな学びの場となった。

・例年通り、協議会においては、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②SM の実践経験不足を補う指導法について、③現職院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が一層活発になされた。

① 成果と課題

・教授陣が毎年、授業の研鑽に努めていることが、院生たちに良い印象を与えている。

・対面での授業が実施できて良かった。今後も定期的に継続していく予定である。

（3）教授陣に対する調査について

・FD の一環として、SM や現職院生の学習理解等に関する教員の所感を調査した。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされた。

① 相互授業参観について

・各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観し、その際の学びや感想等を記録として残すようにした。互いの学びを蓄積することによって次年度へ活かしている。

（4）FD 委員会における情報交換

・毎月の教職大学院会終了後に FD 委員会を開催し、院生に関する諸問題と指導方針、教授間の連携、カリキュラムや組織のあり方について検討している。

① 成果

例年、問題をかかえている院生への教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々についての情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができているが、今年は特に大きな問題は見当たらなかった。

②課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

＜脳科学研究科＞

（1） 令和 4 年 2 月 21 日に玉川大学脳科学ワークショップを実施した（オンライン開催）。全大学院生の研究発表に関して、教員全員で評価し、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。また、同発表内容に関して擬似ピアレビューを開始した。ピアレビューは年度を越えて 5 月中には完了する予定である。

（2）令和 2 年度に実施した玉川大学総合人間科学ワークショップにおける大学院生の研究発表を元に擬似ピアレビューを実施した。その結果を全教員で共有し議論した上で、効果的な研究指導のあり方を検討し、今後の研究指導に反映することを確認した。

（3）研究環境整備に関する需要の調査と整備を行った。特に新設した Human Brain Science Hall の大学院生環境の整備を行った上で、今後の環境整備計画にフィードバックした。

（4）履修者が 1～2 名である科目が多いため、匿名性を確保するために、研究科全体に対する研究科評価アンケートを実施した。

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会

令和4年度採用の新任教員（助教以上）23名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力･連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で20回目の開催となった。

日　　時：令和4年3月14日（月）10:00～16:50
場　　所：大学教育棟 2014　612教室
対　　象：令和4年度採用教員（助教以上）
研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。
　　専任教員としての業務に必要な知識を得る。
到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。
　　専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

（1）研修プログラム内容

10:00	開始／研修説明	教学部 教務課
10:05	新任教員自己紹介	新任教員
10:30	講演「玉川大学の教育理念」	稲葉 興己 高等教育担当理事
11:20	休憩	
11:30	大学教員の勤務について	人事部 人事課
11:50	教学事項について	教学部　教務課・学務課・授業運営課
12:30	昼食	
13:30	本学の ICT 教育を活用した教育	学生支援センター 学修支援課
14:10	教学システム（UNITAMA）について	教学部 授業運営課・教務課
14:30	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
15:00	休憩	
15:10	学生支援について	渡邊 透 学生支援センター長
15:30	講演「これからの大学に必要なこと」	中村 好雄 教学部長
16:20	質疑応答	
16:30	各種事務手続き ①写真撮影（キャンパスカード用） ②契約内容の説明等	教学部 教務課・人事部 人事課
16:50	研修会終了	

【動画視聴】	コンプライアンス方針	監査室
	個人情報保護方針	総務部 総務課
	ハラスメント防止研修	人事部 人事課（顧問弁護士）
【任意研修】	キャンパス・ツアー　　3 月 28 日（月）13:00～15:30	

（２）配付資料・参考資料

資料	担当
令和４年度新任教員研修会＜研修プログラム＞	教学部教務課
令和４年度新任教員研修会　名簿	
玉川大学の教育理念	稲葉　興己　玉川学園高等教育担当理事
大学教員の勤務について Web 勤怠操作ガイド 私学共済制度　新規加入者向けリーフレット WELBOX 会員に関する案内	人事部人事課
学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要、担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図（令和４年４月１日施行） 教学部の役割（学校法人玉川学園組織事務分掌細則） 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料	教学部教務課
ご着任にあたって 研究室・内線番号 各種事務手続きについて	教学部学務課
令和４年度　新任教員研修会　教務事項 令和４年度　年間授業計画 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック 高等教育機関所属教員対象　４月１日教授会・研究科会	教学部授業運営課
玉川大学の ICT を活用した教育 オンライン授業支援	学生支援センター　学修支援課
教学システム　UNITAMA について －担当授業、教室確認、シラバス、学生ポートフォリオ－ UNITAMA 教員業績について　～目的と操作方法～	教学部　授業運営課・教務課
WebNotes について	総務部情報基盤システム課
学生支援について	学生支援センター
これからの大学教員に必要なこと	中村　好雄　教学部長

（３）実施の成果

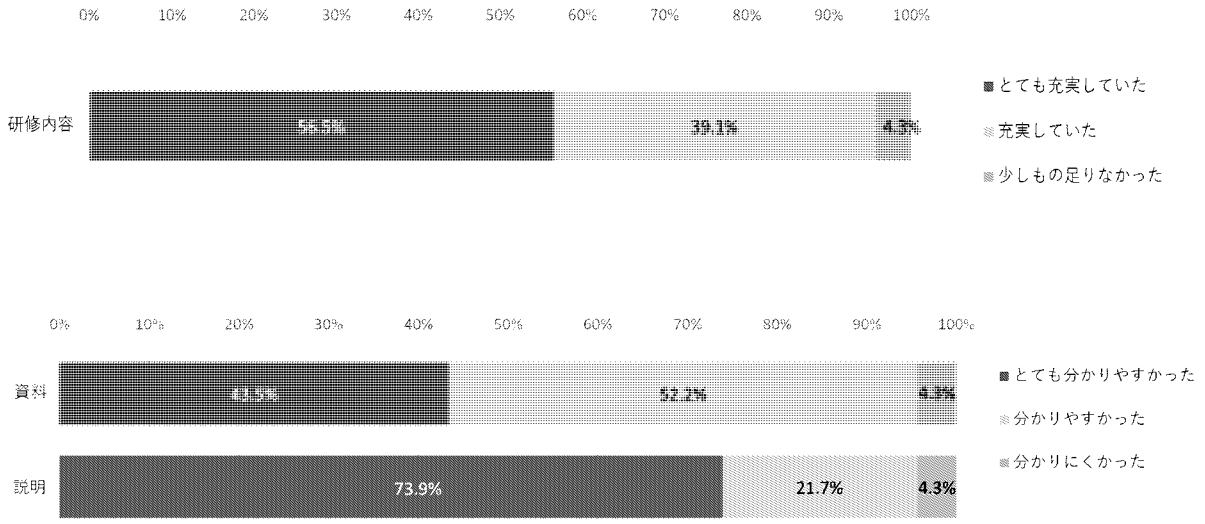
本学における教育について参加者に理解を促すため、2 つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導だけではなく、大学で働く教員に期待されていること、本学で求められる教育が何かを伝えることができた。

また、大学教員の勤務や教学事項、ICT 等について担当部署より説明し、勤務や業務について採用後に必要となる知識を提供することができた。なお、「玉川学園のコンプライアンス方針について」、「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」、「ハラスメント防止研修」は動画視聴による研修を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員としての自覚を促すことができた。

キャンパス・ツアーについては、任意参加の研修であったが、23 名中 8 名の参加があり、約 2 時間半をかけて、大学教育棟 2014 や小原記念館、Sci Tech Farm TN Produce（LED 農園）、Human Brain Science Hall などを巡り、本学の理念や教育に関わる施設への理解を深めた。

受講者から提出された研修受講報告書では、以下のとおり研修内容、資料、説明の肯定回答がそれぞれ 96%であり、参加者のニーズに沿う充実した内容の研修を実施することができたと考えている。

＜研修受講報告書 ―内容、資料、説明について―＞



「何がもっとも印象に残りましたか」という受講報告書での質問に対しては、以下の回答があった。

・玉川大学の教育理念、小原國芳先生の全人教育論が印象に残った。
・建学の精神について理解が深まった。
・創立者の話を含む学園の歴史、学園の価値観が印象に残った。
・全人教育の意味をよく理解できた。
・玉川大学の教育理念および教学事項が印象に残った。

・玉川大学の全人教育などに関して改めて学ぶことができた。また、大学教員としての心構えを学ぶことができた。
・玉川大学の教育理念やこれからの大学に必要なことという二つの講演が心に残った。これから、大学で勤務する自分にとって、何を大切にして仕事をすべきかということを考える契機となった。
・大学教員としてのミッションについて改めて再認識できた。
・玉川学園の歴史と理念など、大変勉強になった。人を育てるということを、歴史や理念を理解することにより、さらにより深く考えていける。
・新たに覚えることも多く、不安などもあるが、支援体制の充実さも同時に説明を受けたため、何とかやっていけそうな気がする。
・畑からの校舎、塾、学校のために駅を作り電車を停める。小原先生や創立当日の先生方の情熱をまた感じることができたことが印象的だった。教育への情熱を持ち続けていきたい。また、近年、学生が巻き込まれやすい事件などは、SNS や詐欺など色々な手口があるため教員として様々な情報に普段から気をつけたい。
・学生支援の話が印象に残った。学生の実情を少しでも知ることができてよかった。
・入職前に、沿革や校風についての講演以外にも、今後利用するシステムの使い方などの講習がなされた点そのものが、非常に手厚い印象をもった。
・建学精神、教育理念にもとづいて、学生や教員の利便性を重視した効果的なシステムの構築に取り組まれていることに感銘を受けた。それらのシステムを円滑に運用できるよう、着実に準備を進めたい。
・UNITAMA、Blackboard、Notes など様々なツールを併用していることが印象的だった。

受講報告書の回答結果からも本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。次年度に向けて、より本研修会の質が向上するよう改善に努める。

参 考 資 料

参考資料１．大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 5 月 10 日（月）17：15～18：25
場 所 ： 大学教育棟 2014　793 会議室
議 案 ： (1) 年間開催日程に関する件
(2) FD 研修会等計画に関する件
(3) 学生による授業アンケートの実施に関する件
報 告 ： (1) FD 活動計画の提出について
(2) 「令和 2 年度　ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について
(3) 資料の掲載方法について

第 2 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 7 月 1 日（木）17：15～18：25
場 所 ： 大学教育棟 2014　793 会議室
議 案 ： (1) 各学部 FD 研修会等計画に関する件
報 告 ： (1) 学生による授業アンケート（期末）の実施について
(2) 令和 2 年度　大学教育力研修受講アンケート（今後研修会で取り上げてほしいテーマ）回答について
(3) 秋学期授業参観実施に向けてのお願い

第 3 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 9 月 15 日（水）10：30～11：30
場 所 ： 大学教育棟 2014　793 会議室
議 案 ： (1) 春学期授業アンケート結果ならびに授業改善の取組みに関する件
(2) 秋学期授業参観計画に関する件
(3) 大学 FD/SD 研修会（案）に関する件
報 告 ： (1) 東京都市大学　教育コンテンツ集公開について

第 4 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和 4 年 1 月 12 日（水）　15：00～15：35
場　所　：　大学研究室棟　B104 会議室
議　案　：　(1)　大学教育力研修実施計画に関する件
　　(2)　新任教員研修会実施計画に関する件
　　(3)　「学生による授業アンケート」レポートの改修に関する件
報　告　：　(1)　大学 FD／SD 研修会「新型コロナウイルス感染症」（12 月 14 日）の実施報告について
　　(2)　大学 FD／SD 研修会「ハラスメント防止研修」について
　　(3)　令和 3 年度秋学期　授業公開参加状況について
　　(4)　令和 3 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

第 5 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和 4 年 3 月 25 日（金）　13：30～14：10
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室
議　案　：　(1)　令和 4 年度 大学 FD 研修会「所有権と学校生活」動画視聴に関する件
報　告　：　(1)　授業アンケートについて
　　(2)　令和 3 年度各学部 FD 活動報告について
　　(3)　令和 3 年度大学教育力研修（2 月 18 日）実施報告について

参考資料２．大学院 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学院 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 5 月 19 日（水） 17:15～17:50
場 所 ： 大学研究室棟 B101 会議室
議 案 ： (1) 年間会議開催日程に関する件
(2) FD 研修会等計画に関する件
(3) 各研究科 FD 活動計画の作成に関する件
報 告 ： (1) 「令和2年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について
(2) 資料の掲載方法について

第 2 回大学院 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 9 月 14 日（火） 10:00～11:00
場 所 ： 大学教育棟 2014 793 会議室
議 案 ： (1) 各研究科 FD 研修会等計画の中間報告に関する件
(2) 大学 FD/SD 研修会（案）に関する件
報 告 ： (1) 「授業アンケート」および「工学研究科修了者／単位取得満期者向けアンケート」について

第 3 回大学院 FD 委員会

日 時 ： 令和 4 年 3 月 24 日（木） 16:30～17:10
場 所 ： 大学教育棟 2014 793 会議室
議 案 ： (1) 令和 4 年度 大学 FD 研修会「所有権と学校生活」動画視聴に関する件
報 告 ： (1) 令和3年度各研究科FD活動報告について
(2) 令和3年度大学教育力研修（2月18日）実施報告について

参考資料３．「授業アンケート」様式

123456789 科目Ａ（教員Ｂ）

授業アンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。
なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

今学期は、対面授業を中心に、ハイブリッド授業、オンライン授業を併用して授業を実施しました。設問により回答しづらい場合は、「どちらともいえない」を選択してください。

あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）
○ 4時間以上　○ 3時間～4時間未満　○ 2時間～3時間未満　○ 1時間～2時間未満　○ 1時間未満

2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

10. 教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

11. 授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか（必須）
○ とてもそう思う　○ そう思う　○ どちらともいえない　○ そう思わない　○ 全くそう思わない

12. 授業時間を有効に使っていましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

13. 質問に適切に対応してくれましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

自由記述欄

その他、意見、感想等を記述してください【100字以内】
（授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業評価と直接関連しない意見や誹謗中傷は控えてください）

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

回答

※ 期中は設問8～15および自由記述のみ実施した。

参考資料４．玉川大学 FD 委員会規程

（平成 15 年４月１日　制定）
（平成 21 年４月１日　改正）
（平成 31 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長は教学部長とする。
３　委員は、各学部のＦＤ担当があたる。
４　委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
５　委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
６　本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
７　前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　部会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）
第６条　各分科会は、ＦＤ担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。
２　各分科会にはＦＤ活動を円滑に進めるため、ＦＤｅｒ（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「ＦＤｅｒ」）を置く。ＦＤｅｒはＦＤ担当が兼ねることができる。

（答申）
第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）
第８条　前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。
（実施事項の運用）
第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
（事務主管）
第10条　　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則
この規程は、平成 15 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 21 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 31 年４月１日から施行する。

参考資料５．玉川大学大学院 FD 委員会規程

（平成 19 年４月１日　制定）
（平成 29 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長並びに委員、アドバイザー及び事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
３　学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
４　本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。
５　前項による分科会のまとめ役は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　分科会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）
第６条　各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。
（答申）
第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）
第８条　前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。
（実施事項の運用）
第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、研究科会及び教育研究活

動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
（事務主管）
第10条　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則
この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附　則
この規程は、平成29年4月1日から施行する。

令和 3 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
令和 4 年 6 月 発行
〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1